

# 京都大学大学文書館研究紀要

## 第 18 号

### 論文

新制国立大学における学長選考  
—1953年神戸大学の事例—

西山 伸 < 1 >

### 論文

戦時期京大の学術研究

富永 望 < 15 >

### 論文

イングランドの地方公文書館における外部資金の活用

元 ナミ < 37 >

### 論文

京都帝国大学における図書疎開  
—附属図書館所蔵貴重和漢書の事例を中心に—

川口 朋子 < 53 >

### 資料紹介

西田直二郎日記(1)

入山 洋子 < 69 >

『京都大学大学文書館研究紀要』編集要項< 115 >      編集後記< 116 >

## 京都大学大学文書館

2020年 3 月19日

## 新制国立大学における学長選考 —1953年神戸大学の事例—

西山 伸†

### はじめに

1949年5月31日公布の国立学校設置法によって一斉に発足した新制国立大学は、よく知られているようにその多くは複数の高等教育機関が統合されたものであった。発足2日後の6月2日、各大学の学長も一斉に発令されたが、これは大学設置委員会の審議を経て文部大臣が任命したものである<sup>(1)</sup>。

この時期、国立大学をめぐる大きな争点の一つは、大学管理の制度をどのように構築するかということであった。1948年の「大学法試案要綱」、翌年公布の「教育公務員特例法」、さらにその後の管理法案挫折に至る経緯は、大きな流れとしてはすでに研究されてきている<sup>(2)</sup>。

しかし管理制度の中の学長選考については、これまで実証的研究が積み重ねられてきたとはいえない。旧帝国大学のように、従来から学長（総長）選考制度が定着していた大学ならばともかく、それ以外の大学にとっては、文相任命だった新制発足後最初の学長がどのようにして人選されたか、そして彼らの多くの任期が満了する1953年における事実上最初の学長選考がいかに行われたか、などは重要な問題だったはずである<sup>(3)</sup>。

その状況が最近になって少し変化してきた。羽田・金井の研究<sup>(4)</sup>は、戦前から国立大学法人化後までを視野に入れ、国立大学長の選考方法、出身

大学・学部等を包括的に調査したものである。特に新制最初の学長に関して、前職や出身大学を調べているのは興味深い。一方、廣内の研究<sup>(5)</sup>は、岐阜大学初代学長の青木文一郎の選考過程を前身学校（農林専門学校、師範学校、青年師範学校）の一次資料を使って跡づけたもので、前身学校それぞれが選んだ候補者から、岐阜大学創設準備委員会における審議によって学長候補者が選考されており、文部省等の介入によるのではなく自主審査が機能していたと論じている。

こうした研究動向を踏まえつつ、本論では1953年の神戸大学における学長選考過程を検討する。神戸大学を取り上げた理由は二つある。第一は、新制神戸大学は神戸経済大学をはじめとした多くの教育機関が統合されて発足しており、新制国立大学発足時の困難な運営が分かりやすい形で示されていることである。そして第二は、神戸大学大学文書史料室にこの時期の学内での議論を詳細に記した史料が残されていることである。この史料によって、われわれは学内の対立点は何で、それがどのように終熄していったのか見ていくことが可能である。神戸大学の事例の検討によって、1950年代前半における国立大学管理の問題を考える手がかりの一つが提示できればと考えている。

† 京都大学大学文書館教授

## 1 前史

### —初代学長の選出と管理機構の設置—

他の国立大学と同様、新制神戸大学は1949年5月31日、国立学校設置法公布によって発足した。同法第3条に規定された神戸大学の学部および包括された旧制の教育機関を学部への改編が分かるように示したのが表1である（このほかに経済経営研究所があった）。このように7校の旧制教育機関を包括し、そこから6つの学部が置かれた神戸大学だが、こうした新制大学にありがちであったように、キャンパスも分散していた。分散から統合へは極めて複雑な経緯をたどっているが、学舎ごとのキャンパスのありようと、その統合過程を図で示してみたのが図1である。統合過程そのものは本論の対象ではないので、詳しくは触れないが、とりあえず本論で扱う1953年の時点では、

表1 新制神戸大学発足時の学部と包括された教育機関

| 包括された教育機関      | 学部   | 備考        |
|----------------|------|-----------|
| 姫路高等学校         | 文理学部 |           |
| 神戸経済大学予科       |      |           |
| 兵庫師範学校         | 教育学部 |           |
| 兵庫青年師範学校       |      |           |
| 神戸経済大学         | 法学部  |           |
|                | 経済学部 |           |
|                | 経営学部 |           |
| 神戸経済大学附属経営学専門部 |      | 1951年3月廃止 |
| 神戸工業専門学校       | 工学部  |           |

神戸経済大学を前身とする法・経済・経営の3学部が六甲台（神戸市灘区）という山手にあり、その他の学部や教養課程は神戸市から姫路市に至る海側に位置していた（工学部の2学舎はともに神戸市長田区、文理学部と教養課程の一部があった御影は神戸市東灘区、教育学部のあった住吉も神戸市東灘区にあった）ことを確認しておきたい。

また、1952年度における各学部の教員数、入学者数は表2のとおりである<sup>(6)</sup>。行論との関係でいえば、後で述べるように学長選挙の有権者は講師以上とされたが、その数は法・経済・経営の六甲台学舎にある三学部の合計と、それ以外の学部の合計では相当な開きがあった。

新制神戸大学の初代学長には、神戸経済大学の学長であった田中保太郎が就任した。帝国大学以外の旧制大学を含んだ新制大学では、初代学長は内部昇格と外部招聘とに分かれ、中には内部対立が激しく文部官僚が着任した例（東京教育大学）もある<sup>(7)</sup>。ことを考えると、比較的スムーズに決まったように見える。

初代学長選挙の際に制定された「神戸大学初代学長候補者撰考規程」は次のとおりである<sup>(8)</sup>。

第一条 神戸大学設立準備委員会が文部大臣に対して推薦する神戸大学初代学長（以下学長と略称する）候補者の撰考はこの規程

| 包括された教育機関 | 学舎名 | 学部等 | 1951 | 1953 | 1962 | 1963 | 1968 |
|-----------|-----|-----|------|------|------|------|------|
| 神戸経済大学    | 六甲台 | 法   |      |      |      |      |      |
|           | 六甲台 | 経済  |      |      |      |      |      |
|           | 六甲台 | 経営  |      |      |      |      |      |
| 神戸工業専門学校  | 西代  | 工   |      |      |      |      |      |
|           | 松野  | 工   |      |      |      |      |      |
| 姫路高等学校    | 姫路  | 教養  |      |      |      |      |      |
| 兵庫師範学校    | 住吉  | 教養  | 御影   |      |      |      |      |
|           | 住吉  | 文理  |      |      |      |      |      |
|           | 住吉  | 教育  |      |      |      |      |      |
| 兵庫青年師範学校  | 城北  | 教育  |      |      |      |      |      |
| —         | 明石  | 教育  |      |      |      |      |      |

図1 神戸大学キャンパスの変遷

表2 神戸大学各学部教員数および入学者数（1952年度）

|      | 教員数 |     | 入学者数 |
|------|-----|-----|------|
| 文理学部 | 教授  | 28  | 130  |
|      | 助教授 | 50  |      |
|      | 講師  | 25  |      |
|      | 助手  | 19  |      |
|      | 小計  | 122 |      |
| 教育学部 | 教授  | 11  | 440  |
|      | 助教授 | 32  |      |
|      | 講師  | 13  |      |
|      | 助手  | 17  |      |
|      | 小計  | 73  |      |
| 法学部  | 教授  | 3   | 80   |
|      | 助教授 | 10  |      |
|      | 講師  | 1   |      |
|      | 助手  | 2   |      |
|      | 小計  | 16  |      |
| 経済学部 | 教授  | 13  | 230  |
|      | 助教授 | 8   |      |
|      | 講師  | 2   |      |
|      | 助手  | 6   |      |
|      | 小計  | 29  |      |
| 経営学部 | 教授  | 10  | 230  |
|      | 助教授 | 7   |      |
|      | 講師  | 4   |      |
|      | 助手  | 3   |      |
|      | 小計  | 24  |      |
| 工学部  | 教授  | 15  | 140  |
|      | 助教授 | 19  |      |
|      | 講師  | 6   |      |
|      | 助手  | 13  |      |
|      | 小計  | 53  |      |
| 計    | 教授  | 80  | 1250 |
|      | 助教授 | 126 |      |
|      | 講師  | 51  |      |
|      | 助手  | 59  |      |
|      | 総計  | 316 |      |

によって之を行う。

第二条 学長の任期は之を四年とする。

第三条 学長候補者は神戸大学教授予定者及び之と同等以上の学識人格ある者の中より之を撰ぶ。

第四条(1) 準備委員会は次条によって公選せらるべき学長候補者を推薦する。

(2) 学長候補者を推薦する準備委員会は十二名以上の委員が出席しなければ投票をなすことができない。

(3) 出席委員八名以上の投票を得た者を以下準備委員会の推薦する学長候補者とする。但しこの外に出席委員五名以上の投票を得た者があるときは、之を学長候補者に加える。

第五条(1) 準備委員会の推薦した学長候補者が一人であるときは之につき信任投票を二人であるときは之につき選挙を行う。(以下この二者を公選と略称する)

(2) 公選に於て投票をなし得る者は神戸大学教授助教授（共に兼任を含む）及び主事の予定者とする。

(3) 準備委員会は推薦候補者を定めるときは、遅滞なく各投票権者に対してその次第、候補者に関する資料、公選の日時場所及び方法その他必要な事項を記した書面を以て公選の通知をなす。但し参加諸学校の現任教官たる投票権者に対しては所属学校長に対する通知を以て之に代える。

(4) 公選の日は通知発送の日より二週間以前であってはならない。

(5) 有効投票の過半数を得た者を以て準備委員会が文部大臣に対して推薦する学長候補者とする。この場合準備委員会が推薦した候補者以外の者に対する投票は無効とする。

(6) 公選は準備委員会が之を管理する。

第六条 この規程に定めるもの、外必要な事項に関しては準備委員会委員長がその都度之を定める。但し重要な事項に関しては準備委員会の議を経なければならない。

ここでいうところの「神戸大学設立準備委員会」

表3 教育公務員特例法における「大学管理機関」読み替え一覧

| 条項      | 内容            | 学長         | 部局長        | 教員         |
|---------|---------------|------------|------------|------------|
| 第4条第1項  | 採用・昇任の選考      | 協議会        | 学長         | 教授会の議に基き学長 |
| 第4条第2項  | 採用・昇任の選考基準決定  | 協議会の議に基き学長 | 協議会の議に基き学長 | 評議会        |
| 第5条     | 意に反する転任の審査    | 協議会        | 学長         | 評議会        |
| 第6条     | 意に反する免職・降任の審査 | 協議会        | 学長         | 評議会        |
| 第7条     | 休職期間決定        | 協議会の議に基き学長 | 協議会の議に基き学長 | 協議会の議に基き学長 |
| 第8条第1項  | 任期            | 協議会の議に基き学長 | 協議会の議に基き学長 | —          |
| 第8条第2項  | 停年            | —          | —          | 評議会の議に基き学長 |
| 第9条     | 懲戒            | 協議会        | 学長         | 評議会        |
| 第10条    | 任命権者への申出      | 学長         | 学長         | 学長         |
| 第11条    | 服務に関する必要事項決定  | 協議会の議に基き学長 | 協議会の議に基き学長 | 協議会の議に基き学長 |
| 第12条第1項 | 勤務成績の評定       | 協議会        | 教授会の議に基き学長 | 教授会の議に基き学長 |
| 第12条第2項 | 勤務成績の評定基準決定   | 協議会の議に基き学長 | 協議会の議に基き学長 | 協議会の議に基き学長 |

とは、新制神戸大学の設置立案機関として置かれていた神戸大学設置準備委員会を指す。同委員会は、表1の包括される教育機関から1名ずつ（神戸経済大学のみ2名）、設置予定学部から1名ずつ（文理学部のみ2名）の計15名に加え、専門委員として設置予定学部から1名ずつ（文理および教育学部は2名）の計8名、合わせると23名で構成されて、1948年7月7日に設置されていたものである<sup>(9)</sup>。

この規程によれば、準備委員会における投票によって1名ないし2名の学長候補者が推薦され、それに対して教授助教授予定者が投票を行うとなっており、準備委員会が推薦した候補者以外への投票は無効とされている。また、学長の任期は4年であった。

この規程に基づいて、準備委員会では田中保太郎のみが候補者として推薦され、2月7日信任投票が行われた<sup>(10)</sup>。その結果、有権者総数199のうち有効投票数182、田中信任への賛成145反対37をもって田中が学長候補者として選ばれたのである<sup>(11)</sup>。

この他、全学の管理機構についても簡単に確認しておきたい。周知の通り、1949年1月12日公布の教育公務員特例法においては、大学の学長、教員、部局長の採用・昇任選考、意に反する転任・

免職の審査、休職期間・任期（教員を除く）・停年（教員のみ）の決定、懲戒の審査については「大学管理機関」が行い、その任用・免職・休職・復職・退職および懲戒処分などは「大学管理機関」の申出にもとづき任命権者が行くとされていた。そして、この「大学管理機関」については、項目ごとに読み替える機関が暫定的に定められていた。複雑に定められたこの読み替えをまとめたのが表3である。

神戸大学では、この規定を踏まえて全学管理機構として協議会と評議会を置いた。協議会は、1949年11月17日制定の神戸大学協議会暫定規程によれば、学長・学部長・経済経営研究所長・附属図書館長・学生部長・分校主事・教養課程主幹・第二課程主幹・評議員を構成員とし、学部・研究所の創設および廃止、教育公務員特例法に規定する付議事項、協議会規程の改正・評議会規程の制定および改正、ならびに学長が付議または諮問することを必要と認めた事項について付議されるものとした<sup>(12)</sup>。

一方、評議会については行論との関係上、神戸大学評議会暫定規程の関連部分を次のとおり掲げておく<sup>(13)</sup>。

第一条 神戸大学評議会は学部長及び評議員で組織する。

表4 神戸大学部局長、評議員等一覧（1953年6月前後）

|          | 1953年6月以前 |       |       |     | 1953年6月以後 |       |      |
|----------|-----------|-------|-------|-----|-----------|-------|------|
|          | 部局長       | 評議員   |       |     | 部局長       | 評議員   |      |
| 文理学部     | 佐藤徳意      | 今井林太郎 | 荒木良雄  | 楠正実 | 今井林太郎     | 荒木良雄  | 佐藤徳意 |
| 教育学部     | 塩尻公明      | 黒田英一郎 | 竹村一   |     | 塩尻公明      | 黒田英一郎 | 岡本重雄 |
| 法学部      | 北村五良      | 俵静夫   | 山戸嘉一  |     | 柚木馨       | 尾上正男  | 八木弘  |
| 経済学部     | 坂本弥三郎     | 宮田喜代蔵 | 北野熊喜男 |     | 坂本弥三郎     | 宮下孝吉  | 宮下忠雄 |
| 経営学部     | 福田敬太郎     | 古林喜楽  | 平井泰太郎 |     | 福田敬太郎     | 野村寅三郎 | 山下勝治 |
| 工学部      | 城野和三郎     | 佐藤芳夫  | 伴潔    |     | 城野和三郎     | 佐藤芳夫  | 伴潔   |
| 経済経営研究所  | 柴田銀次郎     |       |       |     | 柴田銀次郎     |       |      |
| 図書館      | 新庄博       |       |       |     | 新庄博       |       |      |
| 分校主事（御影） | 多田英次      |       |       |     | 百瀬弘       |       |      |
| 分校主事（姫路） | 内藤好文      |       |       |     | 内藤好文      |       |      |

・下線は新任

学長は評議会を招集してその議長となる。

第二条 評議会は構成員半数以上が出席しなければ開会することができない。

第三条 評議会に附議又は諮問する事項は次の通りとする。

- 一、学科並びに講座の設置及び廃止
- 二、教育公務員特例法に規定する評議会附議事項
- 三、学長が附議又は諮問することを必要と認めた事項

第四条 評議員は各学部教授中から各二名を互選する。但し文理学部においては三名を互選する。

前項の評議員の任期は二年とする。

ここで注意をしておきたいのは、評議員の選出数である。各学部から2名ずつとしているが、文理学部のみは3名と規定されている。これは同学部からの評議会出席者を文科と理科同数にするためであった。すなわち、学部長が文科出身であれば理科から評議員を2名、文科から1名、理科出身であればその逆としたのである。この選出方法はやがて問題とされるに至る。

以上のような経緯で、神戸大学では初代学長が選出され、暫定規則によってではあったが協議会と評議会という全学的な管理機関が設置された。

次に、1953年における学長選考規程の制定と学長選挙について見ていくことにする。

## 2 学長選考規程の制定（1）

### —1953年3月から5月まで—

新制神戸大学において学長選考について議論が開始されたのは、1953年3月5日の評議会であった。しかし、選挙が実施されたのは同年12月3日、選挙結果にもとづいて新学長が発令されたのは12月16日のことで、この間9カ月半を要した。学長選考の難航ぶりは一般紙でも報道されていた<sup>(14)</sup>。

この9カ月半は、神戸大学に残された詳細な資料を見ると大きく二つの時期に分けることができる。5月14日の協議会で選考規程が決定され同29日の投票が決定されるまでがまず一つの区切りとなる。その後評議会の構成が変わって選考規程が再度議論のうえ決定、学長が選考されるまでが次の区切りとなる。以下、学内での議論の経過を会議ごとに見ていくが、本節ではこのうちの前半の時期を扱うこととする。

なお、1953年6月の交替をはさんだ評議会の構成員を表4に示した。

### ① 3月5日評議会<sup>(15)</sup>

前述のように、学長選挙について議論が開始さ

れたのはこの評議会においてであった。ここでは実質的な議論は行われていないが、2点の資料が配付されている。そのうち1点は、「各国立大学学長選考基準調（昭二八、二）」である。これは、北海道・東北・東京・東京工業・一橋・東京教育・京都・大阪・岡山・九州の国立10大学における学長選考基準を調査した資料であり、紙幅の関係で詳細は省くが各大学における学長の被選挙権者、選挙権者、選挙方法、任期などが分かる。

もう1点の資料は、1952年8月13日付で国立大学協会の進藤小一郎事務局長から各国立大学学長宛に送られた「国立大学長の選考と任期についての委員会報告」である。この資料は次のとおりである。

#### 国立大学長の選考と任期とについての委員会報告

本協会第一常置委員会は、七月十八日（金曜日）、東京大学大講堂南側会議室において、同委員会を開催、かねてから懸案となっていた「国立大学長の選考と任期とについて」慎重審議を行った。その結果を左記及び別紙調書の通り一応中間報告いたします。

なほ、本件は次回の本協会総会に附議される予定であります。

#### 1、学長の選考について

##### （1）選考方式

二重選挙の方式を採ること。即ち推薦委員会を設けて、先ず学長候補者数名を選出する。この候補者から学長を選挙することとする。

##### （2）被選挙資格者

「適任者」とする。

教授、助教授と限定することなく、又学の内外を問はず、学長として適任と思われる者としてすること。

##### （3）学長候補者選挙資格者

（イ）推薦委員会は現に教授会を構成する

者の互選により、各学部から一定数の委員を選出して適當の員数を以て構成する。

##### （ロ）学長選挙資格者

原則として、教授会の構成員を選挙有資格者とするも、大学の事情によって、専任講師、事務局長、事務局各課長、厚生部長、厚生部各課長を加えることができる。

#### 備考

一般事務関係職員及び学生を加え、又はそれらの意を徴するなどのことは認めない。

#### 2、学長の任期について

##### （1）学長の任期については

国立大学管理法案第三十四条の定める通り、三年以上六年以内とし、再選を妨げないこととする。而してこの原則に基づいて具体的には各大学にて定める。

（2）所謂新制大学の現学長の任期については国立大学管理法及び公立大学管<sup>(理)</sup>利法の施行に伴う関係法律の整理に関する法律案の附則第六項の定めるところ（当該大学が設置された日から四年間）を認めるが、大学の事情によって若干期間の延長あるを妨げないこととする。

#### 備考

昭和二十八年内に行はれる新制大学長の選挙において同一人が選ばれた場合は、再選とは認めない。従って、その任期については、その大学が三年以上六年以内において定めたものによる。

これによると、国立大学協会は新制国立大学最初の学長選考にあたって、その基準についてのいわばガイドラインを準備していたことが分かる。主要内容としては、被選挙権者は学外者も含むこと、選挙資格者は原則として教授会構成員で専任講師

や一部幹部事務職員も加えることができること、推薦委員会を設けて数名の候補者をまず選考しそのうえで選挙を行うこと、などが当面の結論とされていた<sup>(16)</sup>。

#### ② 4月16日協議会<sup>(17)</sup>

その後、学長選考規程については3月12日評議会、4月2日協議会<sup>(18)</sup>で議論されている。この両会、特に後者では、被選挙権は学内の学長および教授とするのが多数、また選挙権は専任の教授・助教授・講師に限るとする意見に全員賛成となった。

意見が割れたのは、4月16日の協議会である。ここでは、選考にあたって推薦母体を設けることの可否が議論された。出席者の主な発言は次のとおりである。

学長 拘束はないが、国立大学協会では推せん母体を設けたらと云うことであった。〔中略〕選挙権者が多い本学は場所が離れている。非常な手数が掛る。推せん母体を設けると同上の不便がない。意見の交換が出来る。

俵<sup>(19)</sup> 単準選挙は民主的であるが、本学全体に適任者があるかわからない。〔中略〕各学部1人ずつ推せんしたらいい。

荒木 初めから一般投票をして絞ったらいい。  
福田 本学では分散しているので考慮しなければならぬので私は推せん母体を設けたい。

城野 単純選挙がいい。300人位だから直接選挙にすれば簡単で明瞭である。

内藤 直接選挙がいい。

北野 推せん母体を設けたらどうか。

このように、各学部が離れていることなどを理由に推薦母体を置くべきだとする意見と、置かずに単純選挙を主張する意見に分かれてしまっている。注意したいのは、神戸経済大学を前身とする法、経済、経営の各学部は前者、それ以外の学部・分

校は後者と、所属部局によって意見が分かれたことである。法学部出身の学長も、前掲の国立大学協会の報告を念頭に推薦母体が必要であると述べていた。結局この件は、決を取った結果16対9で推薦母体を設置することとなった。

#### ③ 4月30日協議会<sup>(19)</sup>

この日の協議会では、4月23日付の文部省からの通達「国立大学学長選考等に関する要項（第一案）（第二案）」「国立大学学部長選考等に関する要項（案）」が配付された。これらの要項は、すでに寺崎によって紹介されている<sup>(20)</sup>ように、学長選考については協議会あるいは学長候補者選定委員会が候補者を選定し最終的に協議会が決定するという第一案と、協議会あるいは学長候補者選定委員会が選定した候補について教授（助教授・講師も可）が選挙を行い最終的に協議会が決定するという第二案が提示されていた。

#### ④ 5月14日協議会<sup>(21)</sup>

その後、5月7日と14日の2回の協議会で学長選考規程が議論され、決定に至った。決定された学長選考規程を、行論に必要な箇所だけ引用すると次のとおりである。

第一条 神戸大学学長（以下学長という。）の選考は、この規程により神戸大学協議会（以下協議会という。）が行う。

第三条 学長は、本学に在職する学長及び専任の教授の中から選考する。

第四条 学長の選挙に投票を行うことのできる者（以下選挙権者という。）は、選挙公示の日の五日前において、専任の教官として、本学に在職する学長、教授、助教授及び講師とする。

第五条 協議会は、選挙のために学長候補者推せん委員会（以下推せん委員会という。）を設置しなければならない。

2 推せん委員会は、学長候補者を推せんする。

第六条 推せん委員会は、各部局において選ばれた次の委員をもって組織する。

一 経済学部、経営学部、法学部、工学部、教育学部、文科及び理科から各四名

二 教養課程（御影分校及び姫路分校）から四名

三 経済経営研究所から一名

第七条 推せん委員会が推せんする学長候補者は、次の二次の投票によって決定する。

一 第一次の投票においては、二名連記無記名により投票を行い、得票多数の者から十名を選び第一次候補者とする。

二 第二次の投票においては、前号の第一次候補者につき、単記無記名により投票を行い、得票多数の者から五名を選び、推せんすべき候補者とする。

第十一条 選挙は、投票によって行う。

2 投票は、一人一票とし、単記無記名による。

3 選挙権者は、推せん委員会の推せんした候補者以外の者に投票することをさまたげない。

第十六条 協議会は、選挙の結果に基き、学長の選考を行う。

第十七条 学長の任期は、四年とする。

2 学長は、重任することができる。但し、その場合継続して六年を超えることはできない。

このように、被選挙権は学内の教授、選挙権は学長・教授・助教授・専任講師に付与された。また、前述のように推薦母体として「推せん委員会」が設けられ各学部および教養課程から4名ずつ、研究所から1名が委員として選ばれ、この中でまず10名、次いで5名を投票で選び、その5名を全学で選挙し、その結果に基づき協議会が候補者を決定することとした。国立大学協会の示したモデ

ルのようになったわけだが、全学による選挙の際には推せん委員会の推薦した候補者以外に投票することも認められていた。

こうして5月14日の協議会で学長選考規程が決まり、21日推せん委員会開催、29日に投票が行われることも決まって、このまますんなり新学長が誕生するかと思われた。

### 3 学長選考規程の制定（2）

#### —1953年5月から12月—

第2節でみたように、5月14日の協議会で学長選考規程が決定したのだが、わずかその1週間後の評議会で状況が大きく変わっていくことになる。本節では、学長選考規程の再検討から、12月の新学長決定までを扱う。

#### ① 5月21日評議会<sup>(22)</sup>

この場において、5月12日付で文部省大学学術局長および文部大臣官房人事課長から「国立大学の評議会に関する暫定措置を定める規則の制定公布について」なる文書が送られてきたことが紹介されている。この「国立大学の評議会に関する暫定措置を定める規則」については、これまでの研究でも言及されてきている<sup>(23)</sup>が、ここで注目したいのは同規則の第2条にある評議会の組織についての規定で、そこでは評議員は学長、各学部長、各学部の教授2人、各附置研究所の長と定められていた。これでは、前述の神戸大学評議会暫定規程において文理学部から学部長以外に3名評議員を選出するとしていたことと整合しなくなってしまう。しかも、5月12日付の文書では「昭和28年4月22日付官報公布文部省令第11号で「国立大学の評議会に関する暫定措置を定める規則」（以下「規則」という。）が制定され4月1日から適用になりました」とされているように、この規則が4月1日まで遡及することが問題であった。

この評議会では、次のような発言があった。

学長 政令、省令の改正によりまして部局長を加えた従来の評議員で決定して頂いた選挙規程は…

古林<sup>〔ママ〕</sup> 法律が出ました以上、学長選挙をやっ  
て問題がなければいいが若し問題があれば  
正規の評議員でないことになるので問題に  
なると思う。

つまり、学長選考規程を審議してきたのは評議会  
および評議員を構成員とする協議会だが、その構  
成員たる評議員の中に正規でない者（文理学部の  
教授1名分）が入っていたため、そこでの決定が  
無効になるのではないかということであった。

## ② 6月24日協議会<sup>(24)</sup>

理不尽とも思える文部省からの文書に対して、  
学内の憤懣が露わになったのが6月24日の協議会  
であった。「こんな省令をどんどん出されると困  
るから警告して頂きたい」（今井）、「反抗せずに  
なぜ評議員の改選をするのか。もっと手を尽して  
から改選したらどうか」（城野）、「我々もあんな  
省令を出さない様、日本学術会議の総会の決議を  
もって申し出ているのである」（古林）など、省  
令への不満が相次いだ。

その一方、「あれを吞んでも不都合はないと思  
います」「あんな省令を出したので国立大学協会  
から釘をさされているのでそれでいいのでないか  
と思う」（学長）、「法の要求する評議会ではなけ  
ればならない。大体合致しているのでこのままで行  
こうと云うことは法律上認めがたい」（北村）、「出  
た以上知らないからと云って反抗することは出来  
ない」（平井）のように、省令および文書に従い、  
評議員を改選し学長選考規程を再検討すべきだ  
という意見もあった。古林を例外として、旧神戸  
大側が改選および選考規程再検討を主張し、それ  
以外の学部が不満を表明するという構図にここ  
でも注目したい。

そして種々の不満は表明されたものの、結局神

戸大学では省令に定められた形で各学部および研  
究所が評議員を改めて選出することになった。

## ③ 7月23日協議会<sup>(25)</sup>

6月24日の協議会をうけて、各学部では評議員  
の交替が行われ表4に示しているような構成とな  
った。その新評議員が招集された7月23日の協議  
会は、学長選挙の方法をめぐる紛糾した。主な発  
言は次のとおりである。

新庄 学長は学部には公平な人でないといけ  
ない。

圧倒的に多い学部から選出される可能性が  
大いに強い。

各学部から同数の学長選挙委員を選出して、  
そこで選挙する様にして、間接選挙、その  
数は各学部10名位、研究所2名位、それに  
協議員が加はる。

荒木 推せん母体を設けるのはいけないと意  
見を述べた筈である。

直接選挙を希望したのですが否定された。

山下 荒木さんの発言は単科大学の場合はそ  
れでいいが、総合大学としては、その様に  
すれば1学部が6学部を把握することにな  
る。

佐藤芳 直接選挙。

塩尻 新庄さんの発言について反撥意見あり。

佐藤徳 従来の直接選挙であったのをなぜ間  
接にせなければならないのか、新庄さんの  
案には反対である。

宮下孝 根本的にこの規程は反対である。

1、数で不適當の方が出られることがある。

2、本学では本学のやりかたでやったらいい。

他大学がどうあってもいい。

3、現実として選挙があった処と無った処  
とが加わって本学が出来たので差異があっ  
てしかるべきだ。

八木 吾々が納得行く選挙方法を考えたらいい

いのではないかと思う。

1、選挙権者 1、被選挙権者 1、選挙方法 に疑問をもっている。

学長 このまま行け（直接選挙）、間接選挙と云う意見が出たが今日決めることは出来ませんので次回火曜日（7月28日）2時開きますからよくお考え願いたい。

このように、5月14日決定の学長選考規程に対して異論が続出した。特に新庄博は、選挙権者の多い学部から学長が選出される可能性が高いとして、間接選挙を主張した。一方、新庄の意見に対する強い反発も複数の協議員から表明されている。新庄は図書館長の資格で出席しているが、所属は経済学部であり、ここでも5月決定の規程に反対するのは法、経済、経営、従来どおりの方法を主張するのが文理、教育、工学部とはっきり分かれていた。

#### ④9月3日協議会<sup>(26)</sup>

その後、7月28日、30日と立て続けに協議会が開催されたが、間接か直接かの対立が続き、結論を出せなかった。夏休み明けの9月3日の協議会では、学長から「間接、直接選挙で対立している、これを打開して頂く案を少数の委員会でも考えてもらう」との提案があり「各学部1名位、文理1名ずつ」による小委員会を設け、そこで学長選考方法について検討することとなった。

#### ⑤9月24日協議会<sup>(27)</sup>

前述の小委員会は9月5日に開催され、8日の協議会でその報告があった。この協議会では、何らかの形で推薦母体を設けることは諒解された。次いで24日に開かれた協議会でも小委員会の報告があり<sup>(28)</sup>、その後具体的な内容について議論が詰められていった。ここで一つ争点になったのは、推薦母体が推薦した人物以外への投票を認めるかどうかということである。すでに述べたように、

5月14日決定の学長選考規程では、被推薦者以外への投票も認められていたが、この場で改めて採決した結果、12対9で推薦委員会が推薦した者以外への投票は認めないことに決定した。

6月に評議会の構成が変わり、文理学部からの出席が1名減った分、法・経済・経営学部側の主張が通りやすい状況が生まれていたことが、この決定の背景にあったと考えられる。とはいえ、7月23日の協議会で新庄が主張したような間接選挙は、小委員会における検討の結果取り上げられることはなく、従来どおり推薦母体による被推薦者を全学の講師以上で投票する方法が採られることとなった。

#### ⑥10月15日協議会<sup>(29)</sup>

その後も10月1日、8日、15日と相次いで協議会が開かれ、学長選考規程について議論が繰り返された。そこでは、推薦する候補者を何名にするかなどについて検討が加えられ、結局10月15日付で学長選考規程が決定された。同規程を行論に必要な箇所のみ引用すると次のとおりである<sup>(30)</sup>。

第1条 神戸大学学長（以下学長という）の選考は、この規程により神戸大学協議会（以下協議会という）が行う。

第3条 学長は、本学に在職する学長及び専任の教授の中から選考する。

第4条 学長の選考は、選挙の結果に基づいて行う。

2 学長の選挙に投票を行うことのできる者（以下選挙権者という）は、選挙公示の日の5日前において、専任の教官として、本学に在職する学長、教授、助教授及び講師とする。但し、投票の日までに退職、配置換、転任等の移動により、前掲の教官でなくなつた場合は、投票を行うことはできない。

第5条 学長の選挙の投票は、学長候補者推薦委員会（以下推薦委員会という）の推薦

する候補者について行う。

- 2 推薦委員会は、協議員に分校主事1名を加えたものをもつて組織する。

第6条 推薦委員会の推薦する候補者の数は、3名とし、2名連記の投票によつて選ぶ。

第14条 学長の任期は、4年とする。

- 2 学長は、重任することができる。但し、その任期は継続して6年を超えることはできない。

前述のように、全学の投票は推薦委員会の推薦する候補者について行う（第5条）とされたこと以外は、推薦委員会による候補者が5名から3名になったのが5月14日制定の規程と比べた主な変更点であった。全体として、全学投票のできる対象者が狭まったと言うことができよう。

#### ⑦11月5日学長候補者推せん委員会<sup>(31)</sup>

決定された学長選考規程にもとづき、学長候補者を推薦する推薦委員会が11月5日に開かれた。議事録によると、経済学部長の坂本弥三郎が、経営学部長の福田敬太郎、経済学部教授宮田喜代蔵、経済経営研究所長柴田銀次郎を推薦し、文理学部長の今井林太郎が経営学部教授の古林喜楽を推薦した。古林については推薦理由が記されているが、そこには「（1）学者としてりっぱ業績をもった人（2）本学の学長として総合大学として、そで挙げる熱意のある方、新らしい学部を援助して頂ける方（3）これから数年間困難があるのではないかと思う。他部からの圧力があっても強い信念をもっている方」とある。

これを受けて推薦委員会では、候補者を決定する投票が行われ、古林、福田、宮田の3名が選出された。福田は、その場で候補者となることを承諾したが、古林と宮田は返事を保留したうえで、後日承諾した<sup>(32)</sup>。

3名の候補者に投票する学長選挙は、12月3日

に行われ、その結果古林が学長候補者となった。選挙管理委員会が同日の協議会に報告したところによると、有権者数301、投票数290、有効投票282のうち、古林210票、福田37票、宮田35票とまさに圧勝であった<sup>(33)</sup>。古林は、12月16日学長に就任した。

#### おわりに

以上見たような経緯で、神戸大学では古林喜楽が学長に選出されたが、それまでには学内で相当な混乱があった。新制国立大学における事実上最初の学長選出を控え、国立大学協会や文部省は、その方法につきモデルを各大学に提示していたが、各大学はそれぞれ内部で議論をして独自に方法を決めていった。

その課程において神戸大学では学内の対立が表面化した。それは神戸経済大学を前身とする法・経済・経営の三学部と、それ以外の高等学校・専門学校・師範学校を前身とする文理・工・教育の三学部との対立であった<sup>(34)</sup>。当初学長選考規程を審議した際、候補者の推薦母体設置を主張する前者と設置しない単純選挙を主張する後者が対立したが、推薦母体は設置しなかつそれによる推薦者以外への投票も認める形で選考規程が制定された。

ところが、その後評議員の構成が省令制定によって変更を余儀なくされ、一旦決まった選考規程が新評議員のもとで議論されると再び対立が蒸し返され、それまで全く議論されていなかったと思われる間接選挙案まで出てきた。紛糾する議論の打開が図られるなかで、推薦母体を設けることは変わらないが、当初案では認められていた被推薦者以外への投票が認められない形で新たな学長選考規程が制定されることになった。

両者が激しく対立したのは、有権者数に大きな差があり、間接選挙に近づくほど前者に、直接選挙に近づくほど後者に有利な結果が導き出されや

すいと考えられたからに他ならない。評議員の交替後、前者の主張に近い形で選考規程が制定されたのは、会議の構成が変わり後者側の人数が1人分減ったことと無関係ではないと考えられる。

ただ、最終的には後者が古林を候補に担いで決着させた。古林は経営学部にも所属していたが、全学的に人望があり、文理・工・教育学部側からも信頼されていたことが大差での当選をもたらしたといえよう<sup>(35)</sup>。

この時期、新制国立大学は大学管理問題をめぐって揺れていた。「はじめに」で述べたように、大学管理を法律として成文化することは繰り返し挫折したが、一方で大学管理の制度化を求める声は当の国立大学からも挙がっていた<sup>(36)</sup>。特に、旧制大学における一定程度の自治の経験が乏しく、なおかつ複数の旧制高等教育機関が統合されて発足した新制大学においては、その要求は切実なものがあつたと考えられる。1953年の神戸大学における学長選考は、学長選考規程制定に時間がかかったものの、とりあえず自らの手で学内対立に終止符を打つことができた事例であるが、当時の新制国立大学管理の困難さを浮き彫りにしたものでもあつたといえよう。

## [註]

- (1) 当時の文相高瀬荘太郎は、発令に際して「学長の選考については学校当事者と地元の意向を尊重し、特にこのため大学設置委員会に特別委員会を設けて広く人材を求めるとともに審議を重ねてきた」と述べている（『朝日新聞』1949年6月3日付）。
- (2) 海後宗臣・寺崎昌男『大学教育 戦後日本の教育改革9』東京大学出版会、1969年、黒羽亮一『新版 戦後大学政策の展開』玉川大学出版部、2001年、天野郁夫『新制大学の時代 日本の高等教育像の模索』名古屋大学出版会、2019年、など。
- (3) いくつかの大学沿革史では、この時期の学長選考過程について詳しく記している。その中でも、『福島大学50年史』（福島大学50年史刊行会編、1999年）

には、本論の内容とも関連して次のような注目すべき記述がある。学芸・経済の二学部で発足した福島大学では、1953年11月に学長選考規程が制定されたが、その制定にあたっては文部省との協議による大幅な修正があつたという。少し長くなるが以下に引用する。

同規程制定当時、学内で最終合意となつた案は、各学部講師以上を有権者とする投票で選出された推薦委員各20名が単記無記名投票過半数で候補者1名を選び、これについて有権者全員が過半数を条件とする信任投票を行うものであつた。信任不成立の場合には、推薦委員を改選して同じ手順を繰り返し、それでも決着しない場合はみたび改選された推薦委員の投票で決定するものとされた。だが、この結論で文部省と協議した結果、二段階の信任投票はよくないこと、両学部同数の委員を選び、あらかじめ選ばれた複数の候補者から選考することなどの修正が求められ（経済学部教授会 53.9.9議事録による）、これに基づき両学部有権者全員の投票で複数の候補者を選出し、両学部各20名の投票人が投票して過半数で決定する当時の規程が制定されたのである。文部省の考えは複数の前身校から作られた新制大学で、学部の規模の差が直接学長選挙に反映するのを避けようとしたものであろう。（43頁）

文部省が学部間のバランス（学芸学部の方が有権者の人数が多い）を考慮して、大学の決定を修正したというのである。

- (4) 羽田貴史・金井徹「国立大学長の選考制度に関する研究 ―選挙制度の定着と学長像―」（『日本教育行政学会年報』No.36、2010年）。
- (5) 廣内大輔「新制国立大学胎動期の学長選考 岐阜大学初代学長青木文一郎の事例」（『岐阜大学教育推進・学生支援機構年報』第4号、2018年）。
- (6) 神戸大学百年史編集委員会編『神戸大学百年史 通史Ⅱ 新制神戸大学史』2010年、1036・1060頁。分校の教官は当時は文理学部に所属していた（同前、123頁）。また経済経営研究所の教官数は不詳

- である(同前、1046頁)なお、本来であれば、本論で扱う1953年度の数値を掲載するべきだが、同書によるとこの年度の学部別の教員数が不明のため、1952年度の数字を参考までに掲げた。
- (7) 前掲「国立大学長の選考制度に関する研究」163頁。
- (8) 『神戸経済大学・神戸大学教授会記録綴 自24.1至24.12』(神戸大学大学文書史料室所蔵、識別番号201120500260000)。
- (9) 前掲『神戸大学百年史 通史Ⅱ』88頁。
- (10) 同前96頁。
- (11) 前掲『神戸経済大学・神戸大学教授会記録綴 自24.1至24.12』。
- (12) 前掲『神戸大学百年史 通史Ⅱ』117頁。
- (13) 『評議会記録 自24.9～至25.3』(神戸大学大学文書史料室所蔵、識別番号201010103620000)。
- (14) 例えば、『毎日新聞』1953年11月26日付には「去る四月以来旧高商系の六甲三学部(法、経、経営)と新制系(文理、教育、工)との対立が選挙方式の直接、間接をめぐりひとめ、さらに学長候補推薦委員会の構成が難航するなどその間実に八カ月を費し、評議会の開催十数回を記録、経営学部教授古林喜楽、経済学部教授宮田喜代蔵、経営学部長福田敬太郎三候補を決定するに及びやっと解決への道を開いた。わずか一カ月で学長を決定した京大に比べ神大のがこれほどの行き悩みをみせたのは新旧制大学統合による組織上の苦悩を端的に露呈したもので、従って共通の悩みをもつ全国の新制大学からも大きく注視されている」と記されている。
- (15) 『評議会記録 自27.4～至28.3』(神戸大学大学文書史料室所蔵、識別番号201010103650000)。
- (16) この資料で言及されている「国立大学管理法案」とは、1951年第10回国会に提出され審議未了となっていた法案を指すと思われる。
- (17) 『評議会記録 自28.4～至29.3』(神戸大学大学文書史料室所蔵、識別番号201010103660000)。
- (18) 3月12日の評議会において、学長より「特例法によれば評議会の基準によって協議会が選考することになっている」との発言があり(前掲『評議会記録 自27.4～至28.3』)、以後本件については協議会で議論されることになった。
- (19) 前掲『評議会記録 自28.4～至29.3』。
- (20) 前掲『大学教育 戦後日本の教育改革9』629頁。
- (21) 前掲『評議会記録 自28.4～至29.3』。
- (22) 同前。
- (23) 前掲『大学教育 戦後日本の教育改革9』では、評議会が議決権を喪失し、各部局からの評議員の選出についても教授会とは切り離されて学長の申出に基づき文部大臣が任命するとなっていることが重要であるとされている(628頁)。
- (24) 前掲『評議会記録 自28.4～至29.3』。
- (25) 同前。
- (26) 同前。
- (27) 同前。
- (28) 8日の協議会以後に開催されたと考えられる小委員会の資料は管見の限り残されていない。
- (29) 前掲『評議会記録 自28.4～至29.3』。
- (30) 『神戸大学学報』号外、1953年11月15日、1頁。
- (31) 前掲『評議会記録 自28.4～至29.3』。
- (32) 古林は、この少し前に和歌山大学の学長候補者に選出されていた。古林は、のちに「昭和二十八年十月十四日の深夜、新聞記者に叩きおこされて、文字通り寝耳に水に、和歌山大学の学長に当選していることを知った。それからなんとひと月もたたない十一月五日に、今度はまた突如として神戸大学の学長候補に推挙されてしまった」(古林喜楽『教授・学長・学生』日本評論社、1967年、23頁)と回想している。
- (33) 前掲『評議会記録 自28.4～至29.3』。
- (34) 評議会や協議会の席上では、法・経済・経営学部を「六甲側」あるいは「山側」、文理・工・教育学部を「里側」とまとめて称してもいた。
- (35) 第2節の冒頭で引用した同じ新聞記事には、3名の候補者が出揃った段階で「古林教授の当選はほとんど動かず決定的といってよく、去月〔10月一引用者〕十五日の学長候補推薦委員会で六甲側の予測に反し、新制系委員十名の票が集中、同教授が一躍候補に決定されたいきさつからみても容易に想像出来る」と古林の当選を予測し、その理

由として「古林教授支持の理由としては旧新制系を差別待遇せず、六甲側教授でありながら従来のあり方を厳正に批判、小松教授追放問題で弁護人として闘うなどその進歩的、民主的な思想風格が各派に分れた総合大学学長として最適任者として高く買われているためであろう」（『毎日新聞』1953年11月26日付）としている。古林自身の回想には、「前年の四月のころ、下馬評に愚名を散見して以来、極力私の名前のでることを防止するのに努力してきたのである。しかし、いよいよふたがあげられてみると、これまたおそろしいまでの圧倒的多数をもって、選出されてしまうということになった」（前掲『教授・学長・学生』24頁）とある。

- (36) 例えば、初代の信州大学長であった高橋純一は、新聞への投稿記事の中で「専門、高等学校から昇格した新設諸大学」は「開店早々で何等よるべき慣行法や内規もないから、いろいろな点で管理法案の一日も早い実施がまたれるわけである」と述べていた（『朝日新聞』1952年11月26日付朝刊）。

## 戦時期京大の学術研究

富永 望†

### はじめに

筆者はこれまで、満洲事変以降の京大の学術研究について、国策協力という観点から検証してきた<sup>(1)</sup>。そこで明らかになったのは、研究資金不足に悩む京大が、積極的な国策協力の姿勢を見せることで、資金を獲得する路線を邁進したことである。これは文系理系を問わない。しかし、現在利用できる資料の制約が大きく、実態解明はまだ道半ばである。旧稿で取り上げてきた一部の学部ばかりが国策協力に熱心であったかのような印象を与えることは筆者の本意ではないし、事実でもない。

今回分析する『科学研究費に関する書類』<sup>(2)</sup>『科学研究項目調書綴』<sup>(3)</sup>と『人文科学研究費ニ関スル書類』<sup>(4)</sup>は、戦時中に京大の教官が取り組んでいた研究をリストアップした資料であり、報告書の類いは収録されていない。そのため専門知識がないと研究の具体的な内容を知るのは難しいが、これまで踏み込めなかった医学部や農学部などの研究状況を明らかにする一助となる資料である。実際、旧稿について訂正すべき点が見つかった。

まず、『科学研究費に関する書類』は、1939年度に始まった文部省科学研究費<sup>(5)</sup>に対する京大からの申請書類と交付決定通知書類を綴じたものである。採択されたものが京大における自然科学研究の全てではないが、総動員体制下で国から意義を評価されていた研究といえるだろう。

次に、『科学研究項目調書綴』は、1943年9月23日付で文部省科学局長から京大総長宛に出された下記の通牒に対応して作成された資料である。なお本稿で引用する資料はカタカナをひらがなに、漢字は旧字を新字に改め、適宜句読点を補っている。

### 科学研究項目調査の件

科学研究動員実施上必要有之に付、貴<sup>〔学〕</sup>内各自然科学関係研究者毎に実施中の研究項目及現に実施中にあらざるも研究者の創意発案に係る問題に付、別紙様式に依り御調査の上、戦争遂行との関連関係に就きては各研究項目毎に貴学科学研究動員委員会の意見を付し、十月十日迄に御報告相成度。

追而本件は「極秘取扱」となすべきに付、「秘」に属する研究も漏なく御調査相成度、尚主任研究者の下に細題目のみを分担せる研究者に就きては、特に別紙として調査するを要せざるに付申添ふ。

別紙書式で要求された調査項目は「研究項目名」「経費及其出所」「研究分担者及其分担題目」「研究の見透し」「研究目的及戦争遂行との関連関係」「科学研究動員委員会又は研究機関長の意見」の6つである。このうち最後の「科学研究動員委員会又は研究機関長の意見」については、京大は「緊

† 京都大学大学文書館助教

表1 科学研究費採択件数の推移

| 学部    | 1939年度 | 1940年度 | 1941年度 | 1942年度 | 1943年度 | 1944年度 |
|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 医学部   | 4      | 6      | 15     | 17     | 18     | 43     |
| 理学部   | 23     | 30     | 34     | 34     | 35     | 70     |
| 工学部   | 20     | 22     | 26     | 31     | 19     | 67     |
| 農学部   | 17     | 21     | 26     | 25     | 25     | 69     |
| 化学研究所 | 9      | 12     | 16     | 18     | 22     | 18     |
| 工学研究所 | 2      | 2      | 2      | 0      | 1      | 10     |
| 結核研究所 | 0      | 0      | 0      | 0      | 1      | 1      |
| 総計    | 75     | 93     | 119    | 125    | 121    | 278    |

表2 科学研究費交付額の推移

| 学部    | 1939年度   | 1940年度   | 1941年度   | 1942年度   | 1943年度   | 1944年度     |
|-------|----------|----------|----------|----------|----------|------------|
| 医学部   | ¥58,250  | ¥58,250  | ¥95,500  | ¥97,350  | ¥118,440 | ¥382,500   |
| 理学部   | ¥104,200 | ¥107,100 | ¥174,800 | ¥147,700 | ¥149,000 | ¥440,700   |
| 工学部   | ¥71,500  | ¥71,800  | ¥106,880 | ¥107,110 | ¥108,115 | ¥395,250   |
| 農学部   | ¥80,650  | ¥75,600  | ¥119,500 | ¥138,650 | ¥138,500 | ¥448,500   |
| 化学研究所 | ¥63,550  | ¥63,550  | ¥84,950  | ¥100,150 | ¥118,050 | ¥74,000    |
| 工学研究所 | ¥4,200   | ¥4,000   | ¥3,400   | ¥0       | ¥5,000   | ¥69,600    |
| 結核研究所 | ¥0       | ¥0       | ¥0       | ¥0       | ¥10,500  | ¥30,000    |
| 総計    | ¥382,350 | ¥380,300 | ¥585,030 | ¥590,960 | ¥647,605 | ¥1,840,550 |

急科学研究体制総務部意見」<sup>(6)</sup>としてコメントをつけたが、どれも「継続を要す」のようなことが書いてあり、否定的なコメントは一切ない。

文部省がこのような照会を行った背景には、同年8月20日の閣議決定「科学研究の緊急整備方策要綱」があったと推測される。同決定は「大学其の他の科学研究機関に於ける研究力を急最高度に集中発揮せしめつつその飛躍的向上を図り戦力の速なる増強を計る為之が体制整備の必要あり」と、大学等研究機関の計画的動員を謳っていた。科学動員に大学を組み込むための予備調査だったのではないだろうか<sup>(7)</sup>。

そして『人文科学研究費ニ関スル書類』は、文部省から交付された人文科学研究費の配当決定通知をまとめた文書である。交付されたのは1944年度と1945年度だけであり、京大の枠に留まるものではなく、大学横断的に組織された研究班の中で京大教官が分担した研究項目が記載されている。こちらも断片的ではあるが、戦時期の京大における人文科学研究の一端を知る手がかりとなる

だろう。この他に1929年から1944年にかけて人文科学研究に交付された精神科学研究奨励金に関する『精神科学研究奨励金書類』<sup>(8)</sup>があるが、採択件数は毎年1、2件程度であり、金額も平均600円程度の規模だったので、本稿では取り上げない。以下、京大の教官については初出時に、担当講座を明記する。

## 1. 外部資金の獲得状況

まずは外部資金の獲得状況を概観することで、全体的な傾向を把握したい。表1は『科学研究費に関する書類』を元に作成した学部・研究所ごとの科学研究費採択件数の推移、表2は同じく交付額の推移である。

後述する『科学研究項目調書綴』との間で食い違いがあるので、これが京大で採択された科学研究費の全てではないと考えられるが、採択件数は1943年度までは漸増傾向で、1944年度に倍増した。交付額の方は、1941年度に一度大きな伸びを見せてから、やはり1944年度に激増している。1941

表3 科学研究費1件あたり交付額の推移

| 学部    | 1939年度  | 1940年度 | 1941年度 | 1942年度 | 1943年度  | 1944年度  |
|-------|---------|--------|--------|--------|---------|---------|
| 医学部   | ¥14,563 | ¥9,708 | ¥6,367 | ¥5,726 | ¥6,580  | ¥8,895  |
| 理学部   | ¥4,530  | ¥3,570 | ¥5,141 | ¥4,344 | ¥4,257  | ¥6,296  |
| 工学部   | ¥3,575  | ¥3,264 | ¥4,111 | ¥3,455 | ¥5,690  | ¥5,899  |
| 農学部   | ¥4,744  | ¥3,600 | ¥4,596 | ¥5,546 | ¥5,540  | ¥6,500  |
| 化学研究所 | ¥7,061  | ¥5,296 | ¥5,309 | ¥5,564 | ¥5,366  | ¥4,111  |
| 工学研究所 | ¥2,100  | ¥2,000 | ¥1,700 | ¥0     | ¥5,000  | ¥6,960  |
| 結核研究所 | ¥0      | ¥0     | ¥0     | ¥0     | ¥10,500 | ¥30,000 |
| 全学    | ¥5,098  | ¥4,089 | ¥4,916 | ¥4,728 | ¥5,352  | ¥6,621  |

表4 1943年9月現在外部資金獲得状況（1）

| 学部      | 人数  | 件数  | 件数／人 | 経費総額       | 経費／人    | 経費／件    |
|---------|-----|-----|------|------------|---------|---------|
| 医学部     | 16  | 40  | 2.50 | ¥345,718   | ¥21,607 | ¥8,643  |
| 理学部     | 41  | 106 | 2.59 | ¥919,636   | ¥22,430 | ¥8,676  |
| 工学部     | 27  | 68  | 2.52 | ¥409,728   | ¥15,175 | ¥6,025  |
| 農学部     | 15  | 25  | 1.67 | ¥113,412   | ¥7,561  | ¥4,536  |
| 化学研究所   | 11  | 30  | 2.73 | ¥402,050   | ¥36,550 | ¥13,402 |
| 工学研究所   | 22  | 37  | 1.68 | ¥325,580   | ¥14,799 | ¥8,799  |
| 結核研究所   | 2   | 4   | 2.00 | ¥5,600     | ¥2,800  | ¥1,400  |
| 附属医学専門部 | 1   | 1   | 1.00 | ¥750       | ¥750    | ¥750    |
| 総計      | 135 | 311 | 2.30 | ¥2,522,474 | ¥18,685 | ¥8,111  |

年度の交付額は夏に決定されているので、同年12月の日米開戦の結果ではない。だが、前年の北部仏印進駐により日米関係は悪化していたので、資源や工業機械の輸入が困難になることへの危機感が背景にあったかもしれない。1943年度までは理学部が採択件数・交付額ともに1位を占めている。筆者は旧稿で理学部の教授たちが工学部の予算面での優遇をうらやんでいたと述べたが<sup>(9)</sup>、科学研究費に関しては、むしろ理学部が恩恵を受けていたといえる。

表3は1件あたりの交付額である。医学部は採択件数・交付額ともに1940年度までは他学部には差をつけられていたが、1件あたりの交付額は飛びぬけていたことがわかる。他の学部はおおむね漸増傾向で、それほど差はない。

続いて『科学研究項目調書綴』から、1943年9月当時の外部資金の獲得状況を探ってみよう。こちらは科学研究費以外にも含まれているが、経費について出所が明記されているのに金額の記載がな

い研究題目が多い。このような場合、外部資金なしで研究したとは考えにくいので、ひとまず経費が明記されているもの限定で統計を取ったのが表4である。

この表でも、外部資金獲得額では理学部が群を抜いている。1件あたりの経費も少なくない。理学部だけが特に困難な状況に置かれていたわけではなかった。また、1人につき2件以上の研究題目で外部資金を獲得していたことがわかる。では、経費の記載がない研究題目を含めた表5からは、どのようなことがわかるだろうか。

これによると、1人あたり3件以上の研究題目で外部資金を獲得していることになる。医学部の教員は特に多忙であったといえる。また、陸海軍ともに工学研究所に最も多く出資しているが、学部では理学部が最多であった。理学部は外部資金獲得に成功していたといえる。

1章の締めくくりとして、人文科学研究費の学部ごとの採択件数および経費の一覧表（表6、7）

表5 1943年9月現在外部資金獲得状況(2)

| 学部      | 人数  | 件数  | 件数/人 | 陸軍出資件数 | 海軍出資件数 | 陸海軍合計 |
|---------|-----|-----|------|--------|--------|-------|
| 医学部     | 28  | 129 | 4.61 | 5      | 1      | 6     |
| 理学部     | 54  | 176 | 3.26 | 12     | 6      | 18    |
| 工学部     | 45  | 167 | 3.71 | 6      | 5      | 11    |
| 農学部     | 29  | 65  | 2.24 | 1      | 0      | 1     |
| 化学研究所   | 25  | 79  | 3.16 | 8      | 4      | 12    |
| 工学研究所   | 27  | 65  | 2.41 | 14     | 13     | 27    |
| 結核研究所   | 2   | 4   | 2.00 | 0      | 0      | 0     |
| 附属医学専門部 | 1   | 1   | 1.00 | 0      | 0      | 0     |
| 総計      | 211 | 686 | 3.25 | 46     | 29     | 75    |

\*軍からの出資は、軍単独とは限らない。陸海軍共同で、あるいは軍と他の機関が共同で出資している場合もある。

表6 1944年度人文科学研究費採択状況

| 学部   | 人数 | 件数 | 件数/人 | 経費総額    | 経費/人   | 経費/件   |
|------|----|----|------|---------|--------|--------|
| 法学部  | 1  | 1  | 1.00 | ¥900    | ¥900   | ¥900   |
| 文学部  | 4  | 4  | 1.00 | ¥5,000  | ¥1,250 | ¥1,250 |
| 経済学部 | 9  | 10 | 1.11 | ¥9,510  | ¥1,057 | ¥951   |
| 農学部  | 2  | 3  | 1.50 | ¥2,200  | ¥1,100 | ¥733   |
| 人文研  | 0  | 0  | 0.00 | ¥0      | ¥0     | ¥0     |
| 総計   | 16 | 18 | 4.61 | ¥17,610 | ¥1,101 | ¥978   |

表7 1945年度人文科学研究費採択状況

| 学部   | 人数 | 件数 | 件数/人 | 経費総額    | 経費/人   | 経費/件   |
|------|----|----|------|---------|--------|--------|
| 法学部  | 4  | 4  | 1.00 | ¥1,850  | ¥463   | ¥463   |
| 文学部  | 5  | 6  | 1.20 | ¥6,650  | ¥1,330 | ¥1,108 |
| 経済学部 | 13 | 16 | 1.38 | ¥12,276 | ¥944   | ¥682   |
| 農学部  | 2  | 3  | 1.50 | ¥1,375  | ¥688   | ¥458   |
| 人文研  | 2  | 2  | 1.00 | ¥1,400  | ¥700   | ¥700   |
| 総計   | 26 | 31 | 5.08 | ¥21,701 | ¥835   | ¥700   |

を掲げる。1人あたりでは文学部が最も交付額が大きかったが、総計で見れば経済学部への交付が群を抜いている。経済学部が戦時において最も国策に沿った研究をしていたことになる。

## 2. 自然科学研究の内容

では、各学部がどのような研究をしていたか、『科学研究項目調書綴』に記載された686件を対象に、軍事研究であるか否かの観点から整理してみよう。特に注目するのは「研究目的及戦争遂行との関連関係」欄の記述内容<sup>(10)</sup>と、出資者が軍部であるか否かである。

### 2-1. 医学部

医学部は129件ある。そのうち「戦争と関係なし」と回答した研究題目があるのは小川睦之助教授（解剖学第1）と盛新之助教授（眼科学）の2人だけで、合わせて13件（小川が7件、盛が6件）だった。小川は実験発生学的研究<sup>(11)</sup>、盛は近視の研究が専門分野であった<sup>(12)</sup>。盛の方はその他に「近視の研究」「夜盲症の研究」「ズルフアンアミト副所局所療法」の3件を申告している。なお、小川の研究は全て校費で賄われていた。

多額の外部資金を獲得した方に目を向けると、笹川久吾教授（生理学第2）が「電子顕微鏡の医学生物学研究領域への応用」で文部省科学研究費

と日本学術振興会からの資金、それに校費を加えて6万円を獲得した。笹川は細菌戦のための研究と申告している。また戸田正三教授（衛生学）が文部省科学研究費と興亜民族生活科学研究所から、「寒帯気候適応策に関する他の研究」で計4万円、「熱中症の研究並に極熱環境に於ける労働能率増進策研究」で計2万円を獲得した。前者は凍傷の予防、後者は熱地における鉱山開発を研究目的に掲げており、日本と大きく異なる自然環境（寒帯と熱帯）での活動に資する研究であるとアピールしたのだろう。とはいえ、平時でも役立つ研究には違いない。

軍部から資金を提供された研究は6件あり、そのうち目を引くのは高木誠司教授（薬品分析化学）が陸軍兵器行政本部から3千円を得て「化学兵器」を研究していることであるが、ものものしい題目の割には額が少なすぎるように思われる。特に説明がないので、研究の具体的内容もわからない。

## 2-2. 理学部

理学部は176件ある。戦争と関係ない研究にのみ従事していたのは瀬野錦蔵助教授（後に地球物理学第3講座教授）と後藤己與治助手の2人だけだった。瀬野は「海岸地下水の流動状態に就て」「二層流の力学的状態に就て」で文部省科学研究費を獲得したが、金額は不明である。後藤は別府市からの出資で亀川温泉と別府温泉の水質を分析していた。これも金額は不明であるが、いずれにしても軍事との関連性は乏しい。

また、佐々憲三助教授（後に地球物理学第1講座教授）が「地震並に火山爆発の予知並に其災害軽減に関する研究」で文部省科学研究費と日本学術振興会から計11,200円を獲得している。戦時下でも災害の研究はしていたようである。筆者は旧稿で「災害の研究こそは平時でなければありえない」<sup>(13)</sup>と述べたが、訂正する。

金額が大きかった題目は、堀場信吉教授（化学第1）の「超高压化学の研究」と荒勝文策教授（物

理学第4）の「原子人工変転装置の研究」で、前者は文部省科学研究費、日本学術振興会、野口研究所から計6万3千円、後者は文部省科学研究費、日本学術振興会からの資金に私費を合わせて6万2千円であった。ただし、「超高压化学の研究」は戦争とは直接の関係なしと申告している。

軍部から資金を提供されたのは19件あるが、野津龍三郎教授（化学第3）が陸軍から1千円を得た「天然ゴムの反応性に関する研究」、木村作治郎講師が第一海軍燃料廠から2,500円を得た「石油の分類法の研究」、梅垣嘉治助手が海軍ニューギニア軍政府から出資された「ニューギニア鉱産資源調査」、滑川忠夫助教授が陸軍気象部から出資された「長期予報の予備的研究」など、資源に関わるものが多い。

## 2-3. 工学部

工学部は167件ある。戦争遂行との関連性について記述しなかったものはあるが、「関係なし」と申告した研究はひとつもない。最も大きな金額は、藤野清久教授（繊維化学第4）が住友硬木から5万円を得た「航空機用強化木材の品質向上に関する研究」で、木製飛行機開発に関する研究であった。木製飛行機については項を改めて述べる。

軍部から出資された研究は11件あり、堀尾正雄教授（繊維化学第2）が東京第二陸軍造兵廠、第二海軍火薬廠からの出資に校費を加えて4千円を得た「木材を原料となし無煙火薬を製造することに関する諸種の研究」や、高田亮平教授（工業化学第4）が海軍軍需部から出資された「潜艦糧食に関する研究」など、装備に直結する研究が多い。

## 2-4. 農学部

農学部は65件ある。戦争に関係ある研究をしなかったのは寺見広雄助教授（後に園芸学第2講座教授）だけで、梨と柿の研究に従事していたが、陸軍軍人だった経歴のために戦後は公職追放になった<sup>(14)</sup>。

最も高額な資金を得たのは田村豊教授（農業機

械学)だが、21,887円なので、他の学部の高額に比べるとずいぶん少ない。題目は「農用トラクターの研究」で、文部省科学研究費の他に満洲拓殖公社と羽田機械株式会社が出資していた<sup>(15)</sup>。

軍からの出資は1件だけである。館勇教授(林産化学)が「化学兵器の性状に関する研究」で陸軍から資金を得たが、金額は記載されていない。

## 2-5. 化学研究所

化学研究所は79件あるが、専任教官は6人だけで、他は他学部との兼任である。戦争に関する研究をしなかったのは李泰圭助教授だけで、養英会から1万円を得て「量子化学の研究」に従事した。

金額に目を向けると、堀場信吉が「耐爆剤の研究」で大日本航空技術協会から10万6千円を得たのが目を引く。全学でも最高金額である。

軍部から資金を獲得したのは12件あり、沢村宏工学部教授(冶金学第1)が「普通鉄の原料とする低燐鉄の製造法に関する研究」で文部省科学研究費に加え、日本製鉄株式会社と海軍技術研究所からの出資を得て6万6千円を獲得している。その他、合成繊維など装備品に直結する研究が多い。

## 2-6. 工学研究所

工学研究所は65件あるが、専任教官はおらず、全員が工学部との兼任である。戦争に関係しない研究を申告した者はいない。

岡本赳教授(電気工学第2)が「軽合金板の電気溶接」で文部省科学研究費、日本学術振興会、大日本航空技術協会から計8万5百円を獲得したのが最高額である。

軍部からの出資は26件あり、燃料や動力に関する研究が目につく。また、軍からの要請による研究と注記してあるものが多いのも工学研究所の特徴である。

## 2-7. 結核研究所

結核研究所は1941年3月26日に開設された。「結核研究所設置理由、研究方針並其機構運用ニ関スル説明書」<sup>(16)</sup>草稿が残っているが、「我国に

於て一ヶ年に失ふ結核死亡者総数と今次聖戦中に護国の神となれる英霊総数とを思ひ合はすとき、何人か我国結核死の莫大なるに想到せざるものあらんや。…是に於て結核患者死亡率を減退せしめ、出来得る限りの短期間に完全治療に赴かしむるは国家経済総力並に人的資源保護増強の両面より見て、保険上延いては国家国防上焦眉の急に迫られつゝありと云ふべし」と述べている。つまり、軍事的にも必要な施設であることを強調して承認を得ようとしたのである。ただし、実際に文部省へ提出された「結核研究所設置理由書」<sup>(17)</sup>からは上記の文言が削除され、もっぱら日本の結核対策が欧米諸国に立ち遅れていることを書き連ねていた。この方針変更の理由は不明である。

その結核研究所は教官2人で4件しかない。植田三郎教授が校費で「癩病菌の純粹培養に関する研究」を行っている他は、3件とも結核の研究である。

## 3. 学部横断的研究の実情

### 一木製飛行機開発の事例一

旧稿で筆者は木製飛行機開発研究について実用性を疑問視していたが<sup>(18)</sup>、これは筆者の無知によるもので、第二次世界大戦中、イギリスは木製飛行機の実用化に成功していた。改めて調査してみると、木製飛行機開発研究が京大の軍事研究を検証するうえで興味深い実例であることがわかったので、掘り下げてみたい<sup>(19)</sup>。

前提として、木製飛行機の構造を説明する。イギリスのデハビランド社が開発したモスキート爆撃機は、胴体部・主翼および尾翼の大部分・プロペラが木製であった。板を何枚も木目を交差させながら接着剤(合成樹脂)で貼り合わせ、仕上げに高圧処理を施した合板を用いている。高度飛行に耐えるだけの強度があり、金属機と異なり、レーダーに捕捉されない利点があった。当時の戦闘機の主兵装は機銃であるが、攻撃が命中しても弾丸

表8 航空機用材部参加者の科学研究費採択状況（1939～43年度）

| 人名      | 所属  | 講座／担当   | 科学研究費に採択された研究題目         | 年度                            |           |
|---------|-----|---------|-------------------------|-------------------------------|-----------|
| 梶田茂教授   | 農学部 | 林学第 1   | 本邦産闊葉樹材の物理的性質の研究        | 1939 ～ 41                     |           |
|         |     |         | 木材性質の強化に関する研究           | 1942 ～ 43                     |           |
|         |     |         | 熱帯産特殊有用材木に関する研究         | 1942 ～ 43                     |           |
| 近藤金助教授  |     | 栄養化学    | 蛋白質に関する研究               | 1939 ～ 43                     |           |
|         |     |         | 水産食料品に関する化学的研究          | 1940 ～ 43                     |           |
|         |     |         | 南方農業資源の新規利用に関する研究       | 1943                          |           |
| 舘勇教授    |     | 林産化学    | 電磁波吸収分散「スペクトル」の研究＊ 1    | 1942                          |           |
|         |     |         | 碎木パルプの理論的並に実験的研究        | 1942 ～ 43                     |           |
| 尾中文彦助教授 |     | 林学実習    | 森林樹木の肥大成長の生理            | 1943                          |           |
| 野津龍三郎教授 |     | 理学部     | 化学第 3                   | アセチレンの反応性に関する研究               | 1939 ～ 42 |
|         |     |         |                         | 砂糖の分解と醗酵の化学的研究                | 1939 ～ 42 |
|         |     |         |                         | 炭化水素の熱力学的反応動力学的並に構造化学的研究＊ 2   | 1941 ～ 43 |
|         |     |         |                         | 「アセチレン」の加水反応と「アセタルデヒド」の反応性の研究 | 1942 ～ 43 |
|         |     |         |                         | 有機化学基礎反応の研究                   | 1943      |
| 小田良平教授  | 工学部 | 工業化学第 3 | 対熱性を有する高周波電気絶縁有機材料の合成研究 | 1942 ～ 43                     |           |

＊1 化学研究所から申請

＊2 堀場信吉教授との共同研究

表9 航空機用材部参加者の科学研究費採択状況（1944年度）

| 人名      | 所属  | 講座／担当 | 科学研究費に採択された研究題目   |                       |
|---------|-----|-------|-------------------|-----------------------|
| 梶田茂教授   | 農学部 | 林学第 1 | 改良木材              |                       |
|         |     |       | 航空機材              |                       |
|         |     |       | 強化合板材             |                       |
|         |     |       | 造船材               |                       |
|         |     |       | 木材結合材合成樹脂         |                       |
|         |     |       | 船底塗料              |                       |
|         |     |       | 機関用               |                       |
|         |     |       | 熱帯産特殊有用材木         |                       |
| 近藤金助教授  |     | 栄養化学  | ビタミン              |                       |
|         |     |       | 耐寒食糧              |                       |
|         |     |       | 耐熱食糧              |                       |
|         |     |       | 潜航食糧              |                       |
|         |     |       | 寒地適用の主食糧          |                       |
|         |     |       | 加工利用              |                       |
|         |     |       | 蛋白質の特殊利用に関する基礎及応用 |                       |
|         |     |       | 舘勇教授              | 林産化学                  |
| パルプ     |     |       |                   |                       |
| リグニン    |     |       |                   |                       |
| 尾中文彦助教授 |     |       | 林学実習              | 木材の肥大成長異常の異常材の利用      |
| 野津龍三郎教授 |     | 理学部   | 化学第 3             | 有機化学ニ於ケル重合反応          |
| 小田良平教授  |     | 工学部   | 工業化学第 3           | 航空機用膠着剤               |
|         |     |       |                   | 油脂ヨリ鉱物性潤滑油製造ノ研究       |
|         |     |       |                   | イオン交換生合成樹脂            |
|         |     |       |                   | 耐熱性ヲ有スル高周波電気絶縁材料ノ合成研究 |

表10 航空機用材部の役割分担

| 人名      | 所属  | 講座／担当  | 航空機用材部での研究分担       |
|---------|-----|--------|--------------------|
| 梶田茂教授   | 農学部 | 林学第1   | 素材試験及膠着力、強化木材質試験試作 |
| 近藤金助教授  |     | 栄養化学   | 蛋白質及其他の膠着剤研究       |
| 舘勇教授    |     | 林産化学   | ゴムの誘導体及リグニン系膠着剤の研究 |
| 尾中文彦助教授 |     | 林学実習   | 素材及強化木の解剖学的研究      |
| 野津龍三郎教授 | 理学部 | 化学第3   | ゴム誘導体系膠着剤の研究       |
| 小田良平教授  | 工学部 | 工業化学第3 | 人造樹脂系膠着剤の研究        |

が貫通するので、そのまま飛行できた。ただし金属機と異なり、不時着した場合は衝撃に耐えられず、大破してしまう。先に結論を述べると、イギリス以外にも各国が開発を試みたが、実戦で成果をあげるほどの成功に至らなかったのは、接着剤の開発がうまくいかなかったためである<sup>(20)</sup>。

### 3-1. 航空機用材部の構成員

まず、緊急科学研究体制発足時において、木製飛行機開発研究を目的とする航空機用材部に参加した教官は、農学部の梶田茂教授（林学第1、航空機用材部長）、近藤金助教授（栄養化学）、舘勇教授（林産化学）、尾中文彦助教授、理学部の野津龍三郎教授、工学部の小田良平教授（工業化学第3）の6名である。

続いて、緊急科学研究体制が発足する1943年8月末以前に、上記メンバーがどのような研究で科学研究費を獲得していたかをまとめたのが表8である。

この他に野津は第一海軍燃料廠から「イソプタノールの合成研究」を委託されていた。近藤は前線兵食部、舘は農林産物利用部と前線兵食部、野津と小田は電波兵器部をかけもちしていたが、一覧して木製飛行機開発に直結する研究に従事していたのは梶田である。まず材料となる木材が確保できないと始まらないが、木材は個体差が大きく、水分含有量など微妙な条件で適否が左右されるので、何でもよいというわけではなかった。最も飛行機に使いやすいのは米国産スプルスであったが、当然のことながら戦争で輸入が途絶してしまい、

代用品を日本国内、満洲、台湾などで探さなければならなかった<sup>(21)</sup>。梶田はまさに木材の研究をしていたのであり、部長になったのも自然である。次に、緊急科学研究体制発足後の1944年度に航空機用材部メンバーが交付された科学研究費の一覧を掲げる。

1943年に文部省が科学の戦力化に大きく方針転換したことから、1944年度はそれまでの個人研究への助成に加えて、共同研究への助成も開始された<sup>(22)</sup>。表9を見ると、従来の研究を継続した場合もあるが、新たに着手した軍事研究が多い。

### 3-2. 航空機用材部の報告書

それでは、航空機用材部で進められた木製航空機開発の研究がどのようなものだったか、報告書から探ってみよう。緊急科学研究体制報告書は計22回提出されており、航空機用材部はそのうち9回に報告がある。煩雑さを避けるため、第○回報告（194x年y月z日）と表記する。典拠は全て『自昭和十八年緊急科学研究体制関係書類』である<sup>(23)</sup>。

第1回報告（1943年10月23日）では木製飛行機開発という研究目標を明らかにするとともに、役割分担を定めた（表10）。これを見ると、6人中4人が膠着剤すなわち接着剤の研究に当たっており、木製飛行機開発の成否が接着剤にあったことを物語っている。また、数年来陸軍航空技術研究所からの委託研究を行っているとの記述がある。

第2回報告（1943年11月16日）ではまだ具体的な進捗はないが、陸軍から依頼された4つのテーマについて研究を進めるとしている。「産地の相

表11 航空機用有機材料部の役割分担

| 班   | 研究題目 | 内容                                                     |
|-----|------|--------------------------------------------------------|
| 第1班 | 積層物  | 繊維、紙、絲、布、木等を用ひ、プロペラ、機体、発動機関係等の材料の製造研究                  |
| 第2班 | 繊維材料 | タイヤコード、落下傘、羽布、積層物、特殊被服材料並に其原料に関する研究                    |
| 第3班 | 耐油材料 | 防弾油槽、パッキング、耐油ゴム管、高圧撓管、油密材等の耐油材料、特に新航空燃料に対する耐油材料等に関する研究 |
| 第4班 | 透明板  | 防弾硝子中間膜、安全ガラス、有機ガラス、透明気密室材料等に関する研究                     |
| 第5班 | 接着剤  | 木木、木金、金金、硝子金、其他の材料の接着剤、気密室応急修理材料等                      |
| 第6班 | 其他   | 航空機用電気材料、ゴム其他に関する研究                                    |

違が木材に及ぼす影響」「合板の剪断方法の研究」「積層材の吸湿試験及変形性の研究」「「ブナ」強化木の顕微鏡試験」であった。

第3回報告（1943年12月30日）も同様で、陸軍第六航空技術研究所で製作した積層材の吸湿試験を行っていることを報告した。

第6回報告（1944年3月27日）では、3人のメンバーから4つのテーマについて進捗状況の報告があげられた。まず梶田は、ヒノキ・カバ・ブナそれぞれを材料とした積層材の吸湿性を比較する実験、強化木の強度試験について報告した。尾中はロシア製木製戦闘機（鹵獲品であろうか）に使用された強化木の分析を行った。野津はアセトン系接着剤（原文では膠着剤）の研究成果について報告し、低温で急速に膠着し、耐水性も優れ、塗料及び充填剤としても使用可能と評価した。また、強化木とアセトン系接着剤は緊急科学研究体制の成果でもあることが報告書の中で述べられている。

第7回報告（1944年5月2日）では、梶田がブナ積層材を製作する上で適切な加圧力を探る実験結果を報告した。

第9回報告（1944年6月21日）では、梶田が強化木研究の経過と、丹波演習林産ブナを用いた高温処理の実験結果を報告した。

第11回報告（1944年8月31日）では、野津がアセトン系接着剤（原文では接合剤）の接着力を向上させたと報告した。それに対して舘はインドネシア・フィリピン・ニューギニア産出のコーパル樹脂を使用した接着剤を研究していたが、実用

に耐えるものになっていないと報告した。

第15回報告（1945年1月29日）では、野津がアセトン系接着剤について実用化試験を計画していることを、小田が未加硫エポナイトを利用した積層材の研究について、梶田が乾燥高温処理の実験結果について報告した。

第18回報告（1945年4月28日）では、尾中が広葉樹（原文では潤葉樹）のアテ（陽疾）について、航空機に用いる上での問題点を考察した。これを最後に航空機用材部の報告は途絶えている。

### 3-3. 航空機用有機材料部の活動

1945年4月16日、緊急科学研究体制は新たに航空機用有機材料部を発足させた。従来軍の委託などで進めていた研究を一括したものであった。部長には工学部の桜田一郎教授（繊維化学第1）が任命された。参加者は他に工学部から小田良平、穴戸圭一（工業化学第5）、藤野清久（繊維化学第4）、堀尾正雄の教授4名と岡村誠三助教授、由良章三助教授、辻和一郎講師、野間央之助教授、理学部から野津龍三郎教授、化学研究所から李升基教授、李泰圭助教授、淵野桂六助教授、古川淳二助教授、鯨井忠五講師、小林恵之助講師、平林清講師の計17人である。

表11に示したように、航空機用有機材料部は6つの班に分かれて活動した。残念ながら、誰が何班に所属したか、あるいは複数かけもちしたのかはわからないが、参考までに『科学研究項目調書綴』から、メンバーが従事していた研究題目と経費の出所を一覧にまとめたものが表12である。

表12 航空機用有機材料部参加者の研究題目

| 人名           | 所属      | 講座／担当                    | 研究題目                         | 経費         | 出所                |
|--------------|---------|--------------------------|------------------------------|------------|-------------------|
| 桜田一郎教授       | 工学部     | 繊維化学第 1                  | 有機材料に関する研究                   | ¥12,000    | 日本合繊組合他           |
|              |         |                          | 点火線に関する研究                    | ¥5,000     | 陸軍第八技術研究所         |
|              |         |                          | 合成繊維に関する研究＊ 1                | ¥5,000     | 陸軍被服本廠            |
|              |         |                          | 耐油性材料に関する研究＊ 1               | ¥5,000     | 日本合成繊維研究協会        |
|              |         |                          | 「ポリ」 醋酸「ケイエル」に関する研究＊ 1       | ¥10,000    | 特許局               |
|              |         |                          | 「ボルヴィニルアセタール」に関する研究＊ 1       | ¥5,000     | 日本合成繊維研究協会        |
|              |         |                          | 有機電気絶縁材料に関する研究＊ 1            | ¥5,000     | 日本合成繊維研究協会        |
|              |         |                          | ポリヴィニルアルコールより無煙火薬製造に関する研究＊ 2 | ¥2,300     | 東京第二陸軍造兵廠         |
| 堀尾正雄教授       |         | 繊維化学第 2                  | 木材を原料となし無煙火薬を製造することに関する諸種の研究 | ¥4,000     | 東京第二陸軍造兵廠、第二海軍火薬廠 |
|              |         |                          | 無煙火薬の性能向上に関する研究              | ¥4,000     | 東京第二陸軍造兵廠、第二海軍火薬廠 |
|              |         |                          | 高周波用特殊絶縁紙の製造に関する研究           | 不明         | 海軍技術研究所、校費        |
|              |         |                          | 南方用衣料衣服の研究                   | ¥7,000     | 文部省科学研究費          |
|              |         |                          | 南方植産資源の新規利用に関する研究            | ¥5,500     | 日本学術振興会           |
|              |         |                          | 電子顕微鏡製作及应用に関する研究             | ¥37,000    | 谷口工業、日本学術振興会      |
|              |         |                          | 木材蒸解の研究                      | ¥4,500     | 文部省科学研究費          |
|              |         |                          | 硫酸塩パルプに関する研究                 | ¥3,700     | 谷口工業、日本学術振興会      |
|              |         |                          | 「グイスコース」のコロイト学的研究            | 不明         | 校費                |
|              |         |                          | 「タイヤコード」用強力人絹製造の研究＊ 1        | 不明         | 校費                |
|              |         |                          | 人造繊維の品質改善に関する研究＊ 1           | ¥2,000     | 校費&昭和奉公会          |
|              |         |                          | 人造繊維の紡糸機構に関する研究＊ 1           | ¥3,000     | 文部省科学研究費          |
| 光重合に関する研究＊ 1 | 不明      | 校費                       |                              |            |                   |
| 藤野清久教授       | 繊維化学第 4 | 航空機用強化木材の品質向上に関する研究      | ¥50,000                      | 住友硬化木      |                   |
|              |         | 航空機用強化木材製造方法に関する研究       | ¥30,000                      | 住友硬化木      |                   |
|              |         | 繊維試験法に関する研究              | ¥600                         | 日本学術振興会    |                   |
|              |         | 航空機に対する繊維の利用に関する研究       | ¥5,000                       | 校費         |                   |
|              |         | 高重合度人造繊維の繊維工学的研究＊ 2      | ¥3,000                       | 陸軍被服本廠     |                   |
|              |         | 繊維を利用せる航空機用可塑物の研究＊ 2     | ¥2,000                       | 蚕糸化学研究所    |                   |
| 小田良平教授       | 工業化学第 3 | 耐熱性高周波電気絶縁材料の合成          | 不明                           | 文部省科学研究費   |                   |
|              |         | イオン交換性合成樹脂に関する研究         | 不明                           | 日本学術振興会    |                   |
|              |         | クエレ反応によるスチロール誘導体合成       | 不明                           | 特許局        |                   |
|              |         | 積層強化本材の製造に関する研究          | 不明                           | 校費         |                   |
|              |         | 潤滑油の合成に関する研究             | 不明                           | 校費         |                   |
|              |         | 天然ゴムの利用に関する研究            | 不明                           | 日本学術振興会    |                   |
|              |         | 有機合成化学反応の基礎的研究           | 不明                           | 校費         |                   |
|              |         | 「ポリアミド」系合成繊維の製造に関する研究＊ 1 | 不明                           | 日本合成繊維研究協会 |                   |
|              |         | 特殊合成樹脂に関する研究＊ 1          | 不明                           | 校費         |                   |

| 人名      | 所属                                      | 講座／担当  | 研究題目                         | 経費      | 出所          |
|---------|-----------------------------------------|--------|------------------------------|---------|-------------|
| 小田良平教授  | 工学部                                     | 工業化学第3 | 接着剤に関する研究＊1                  | 不明      | 校費          |
|         |                                         |        | トルオール合成に関する研究＊2              | 不明      | 海軍第二火薬廠     |
|         |                                         |        | 有機化合物塩素化に関する研究＊2             | 不明      | 陸軍第六技術研究所   |
|         |                                         |        | 合成樹脂の品質改良に関する研究＊2            | 不明      | 陸軍第八技術研究所   |
| 穴戸圭一教授  |                                         | 工業化学第5 | 液化「アルミニウム」を用ひる有機化学反応の基礎並に応用中 | ¥3,000  | 有機合成化学研究所他  |
|         |                                         |        | 天然ゴムの化学的処理に於る新用途の開拓          | 不明      | 文部省科学研究費    |
|         |                                         |        | ビタミンKの新製法                    | 不明      | 有機合成化学研究所   |
|         |                                         |        | 鳥糞成分の研究                      | 不明      | 校費          |
|         |                                         |        | イソパラフィン製造に関する研究＊2            | ¥5,000  | 陸軍燃料廠       |
| 野津龍三郎教授 |                                         | 理学部    | 化学第3                         | 触媒の化学   | ¥38,400     |
|         | 有機化学基礎反応の研究                             |        |                              | ¥8,000  | 文部省科学研究費他   |
|         | 砂糖分解と発酵の科学的研究                           |        |                              | ¥9,900  | 文部省科学研究費    |
|         | 潤滑油成分の化学構造                              |        |                              | ¥4,000  | 大日本航空技術協会   |
|         | 天然ゴムの反応性に関する研究                          |        |                              | ¥1,000  | 陸軍          |
|         | アセトアルデヒドとホルムアルデヒドオリイソブタノール及ヘンタエリスリットの合成 |        |                              | ¥0      | なし          |
|         | 「アセチレン」の反応性に関する研究＊1                     |        |                              | ¥5,000  | 文部省科学研究費    |
|         | 「アセチレン」の加水反応と「アセタルデヒド」の反応性の研究＊1         |        |                              | ¥22,000 | 陸軍、海軍他      |
|         | 有機化学基礎反応の研究＊1                           |        |                              | ¥6,000  | 昭和報公会       |
| 李升基教授   | 化学研究所                                   |        | 点火線に関する研究                    | 不明      | 陸軍第八技術研究所   |
| 李泰圭助教授  |                                         |        | 量子化学の研究                      | ¥10,000 | 養英会         |
| 古川淳二助教授 |                                         |        | 航空用液体燃料                      | ¥18,000 | 陸軍燃料廠       |
|         |                                         |        | 航空用高性能合成「ゴム」                 | ¥6,200  | 航空技術研究協会他   |
|         |                                         |        | 天然「ゴム」の利用                    | 不明      | 陸軍被服本廠      |
|         |                                         |        | 耐油皮膜の研究                      | 不明      | 第六陸軍航空技術研究部 |
|         |                                         |        | 電波兵器用合成「ゴム」の研究               | ¥0      | なし          |

＊1 化学研究所から申告

＊2 工学研究所から申告

小田と野津は航空機用材部と重複しているが、その他の参加者はゴムや繊維の研究者が多い。報告書は2回しか出していない。

第21回報告（1945年、月日は不明）では、古川がセロハン・布・ゴム・金属・木材相互を接着させる実験結果、耐油塗料・耐油ゴムの研究の途中経過について報告した。

第22回報告（1945年、月日は不明）では、藤野がアカマツを用いた積層材の研究、樹脂含浸の実験、石炭酸樹脂の研究について、岡村がエタノール（原文では酒精）とメタノール（原文では木精）

を使用しないポリビニルアルコールの製造について報告した。アカマツに目をつけたのは、それまで利用していたブナとカバが不足するようになったためであり、逼迫する資材状況を反映する研究であったといえる。

### 3-4. 総合研究体制への継承

1945年8月に日本はポツダム宣言を受諾して、連合国の占領下に置かれた。緊急科学研究体制は解散したが、羽田亨総長の後任となった鳥養利三郎総長は緊急科学研究体制の研究を継続すべく、総合研究体制を立ち上げた。主として航空機用材

部メンバーが自然科学部第14班「木材材料に関する研究」に、航空機用有機材料部メンバーが同第6班「高分子化学」と第7班「工芸の科学的研究」に流れていったことは旧稿で明らかにしたとおりである<sup>(24)</sup>。研究の継続という観点から、総合研究体制の報告書を再検討したい。報告書は『総合研究体制研究報告書 自昭和二十一年至昭和二十三年』にまとめられている<sup>(25)</sup>。以下、本稿における報告書の表記は緊急科学研究体制報告書に準じるものとする。

まず航空機用材部のメンバーから見ていこう。梶田茂は第14班から第13号報告（1947年8月15日）で「本邦産桐材の吸湿、吸水性に関する研究」、第17号報告（1949年4月13日）で「ぶな材の横圧応力と弾性並に可塑性について」（舘勇と連名）を報告した。航空機用材部における木材の研究を継続していたといえる。

舘は上記報告以外に、第12班「農林産物の利用に関する研究」から第6号報告（1947年2月18日）で「リグニンの利用に関する研究」を報告した他、第14班から第8号報告（1947年4月7日）で「プリオライト系環化ゴム木材接着剤」、第16号報告の2（1949年1月18日）で「木粉ビスコース化接着剤及びそのテックス」、第17号報告（1949年4月13日）で「鋸屑よりヴァニリンの製造に関する研究」を報告した。

小田良平は第14班から第4回報告（1946年12月19日）で「木材接着面に間隙の存在する際に種々の填充剤が接着剤の接着強度に及ぼす影響に就て」、第6班から第10号報告（1947年6月2日）で「イオン交換性合成樹脂」を報告した。

野津龍三郎は第7班から第4回報告で「アセトン樹脂製漆器素地」、第14班から第16号報告の2で「Keton樹脂応用の研究」を報告した。

野津は「アセトン樹脂製漆器素地」は緊急科学研究体制で研究したアセトン系接着剤を漆器製造に応用したものと明言している。舘と小田の接着

剤（合成樹脂）研究も、同様に考えてよいだろう。尾中文彦は総合研究体制に参加しておらず、近藤金助は参加したものの報告書を提出していない。

次に航空機用有機材料部メンバーである。桜田一郎は第6班長であったが、第1回報告（1946年5月14日）で「パラフィンの比重に関する高分子化学的研究」、第3号報告（1946年9月21日）で「パラフィンに関する高分子化学的研究」、第17号報告（1949年4月13日）で「天然蛋白質の合成と構造」を報告した。桜田は同班の目的は合成樹脂等工業に資する基礎研究であると述べている。

藤野清久は第14班から第12号報告（1947年7月8日）で「リグニンの化学的親和性に就て」を報告した。木材に含まれる天然のリグニンを接着剤として利用できないか調べる実験であった。

岡村誠三教授（1946年3月27日、繊維化学第3講座教授に就任）は第6班から第15号報告（1948年5月15日）で「酢酸ヴィニルの乳化重合機構」を報告した。航空機用有機材料部でのポリビニルアルコール研究とつながっていると考えてよいだろう。

淵野桂六助教授（1944年7月22日、化学研究所助教授に就任）は第6班から第9号報告（1947年4月22日）で「ポリヴィニルアルコールの結晶単位胞」、第15号報告で「ナイロン特に其の低温延伸に関するX線図的研究」を報告した。淵野も航空機用有機材料部での研究との継続性が認められる。

航空機用有機材料部メンバーのうち、李升基と李泰圭は1945年12月に退任した。それ以外は総合研究体制に参加したものの、報告書を出していない。

### 3-5. 木製飛行機開発研究参加者のその後

木製飛行機開発研究に携わった研究者たちのその後を点描しておきたい。

野津龍三郎は1955年に退任するまで、糖の化学的分解に関する研究をライフワークとしたほか、

有機化学基礎反応、天然高分子物質、アセチレンとその誘導体に関する研究などを行った<sup>(26)</sup>。

穴戸圭一は有機天然物化学、有機反応化学の研究を進め、多数の植物成分の解明などを行ったほか、卵胞ホルモン様物質の合成に関する研究で世界的に注目された<sup>(27)</sup>。

繊維化学科に在籍していた桜田一郎、堀尾正雄、藤野清久、岡村誠三は、戦後も引き続き高分子化合物の研究に従事し、日本の繊維産業に貢献した<sup>(28)</sup>。なお、1961年に繊維化学科は高分子化学科に改組された。

小田良平は合成樹脂について幅広い研究を行い、1970年に退任した<sup>(29)</sup>。

古川淳二（1950年8月31日、工学部重合化学講座教授に就任）は重合機構に関する研究を行い、新しい合成ゴムの開発につながった<sup>(30)</sup>。

梶田茂は木材の研究を続ける傍ら、木材研究所長（1944～1952年在任）、演習林長（1953～1957年在任）、農学部長（1957～1959年在任）を歴任し、1960年に退任した<sup>(31)</sup>。

舘勇は戦後、木材研究の応用研究に重点を置き、ポーラログラフィーの研究を発展させ、1962年に退任した<sup>(32)</sup>。

木製飛行機開発は実を結ばなかったが、その過程で生み出された合板や合成樹脂の研究成果は、戦後日本の産業に生かされたといえる。

## 4. 人文科学研究の内容

### 4-1. 人文科学研究費の交付

自然科学に続いて、1944年度から人文科学についても文部省からの研究費が支給されることになった。「人文科学研究要項」から、研究目的および研究の進め方について述べた項目を抜粋すると、以下のとおりである。

一、本研究は時局下緊急遂行を要する重要研究課題の共同研究として貴学（校・所）に

於て担当するとことに決定したるものなり  
二、本研究実施に当りては研究班長を中心として各担当者間の連絡を密にし研究協力の実を挙げると共に成果の急速発揚に努むるものとす

五、研究終了したるときは速に其の全業績を纏め文部省人文科学報告書として研究班長を通じ文部省に提出するものとす  
研究報告書は文部省に於て之を刊行することあるべし

七、研究に関し知得したる秘密を厳守するは勿論研究報告等の取扱に関しても防諜上遺憾なきを期するものとす<sup>(33)</sup>

1944年度と1945年度に京大から採択された研究題目の一覧が表13および表14である。

研究題目を一覧すると、人文科学も戦争の役に立つ研究をするよう求められていたことがよくわかる。人文科学研究は全国規模での共同研究だったが、残念ながら報告書が残っていないので、具体的な研究内容は不明である。しかし、1944年度については、1945年5月に文部省へ提出した調査票<sup>(34)</sup>の記述から断片的にわかるものもある。

汐見三郎教授（財政学）が班長を務めた「国民標準生計費」は、1944年度は研究会を5回開き、毎回1、2名が報告を行った。汐見自身は工場数ヶ所の実地調査を行い、また大日本紡績株式会社東京工場および岐阜工場の従業員約40人に対して3ヶ月間家計調査を行った。だが、交通事情が悪化したため、東京と京都で研究会を別個に開催せざるをえなくなり、文書および連絡員によって連絡を取って最終報告をまとめるに至った。

黒正巖教授（農史）が担当した「日本戦時農鋤業史」は資料蒐集旅行を行い、その成果を「岡山県に於ける日露戦時の農業政策」「福島県に於ける日露戦時の農業諸施設策」等の論文にして発表した。米軍による本土空襲が始まる1944年11月

表13 1944年度人文科学研究費採択一覧

| 人名       | 所属   | 講座        | 小題目                                         | 大題目                    | 班長                  | 配当額         |
|----------|------|-----------|---------------------------------------------|------------------------|---------------------|-------------|
| 大隅健一郎教授  | 法学部  | 商法第2      | カルテル、コンツエルン                                 | 企業態勢の調査研究              | 田中耕太郎東大教授           | ¥900        |
| 倉石武四郎教授  | 文学部  | 支那語支那文学第1 | 現代文学の浸透に関する研究                               | 現代支那に関する研究             | 矢野仁一京大名誉教授          | ¥1,000      |
| 宮崎市定教授   |      | 東洋史学第2    | 吏治及自治の組織と実際との研究                             | 現代支那に関する研究             | 矢野仁一京大名誉教授          | ¥1,000      |
| 泉井久之助助教授 |      |           | 南洋群島語及オーストロネシア語の系統研究                        | 南方語の比較研究               | 宇野円空東大教授            | ¥1,200      |
| 臼井二尚助教授  |      |           | 南方に於ける家族制度                                  | 東亜に於ける家族制度             | 戸田貞三東大教授            | ¥1,800      |
| 小島昌太郎教授  | 経済学部 | 経済学第2     | インフレーションと国民生活                               | インフレーションの理論と実際—戦時物価問題— | 荒木光太郎東大教授           | ¥600        |
| 汐見三郎教授   |      | 財政学       | 戦時税                                         | 戦時財政の研究                | 神戸正雄東大名誉教授          | ¥720        |
|          |      |           | 戦力増強に必要な生産能率と生活 工場 鉱山／標準生活状態の変遷並に標準生計費の国際比較 | 国民標準生計費                | 汐見三郎京大教授            | ¥2,400      |
| 谷口吉彦教授   |      | 東亜経済政策原論  | 大東亜共栄圏の生産及交易政策                              | 大東亜共栄圏の経済問題            | 丸谷喜市神戸商大学長          | ¥1,000      |
| 松岡孝児教授   |      | 経済学第5     | 国防経済と広域経済                                   | 国防経済の理論                | 橋爪明男東大教授            | ¥600        |
| 青山秀夫助教授  |      |           | 乗数理論                                        | 利子の理論政策研究              | 高田保馬民族研究所長          | ¥690        |
| 佐波宣平助教授  |      |           | 徴用船に関する損害処理                                 | 戦時保険政策                 | 森荘三郎東大教授            | ¥600        |
| 徳永清行助教授  |      |           | 近代支那農村に於ける社会的経済的変動の研究、殊に金融資本の農村圧迫についての研究    | 現代支那に関する研究             | 矢野仁一京大名誉教授          | ¥1,000      |
| 穂積文雄助教授  |      |           | 現代支那貧窮階層の研究、殊に流民を中心として                      | 現代支那に関する研究             | 矢野仁一京大名誉教授          | ¥1,000      |
| 堀江保蔵助教授  |      |           |                                             | 日本戦時工業史                | 戦争経済史の研究—第一期日本維新以後— | 本庄栄治郎大阪商大学長 |
| 大槻正男教授   | 農学部  | 農業計算学     | 戦力増強に必要な生産能率と生活 農業                          | 国民標準生計費                | 汐見三郎京大教授            | ¥600        |
|          |      |           | 大東亜に於ける日本農業の特質                              | 大東亜建設に於ける農業問題          | 東畑精一東大教授            | ¥700        |
| 黒正巖教授    |      | 農史        | 日本戦時農鋤業史                                    | 戦争経済史の研究—第一期日本維新以後—    | 本庄栄治郎大阪商大学長         | ¥900        |

表 14 1945 年度人文科学研究費採択一覧

| 人名       | 所属   | 講座               | 研究題目                              | 班名                                            | 班長               | 金額     |
|----------|------|------------------|-----------------------------------|-----------------------------------------------|------------------|--------|
| 大隅健一郎教授  | 法学部  | 商法第 2            | カルテル、コンツエ<br>ルン、我国企業体制法の<br>発展    | 企業態勢の調査研究                                     | 田中耕太郎東大教授        | ¥450   |
| 黒田覚教授    |      | 政治学政治<br>史第 1    | 英国の戦後政策                           | 反枢軸主要国の政治動<br>向に関する調査研究                       | 高木八尺東大教授         | ¥450   |
| 田岡良一教授   |      | 国際公法第<br>2       | 戦後の世界に於ける日<br>支関係                 | 支那の政治動向に関す<br>る調査研究                           | 神川彦松東大教授         | ¥450   |
| 宮本英脩教授   |      | 刑事訴訟法<br>第 1     | ビルマ法制総説                           | 英米法系諸地域法制の<br>調査研究                            | 高柳賢三東大教授         | ¥500   |
| 木村素衛教授   | 文学部  | 教育学教授<br>法       | 三民主義と大東亜共栄<br>圏理念                 | 大東亜戦争の由来、本<br>質、遂行並に大東亜建<br>設の理念に関する哲学<br>的研究 | 和辻哲郎東大教授         | ¥1,250 |
| 西谷啓治教授   |      | 宗教学第 1           | 国民教化の原理                           | 大東亜戦争の由来、本<br>質、遂行並に大東亜建<br>設の理念に関する哲学<br>的研究 | 和辻哲郎東大教授         | ¥1,250 |
| 泉井久之助助教授 |      |                  | 内南洋諸島の系統論                         | 南方圏の主語の研究                                     | 辻直四郎東大教授         | ¥1,000 |
| 高山岩男助教授  |      |                  | 大東亜建設と国内刷新<br>の問題                 | 大東亜戦争の由来、本<br>質、遂行並に大東亜建<br>設の理念に関する哲学<br>的研究 | 和辻哲郎東大教授         | ¥1,250 |
| 鈴木成高助教授  |      |                  | 大東亜戦争と欧州戦争<br>との連関                | 大東亜戦争の由来、本<br>質、遂行並に大東亜建<br>設の理念に関する哲学<br>的研究 | 和辻哲郎東大教授         | ¥1,250 |
|          |      |                  | 反枢軸国の政治外交動<br>向                   | 我が決戦態勢と世界経<br>済の動向                            | 柳川昇東大教授          | ¥650   |
| 大塚一朗教授   | 経済学部 | 経営学              | 生産防衛対策                            | 決戦体制と生産増強対<br>策                               | 高瀬荘太郎東京商大学長      | ¥1,400 |
| 小島昌太郎教授  |      | 経済学第 2           | 国家資金計画と物価政<br>策                   | 決戦態勢と物価問題                                     | 小島昌太郎京大教授        | ¥1,688 |
|          |      |                  | 生産防衛対策                            | 決戦体制と生産増強対<br>策                               | 高瀬荘太郎東京商大学長      | ¥150   |
| 汐見三郎教授   |      | 財政学              | 国民所得と租税負担                         | 決戦体制と財政問題                                     | 井藤半爾東京商大教授       | ¥1,250 |
| 静田均教授    |      | 経済学第 6           | 生産防衛対策                            | 決戦体制と生産増強対<br>策                               | 高瀬荘太郎東京商大学長      | ¥400   |
| 谷口吉彦教授   |      | 東亜経済政<br>策原論     | 生産防衛対策                            | 決戦体制と生産増強対<br>策                               | 高瀬荘太郎東京商大学長      | ¥150   |
|          |      |                  | 米英及び米ソの経済関<br>係                   | 我が決戦態勢と世界経<br>済の動向                            | 柳川昇東大教授          | ¥650   |
| 堀江保蔵教授   |      | 経済史              | 北米合衆国に於ける第<br>一次世界大戦時及戦後<br>の工業生産 | 戦時経済及戦後経営の<br>歴史的研究                           | 高橋誠一郎慶応大名誉教<br>授 | ¥900   |
| 松岡孝児教授   |      | 経済学第 5           | 欧洲反枢軸国主として<br>仏国の経済動向             | 我が決戦態勢と世界経<br>済の動向                            | 柳川昇東大教授          | ¥1,738 |
| 青山秀夫助教授  |      | 国民所得の変動と物価<br>問題 | 決戦態勢と物価問題                         | 小島昌太郎京大教授                                     | ¥375             |        |

| 人名        | 所属      | 講座    | 研究題目                   | 班名                                | 班長           | 金額     |
|-----------|---------|-------|------------------------|-----------------------------------|--------------|--------|
| 佐波宣平助教授   | 経済学部    |       | 生産防衛対策                 | 決戦体制と生産増強対策                       | 高瀬莊太郎東京商大学長  | ¥400   |
| 徳永清行助教授   |         |       | 北支及蒙疆経済の戦力化問題          | 外地及大陸経済の戦力化問題                     | 北山富久二郎東大教授   | ¥300   |
|           |         |       | 重慶の経済動向                | 我が決戦態勢と世界経済の動向                    | 柳川昇東大教授      | ¥850   |
| 中谷実助教授    |         |       | 財政と国家資金計画              | 決戦体制と財政問題                         | 井藤半爾東京商大教授   | ¥375   |
|           |         |       | 戦費支出及び産業資金放出の物価に及す影響   | 決戦態勢と物価問題                         | 小島昌太郎京大教授    | ¥375   |
| 神戸正雄名誉教授  |         |       | 決戦体制下の財政政策             | 決戦体制と財政問題                         | 井藤半爾東京商大教授   | ¥375   |
| 宮本又次九大助教授 |         |       | 仏蘭西に於て第一次世界大戦時の経済及戦後経営 | 戦時経済及戦後経営の歴史的研究                   | 高橋誠一郎慶応大名誉教授 | ¥900   |
| 大槻正男教授    | 農学部     | 農業計算学 | 農村をめぐる財政問題             | 決戦体制と財政問題                         | 井藤半爾東京商大教授   | ¥375   |
|           |         |       | 決戦体制と最低食糧確保            | 決戦態勢と生活確保対策                       | 東畑精一東大教授     | ¥500   |
| 渡辺庸一郎教授   |         | 農政学   | 農村を主とする国民生活機能の確保       | 決戦態勢と生活確保対策                       | 東畑精一東大教授     | ¥500   |
| 高坂正顕教授    | 人文科学研究所 |       | 大東亜戦争の世界史的意義           | 大東亜戦争の由来、本質、遂行並に大東亜建設の理念に関する哲学的研究 | 和辻哲郎東大教授     | ¥1,250 |
| 島恭彦助教授    |         |       | 大陸労働の戦力化               | 外地及大陸経済の戦力化問題                     | 北山富久二郎東大教授   | ¥150   |

以前は、物資不足とはいえ、各地の研究者が一堂に会しての研究会や研究旅行が可能だったわけである。

一方、戦争の影響をまともに受けた研究班もあった。臼井二尚助教授（1944年9月13日付で社会学講座教授に就任）が担当した「南方に於ける家族制度」は研究分担者の政本義員特任助手が応召したため、オーストラリア原住民の親族制度についての研究が一時中断してしまった。それでも臼井は別の助手を見つけて再開することができたからよいが、「吏治及自治の組織と実際との研究」を担当した宮崎市定教授（東洋史学第2）は、1945年3月に自身が応召したため、研究が完全にストップした。

人文科学研究費は、1945年度中は交付されたが、1946年2月20日付で文部省科学教育局長から総長に対し、打ち切りを通告した。

#### 4-2. 戦時期人文科学研究のその後

人文科学研究費を交付されていた研究者たちは、宮本英脩教授（刑事訴訟法第1、1944年4月死去）、木村素衛教授（教育学教授法、1946年2月死去）を別として、自然科学研究者よりも敗戦の影響を大きく受けることになった。

法学部では黒田覚教授（政治学政治史第1）が滝川幸辰の復帰を前に退任し、公職追放にあった<sup>(35)</sup>。

文学部では西谷啓治教授（宗教学第1）、高山岩男助教授、鈴木成高助教授が教員適格審査で不適格となった。

経済学部では松岡孝児教授（経済学第5）が軍人であった経歴を理由に公職追放となり、大塚一朗教授（経営学）、徳永清行助教授が不適格となったほか、経済学部の「総退陣」によって汐見三郎、小島昌太郎教授（経済学第2）、谷口吉彦教授（東亜経済政策原論）が退任した<sup>(36)</sup>。

人文科学研究所では高坂正顕教授が不適格となった。

そして京大に留まった教官の一部は、総合研究体制に参加した。人文科学部第1班「労働法制の研究」に大隅健一郎教授（商法第2）、第2班「転換期の経済諸問題」に堀江保蔵教授（経済史）、第3班「農業経営の合理化に関する研究」に大槻正男教授（農業計算学→農業経営学）と渡辺庸一郎教授（農政学）、第5班「知的道徳的革新の諸問題」に臼井二尚が参加している<sup>(37)</sup>。ただし、彼らが提出した報告書はない。テーマ的にも、戦時中の人文科学研究費交付対象の研究とは継続性を認めがたい<sup>(38)</sup>。

大隅健一郎は初の著作『企業合同法の研究』（1935年）以来、会社法の研究を進めてきたので、人文科学研究費を交付されたカルテルの研究は、彼の中では一貫した問題意識で行っていたと思われる。大隅はその後、1966年に最高裁判所判事に就任した<sup>(39)</sup>。

宮崎市定は東洋史研究の大家として壮大な業績を残したほか、西南アジア史学講座の開設にも尽力した<sup>(40)</sup>。彼の全業績は『宮崎市定全集』に収録されているが、文部省主催の『大東亜史概説』編纂事業において執筆した原稿も戦後刊行しており<sup>(41)</sup>、戦時期も本人にとっては研究の途絶期間ではなかった。

泉井久之助は1947年4月30日付で言語学講座教授に就任し、主要研究領域である印欧語比較研究のほか、ミクロネシアや東南アジアなど南方言語の研究も発展させた。これは「南洋群島語及オーストロネシア語の系統研究」を引き継いでいるとみてよいだろう<sup>(42)</sup>。

臼井二尚は、戦前は社会学方法論の研究に力を入れていたが、戦後は村落調査において膨大な資料を残した<sup>(43)</sup>。

青山秀夫は1946年7月31日付で統計学講座教授となり、「総退陣」で退任した蜷川虎三の後を

引き継いだ<sup>(44)</sup>。

堀江保蔵は日本・東洋・西洋にまたがり、原始時代から現代にいたる経済史の総論を確立した<sup>(45)</sup>。1954年から1956年にかけて経済学部長も務めている。

穂積文雄は1945年3月8日付で経済学第4講座教授となり、後に日本経済思想史講座に転じた。穂積は、戦前は中国の経済思想史を研究していたが、戦後は西洋の研究に移り、さらに近代資本主義批判の思想に力点を置くようになった<sup>(46)</sup>。

佐波宣平は1946年7月31日付で経済学第5講座教授となり、交通論と海運論を担当した<sup>(47)</sup>。

島恭彦は1946年7月31日付で経済学部助教授に転じ、1949年2月16日付で財政学講座教授となった。従来の国家主義的財政制度・財政思想の徹底的な批判と、自由主義的財政思想の現代的な発展を独自に構想して、戦後における日本財政学の全面的な展開の基礎を創り上げたと評される<sup>(48)</sup>。

大槻正男は1947年10月15日付で農業計算学講座から農業経営学講座に転じると、前任の橋本伝左衛門教授が確立した伝統的農業経営学の経営経済学化を進めた<sup>(49)</sup>。

渡辺庸一郎は、戦時期は食糧増産の要請に応じた農業政策を追っていたが、戦後は農地改革を通じて農村に生じた諸問題の究明に力を注いだ<sup>(50)</sup>。

黒正巖は1925年に農史講座が設置されてから継続的な資料発掘を進めていたが、1949年に大阪経済大学長に転任した<sup>(51)</sup>。「日本戦時農鉱業史」は従来の研究の延長線上にあったと考えられる。

人文科学研究は自然科学研究と比べると、戦時中から戦後にかけての研究の継続性を判別するのが難しいが、総動員体制の実践に直結するような研究以外は、やはり何らかの継続性を認めるべきであろう。

## おわりに

京都大学大学文書館は京大の事務職員が京大に

関する新聞記事を収集したスクラップブックを所蔵している。1932年以降のものしかないが、当時の新聞は京大で行われている自然科学研究について、頻繁に報道していたことがわかる。特に小田良平や桜田一郎、李升基の合成繊維研究が多く取り上げられているのは、物資が窮迫する中で期待を寄せられていたのであろう<sup>(52)</sup>。日米開戦後は軍事研究も紙面に登場しており、梶田茂や舘勇の木製飛行機開発研究も報道されていた<sup>(53)</sup>。そして戦争が終わると京大に関する報道からも軍事色が消え、開墾調査や染色体倍加法のような、食糧増産につながる研究が注目される<sup>(54)</sup>。

平時も戦時も、大学は「役に立つ研究」をすることを求められてきた。誰にとってかといえば、最大のスポンサーである国家にとってということになる。その都度資金を獲得できるように話を合わせるだけで、当事者としては一貫した問題意識に基づいて研究を進めているつもりであっただろう。このような研究者の姿勢は文系理系双方に共通する。ただし、あまりにも露骨な国策追従や、個人の経歴が仇となって、敗戦後に追放の憂き目を見た者も出た。これは文系の研究者の方に多く見られる現象であった。

そして昨今、軍学共同研究の是非に注目が集まっている。2017年3月、防衛省や米軍の提供する資金で研究を行うことに対して、日本学会会議が「軍事的安全保障研究に関する声明」を発表し、これを受けて5月に日本科学者会議が防衛省の安全保障技術研究推進制度に反対する決議を採択した。どちらも科学者が戦争協力を行った過去を反省するとともに、軍学共同研究が大学に対する国家の介入につながることを警戒している。

2018年3月、京大は「京都大学における軍事研究に関する基本方針」を制定し、「本学における研究活動は、社会の安寧と人類の幸福、平和へ貢献することを目的とするものであり、それらを脅かすことに繋がる軍事研究は、これを行わない」

と明言した。ただし、「個別の事案について判断が必要な場合は、総長が設置する常置の委員会において審議する」と留保している。大学における研究のあり方を考える上で、戦時中における京大の学術研究の実情は、今こそ振り返るべき経験であろう。

軍事研究であるか否か、研究内容によって判別することは、至難というより不可能である。木製飛行機開発に必須であった合成樹脂の研究が戦後の日本社会で生かされたように、同じ技術が使い方次第で全く違うものになる。そしてそれは、自然科学のみならず、人文科学についてもあてはまる。

近年、デュアル・ユースという用語を耳にするようになった。防衛装備庁HPの説明によると、「防衛技術にも応用可能な先進的な民生技術」を指す<sup>(55)</sup>。しかし、田中浩朗は、第1次世界大戦の頃から、日本の軍部は同様の考え方で科学技術動員を進めたことを指摘している<sup>(56)</sup>。また、山崎文徳は、「そもそも軍事技術開発から民生分野へのスピノフは偶然的であり、民生分野の技術発達のためには、最初から民生技術開発に投資する方が有効である」と主張する<sup>(57)</sup>。

総動員体制下において、研究を通じた戦争協力を拒否することは、辞職しない限り不可能であっただろう。また、戦争協力という形であっても、研究が続けたことが戦後につながったのも確かである。ゆえに大学は積極的に軍事研究に取り組むべきと主張する論者もいるかもしれないが、筆者はそれに与しない。逆に、「社会にとって必要な研究をするのに、何故軍事研究のような国策への協力と結びつけなければ、十分な資金を得られないのか」と問いかけたい。

## [註]

- (1) 拙稿「京大と満洲国—満蒙研究会・満蒙調査会の活動を中心に—」『京都大学大学文書館研究紀要』15号(2017年)、33-52頁。同「戦時期京大の軍

- 事協力—工学部と理学部を中心に—」同16号（2018年）、15-35頁。同「占領期における京大の自然科学研究—緊急科学研究体制から総合研究体制へ—」同17号（2019年）、15-33頁。
- （2）『科学研究費に関する書類』昭和14年度～19年度（京都大学大学文書館所蔵、識別番号01A16788～16794）
- （3）『科学研究項目調査綴』（京都大学大学文書館所蔵、識別番号01A17301）
- （4）『人文科学研究費ニ関スル書類』（京都大学大学文書館所蔵、識別番号02A00722）
- （5）1933年度に創設された日本学術振興会研究費が応用研究を重視していたのに対して、科学研究費は基礎研究を重視していたと水沢光は指摘している。水沢光「日本学術振興会研究費と科学研究費交付金の分野別割合にみる戦時と戦後の連続性」『科学史研究』272号（2015年）379-395頁、同「日本における研究助成の制度化」『科学史研究』282号（2017年）138-142頁、同「戦時下における研究支援制度の拡充」『歴史評論』832号（2019年）14-24頁。
- （6）緊急科学研究体制については拙稿前掲「占領期における京大の自然科学研究—緊急科学研究体制から総合研究体制へ—」を参照。
- （7）河村豊は文部省が同閣議決定に関与していたことと、技術院に対抗して科学動員を画策していたことを明らかにしている。河村豊「戦時後期における文部省の戦時科学政策 企画院（技術院）と文部省の二度目の対立」『イル・サジアトーレ』35号（2006年）33-46頁。
- （8）『精神科学研究奨励金関係書類 自昭和4年至昭和10年』（京都大学大学文書館所蔵、識別番号01A00021）、『精神科学研究奨励金関係書類 自昭和11年至昭和17年』（同01A00022）、『自昭和18年度 精神科学研究奨励金ニ関スル書類』（同01A00023）
- （9）拙稿前掲「戦時期京大の軍事協力—工学部と理学部を中心に—」
- （10）大半の研究者は、戦争との関連性を強調した。中には稲田務医学部講師の「摂護腺（前立腺）の機能に関する研究」が「神経系統との関係を考慮するを以て戦争との関連を目標とす」と説明しているように、こじつけ気味のものもあった。
- （11）京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史』部局史編第1巻（京都大学後援会、1998年）811頁。
- （12）同上878頁。
- （13）拙稿前掲「占領期における京大の自然科学研究—緊急科学研究体制から総合研究体制へ—」
- （14）寺見は1896年生まれ。1918年に陸軍経理学校を卒業して陸軍主計少尉となり、そのまま主計大尉まで昇進したが、1926年に病気のため辞職し、翌年京大農学部に入學した。『学位授与関係書類 昭和16年（下）42』（京都大学大学文書館所蔵、識別番号01A16075） 拙稿前掲「占領期における京大の自然科学研究—緊急科学研究体制から総合研究体制へ—」註25。
- （15）トラクターの開発史を研究した藤原辰史は、京大農学部の大槻正男と橋本伝左衛門がトラクターに象徴される農業の機械化に対して否定的見解を示したことを紹介しているが、田村豊については言及していない。藤原辰史『トラクターの世界史 人類の歴史を変えた「鉄の馬」たち』（中公新書、2017年）208-211頁。
- （16）『官制関係書類 昭和16年』（京都大学大学文書館所蔵、識別番号01A00203）所収。
- （17）同上所収。
- （18）拙稿前掲「占領期における京大の自然科学研究—緊急科学研究体制から総合研究体制へ—」
- （19）日本の軍用機開発史については水沢光の研究があり、陸軍が外部への研究の委託に積極的であったと述べている。その中で東大の協力についても触れているが、京大については言及していない。水沢光『軍用機の誕生 日本軍の航空戦略と技術開発』（吉川弘文館、2017年）を参照。
- （20）木製飛行機については以下の文献を参照した。「決戦と木製飛行機 山本峰雄先生に訊く」『航空少年』21巻2号（1944年）22-27頁、福田秀雄「木製飛行機の将来性」『国民防空』6巻3号（1944年）40-43頁、福渡七郎「木製飛行機の素材の研究とその後」『接着』1巻2号（1957年）1-4頁、「ネ

- ズ爺&ハデニャンの特許探偵団 Vol.27 木製飛行機〜英国人の発明（後）』『発明』115巻9号（2018年）18-21頁。
- (21) 航空機用木材確保をめぐる当時の状況については以下の文献を参照した。足立英三郎「飛行機と木材の用法」『日本木材協会誌』2巻9号（1943年）19-20頁、北尾亀男「木製飛行機の歴史」同21-22頁、「座談会航空決戦と木材」『日本木材協会誌』2巻10号（1944年）18-25頁、田中勝吉「飛行機と木材」『日本木材協会誌』2巻11号4-6頁、「座談会航空決戦と木材（二）」9-11頁、「木製飛行機と其の資材工業」『安田銀行調査時報』177号（1944年）28-53頁。
- (22) 註5に掲げた水沢論文を参照。
- (23) 『自昭和十八年緊急科学研究体制関係書類』（京都大学大学文書館所蔵、識別番号01A17305）
- (24) 拙稿前掲「占領期における京大の自然科学研究—緊急科学研究体制から総合研究体制へ—」表6
- (25) 『総合研究体制研究報告書 自昭和二十一年至昭和二十三年』（京都大学大学文書館所蔵、01A00515）なお、第1回と第4回以外は第〇号という表記である。
- (26) 前掲『京都大学百年史』部局史編第1巻611頁。
- (27) 京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史』部局史編第2巻（京都大学後援会、1998年）199頁。穴戸は1971年退任。
- (28) 同上229-242頁。桜田は1967年退任。堀尾は1969年退任。藤野は1964年福井大学長に転任。岡村は1977年退任。
- (29) 同上243-244頁。
- (30) 同上244-245頁。古川は1976年退任。
- (31) 同上355頁。
- (32) 同上362頁。また、ポーラログラフイーについては館本人の回顧がある。『京都大学農学部創立四十周年記念 歴史を語る』（京都大学農学部創立四十周年記念事業会、1964年）127-129頁。
- (33) 前掲『人文科学研究費ニ関スル書類』所収。文部省からの通知と思われる。
- (34) 同上所収。
- (35) 1945年11月、鳥養総長が1933年の滝川事件以前の大学自治を回復することで前田多門文部大臣と合意した。これをうけて法学部は、滝川幸辰が学部長に復帰して法学部を再建することになり、1946年2月の学部長就任前後に大量の人事異動が発生した。松尾尊兌『滝川事件』（岩波書店、2005年）259-283頁。前掲『京都大学百年史』部局史編第1巻289-291頁。
- (36) 経済学部は1946年2月に教官の申し合わせで全教官が「総退陣」することになり、結局教授6名、助教授1名、講師2名が退職した。前掲『京都大学百年史』部局史編第1巻400-401頁。京都大学経済学研究科・経済学部学部史編纂委員会編『京都大学経済学部八十年史』（京都大学経済学部八十年周年記念事業実行委員会、1999年）50-55頁。『思いで草』（京都大学経済学部、1969年、非売品）185-250頁。
- (37) 拙稿前掲「占領期における京大の自然科学研究—緊急科学研究体制から総合研究体制へ—」
- (38) ただし、第3班「農業経営の合理化研究」は緊急科学研究体制の戦時農業経営合理化部との継続性が顕著である。拙稿前掲「占領期における京大の自然科学研究—緊急科学研究体制から総合研究体制へ—」
- (39) 前掲『京都大学百年史』部局史編第1巻342-343頁。
- (40) 同上102-103頁。
- (41) 『大東亜史概説』については拙稿「資料紹介 大東亜史概説」『京都大学大学文書館研究紀要』第14号（2016年）55-89頁を参照。
- (42) 前掲『京都大学百年史』部局史編第1巻160頁。
- (43) 同上170頁。
- (44) 同上438頁。
- (45) 同上441頁。
- (46) 同上443頁。
- (47) 同上459頁。
- (48) 同上454頁。
- (49) 前掲『京都大学百年史』部局史編第2巻393頁。
- (50) 同上398頁。
- (51) 同上401頁。
- (52) たとえば『京都日出新聞』1939年1月10日付、『12

- SCRAP BOOK（昭和13年10月19日－昭和14年2月5日マデ）』（京都大学大学文書館所蔵、識別番号01A21190）所収。『大阪朝日新聞』同年10月5日付、『京都日日新聞』1940年6月5日付、『16（昭和14年1月27日－昭和15年8月29日）』（京都大学大学文書館所蔵、識別番号01A21194）所収。
- (53) 『毎日新聞』1943年12月10日付、『京都新聞』1944年3月28日付、『SCRAP BOOK15 昭和18年9月24日－昭和19年9月』（京都大学大学文書館所蔵、識別番号01A21206）所収。
- (54) 『京都新聞』1946年6月21日付、『朝日新聞』同年9月16日付、『SCRAP BOOK 16』（京都大学大学文書館所蔵、識別番号01A20859）所収。
- (55) 防衛装備庁 HP（<https://www.mod.go.jp/atla/funding.html>） 2020年1月閲覧。
- (56) 田中浩朗「科学技術動員体制史から見たデュアル・ユース研究の奨励」『科学史研究』282号（2017年）129-138頁。
- (57) 山崎文徳「アメリカの軍事技術開発と「デュアルユース技術」の軍事利用」『歴史評論』832号（2019年）59-69頁。



## イングランドの地方公文書館における 外部資金の活用

元 ナミ†

### はじめに

日本において地方公文書館<sup>(1)</sup>の運営にかかわる予算は親組織の地方自治体の予算から配分されることがほとんどである。多くの地方公文書館の年間予算は建物等施設の維持管理費、事業運営費、人件費などに大きく区分されているが<sup>(2)</sup>、公文書館が自らの事業を遂行するために直接活用できる外部資金制度は整備されていない。さらに劣化が進んだ施設の大規模改修や収蔵空間の拡張工事のための費用が容易に確保できる地方自治体はほとんど存在しない。

一方、海外の場合は公私立のアーカイブズ機関・施設が通常の予算だけでは展開できない事業等を推進するために外部から資金を受け入れることがある。イギリスにおいては国営宝くじ (National Lottery) の収益金により社会の多方面の事業を支援する各種基金が有名であり、特にアーカイブズ関係事業を支援するものに文化遺産基金 (National Lottery Heritage Fund, NLHF<sup>(3)</sup>。旧 Heritage Lottery Fund, HLF) が知られている<sup>(4)</sup>。文化遺産の保存と利用促進のために開設された NLHF は 1994 年から始まって以来、イギリス全域の 1200 の博物館・図書館とアーカイブズ<sup>(5)</sup>等の施設を対象に 2 億 4 千万ポンドを支出した実績がある<sup>(6)</sup>。特に「博物館・図書館・アーカイブズ (Museums, libraries and archives)」支援プログラ

ムは、アーカイブズ資料の整理・保存・デジタル化等を通じた利用促進のための作業等を含め、そのための施設整備や新しい書庫等の建設費用まで申請できる。

本稿ではイングランドにおいて公文書館を新設するために公的資金制度を活用した二つの州立公文書館<sup>(7)</sup>を取り上げ、そこに外部資金が調達された経緯とその目的等について概観する。その上で州立公文書館が地域の歴史と記録を保存、公開し、コミュニティの中心機関として位置づけられる意義を考察する。具体的には NLHF 基金を調達して新公文書館を建設しているサフォーク州 (Suffolk) と主に地域開発のための公的資金を調達して新しい公文書館を建設したウスターシャー州 (Worcestershire) における州立公文書館の事例を紹介する。

両者は①親組織の資金のみならず、外部資金制度を有効に調達し②地域の歴史的文化遗产と記録資料の研究・利用ができる複合施設を作り上げるために③自治体と大学が連携し、公文書館を地域社会の教育・学習施設として位置づけたことが似ている。本稿は特に各プロジェクトを支える基金・助成等の支援体制を紹介し、公文書館といったアーカイブズ機関が地域の歴史と学術情報を結びつける複合施設として位置づけられる意義について検討していくことにする。

† 京都大学大学文書館助教

研究方法は、文献調査とヒアリング調査によるものとする。文献調査は、イギリス政府、国営宝くじ基金、文化遺産基金（NLHF）がそれぞれウェブ上で公開している資料と、サフォーク州とウスターシャー州及びその公文書館のウェブサイト上の記載内容を参照した。またヒアリング調査は、外部資金を調達したサフォーク州立公文書館と新公文書館のプロジェクト・マネージャー、ウスターシャー州立公文書館の担当者を対象に2019年8月21日、22日に行った。

## 1. イギリスにおけるアーカイブズ事業に関わる外部資金

海外の公文書館等では様々な助成や基金、寄付金など外部から資金を受け入れられる制度が整備されており、必要な場合、それを獲得するための様々な努力が行われていることが知られているが、その実態についてはあまり日本に知られていない。例えば、アメリカにおいてはアメリカ国立公文書館（National Archives and Records Administration, NARA）・国家歴史出版物記録委員会（National Historical Publications and Records Commission, NHPRC）が州政府<sup>(8)</sup>を通じて国全体の歴史と文化の記録を共有するためのアーカイブズの利用及び促進のための基金を交付している。その用途は国の歴史全般に関わるアーカイブズ資料の収集、整理、出版及びデジタル化など、広く一般の利用を促進することを目的とするプロジェクトに限られる<sup>(9)</sup>。そのほかに博物館・図書館サービス機構（Institute of Museum and Library Services, IMLS）、全米芸術基金（National Endowment for the Arts, NEA）、全米人文科学基金（National Endowment for the Humanities, NEH）といったアメリカの歴史と芸術、人文学の各分野を支援する基金等は建物の改修、新築などにも活用することができると知られているが、まだ日本にはほとんど紹介されていない。

イギリスの場合、1994年に国営宝くじ法<sup>(10)</sup>により国営宝くじの基金が設立されて以来、イギリス全域の人々の文化遺産を探る、楽しむ、保護するなどの事業を支援するために文化遺産基金が設置され、これまで総額79億ポンドを交付してきた。この基金は文化遺産のみならず人々及び地域社会にも良い変化をもたらす様々なプロジェクトを支援する。また、自然景観の復元から古い建物の修復、多様性のある地域社会とその歴史を記録すること、そのための技術トレーニングまでを対象としている。NLHFの親組織は国立文化遺産記憶基金（National Heritage Memorial Fund, NHMF）であり、デジタル・文化・メディアとスポーツ省（Department for Digital, Culture, Media and Sport, DCMS）所管の公的機関（non-departmental public body）である。国営宝くじ法により宝くじ1枚当たり一定の金額が社会貢献分（good cause）<sup>(11)</sup>として使われ、それをもとに設置されたいくつかの基金のうち一つがNLHFである。NHMFが国営宝くじの基金配分機関であり、NLHFは基金申請の審査と分配を担当している<sup>(12)</sup>。

日本でも国営宝くじ基金の仕組みやNLHFの取り組みを取り上げた業績があり、博物館学分野（布施美穂（1997）；竹内有理（2002）；石川宏之（2006））<sup>(13)</sup>、都市計画学と建築学分野（坂井文（2008）；安齊真吾（2012）；苅京禄，木下剛（2014））<sup>(14)</sup>、観光まちづくり分野（岡村祐（2011a）；岡村祐（2011b）；岡村祐（2011c））<sup>(15)</sup>などがある。NLHF以外の国営宝くじ基金は芸術、スポーツ振興関係の報告（杉浦（2003））<sup>(16)</sup>と文部科学省のスポーツ庁設置検討のための調査研究<sup>(17)</sup>が公表されている。しかし管見の限り公文書館、アーカイブズ学分野に与えた影響について確認することはできない。

本稿で取り上げるNLHFは以下の表1のとおり、7つの部門の支援プログラムがある<sup>(18)</sup>。そのうち博物館、図書館及びアーカイブズ部門では、国立

表1 NLHFの支援部門<sup>(19)</sup>

| 応募部門                                              | 応募内容                                         |
|---------------------------------------------------|----------------------------------------------|
| コミュニティの遺産 (Community heritage)                    | コミュニティの遺産を記念すること、地域の伝統を保存することなど              |
| 自然景観、公園および自然環境 (Landscapes, parks and nature)     | 自然を早急に回復させるためのプロジェクト (2024年までに優先的に支援対象)      |
| 地域、建物および記念物 (Areas, buildings and monuments)      | 後世の人々のために歴史的建物、記念物そして考古学的場所などを保護する           |
| 博物館、図書館及びアーカイブズ (Museums, libraries and archives) | 文化遺産に関する博物館、図書館及びアーカイブズと、その収集品に関わる様々なプロジェクト  |
| 文化と記憶 (Cultures and memories)                     | 相互に異なるコミュニティの伝統、慣習、技術、知識を探求し、保護し、記念することを支援する |
| 礼拝の場所 (Places of worship)                         | イギリスの中で最も古くて大切にされる歴史的建物として、教会・寺院等の修復等を支援     |
| 産業、海運及び運送 (Industrial, maritime and transport)    | 現代の形成に関わった革新的な建物、交通そして技術を記念する                |

及び地方自治体の博物館、図書館、アーカイブズ、歴史的に貴重な資料を所蔵している図書館、コミュニティのアーカイブズ、文化遺産を所蔵している機関の他、それらを対象にしたプロジェクトのアイデアまで支援することができる。また、この基金は「建物の再活性化および新しい目的の設備の提供」「興味深い新しい展示と学習空間の造成」「専門的な図書館、アーカイブズ及びギャラリー」「多様性を尊重する観衆を集める」「資料等の翻訳と受入れ」「収集品の開発」のような事業を支援する<sup>(20)</sup>。各プログラムは小型 (3000ポンド～1万ポンド、1万ポンド～10万ポンド)、中型 (10万ポンド～25万ポンド)、大型 (25万ポンド～500万ポンド (Heritage Enterpriseを含む)、500万ポンド以上) まで応募でき、応募要件と支援対象、審査期間と基金の交付回数などが異なる<sup>(21)</sup>。

公文書館における資金獲得を巡っては、従来欧米のアーカイブズ学分野においても「十分に開発されていない機能 (Cox, 1988)<sup>(22)</sup>」として指摘されたが、今は「豊富な経験と高度に計画された資金の運用は様々な可能性を引き出す (Joffrion 他, 2015)<sup>(23)</sup>」ものであり、「公文書館の運営のために必須的機能」(Ray 他, 2013)<sup>(24)</sup>として学術的検討がなされている。

次章から紹介するサフォーク州とウスターシャー州はそれぞれイースト・オブ・イングランド地方とウエスト・ミッドランズ地方に属している。イングランドにおいて地方を区分する最上位単位は1994年にイングランド全域に設置された9つの地方 (Regions)<sup>(25)</sup> である。これは地方政府官庁 (Government Offices for the Regions (GOR)) 制度によるものであるが、2011年3月31日廃止され、現在は統計的目的のための地理的地域レベルとして維持されている。行政単位として地方自治権を持つ自治体は「大ロンドン (Greater London) とそのバラ (London Borough)」、「州 (County) と非大都市区 (Non-metropolitan District)」、「単一自治体 (Unitary Authority)」があり、伝統的な行政区域である「パリッシュ (Parish)」は地域によって存在する場合もある。その他に大都市州 (Metropolitan County) と大都市区 (Metropolitan District)、選挙区等があるが行政権限はなく、地理的に区分されることが多い<sup>(26)</sup>。

サフォーク州とウスターシャー州は日本の都道府県・市区町村のような二層制の上位自治体である州 (カウンティ、County Council) であり、それぞれの下位自治体は非大都市区 (ディストリクト、District Council) である。イギリスの首都ロンド

図1 ウスターシャー州とサフォーク州の公文書館の位置<sup>(27)</sup>

ンからサフォーク州・イプスウィッチ (Ipswich) まで電車で1時間強、ウスターシャー州・ウスター (Worcester Fore Gate) まで2時間強かかる(図1参照)。日本の自治体を構成する条件と権限の詳細は異なるが、本稿では今後イングランドと日本における地方公文書館で活用できる外部資金の取り組みを比較検討するために、二層制の上位自治体を研究対象として選定するようになった。

## 2. NLHFに選定されたサフォーク州のThe Holdプロジェクト

サフォーク州 (Suffolk County Council) はイングランドの東南部にある、面積3,801km<sup>2</sup>、人口758,556人の行政州である。州内には5つの非大都市区<sup>(28)</sup>があり、州都はイプスウィッチ (Ipswich<sup>(29)</sup>) である。サフォーク州立公文書館 (Suffolk Record Office, SRO) は州内のイプスウィッチ、ローストフト (Lowestoft<sup>(30)</sup>)、ベリー・セント・エドマンズ (Bury St Edmunds<sup>(31)</sup>) の3か所に公文書館施設<sup>(32)</sup>を持っており、それぞれ保存している資料の種類が異なる。SROには法律に定められている各種公文書<sup>(33)</sup>を含め、900年前に作成さ

れた歴史的な文書からサフォーク州内の自治体で作成された公文書や民間資料などが所蔵されている。SROの代表的な所蔵資料には海事記録、中世からの荘園記録、イングランドでは有名な家門の民間記録などが含まれている<sup>(34)</sup>。

イプスウィッチ公文書館は1992年に元初等学校だった現在の施設に公文書館が移転され、他の施設に比べ書庫空間が大きいとされていた。しかし、移転当ても「向後20年間で収蔵空間が満杯になる」と想定されており、現在すでに保存資料の収容能力が限界を超えている。ローストフトとベリー・セント・エドマンズも状況は変わらず、サフォークは新しい公文書保存空間を確保しなければならなくなった。SROはイプスウィッチに公文書館を新設し、不足した収蔵空間を確保するとともにサフォーク州の大切な記録資料をより安全な場所で保管することを計画するようになった<sup>(35)</sup>。

2014年SROは地元のコンサルタント会社<sup>(36)</sup>に、「200席の講堂、新しい共用の閲覧室、小規模カフェ、ショップ及び展示空間、今後20年間収容可能な文書庫、公共施設に適合した事務空間等」を備えた公文書館施設の開発費用の推算と、その実現可能性調査 (Feasibility Study, FS) を依頼した。その結果、総額約1,700万ポンドの予算が推算された。2015年7月にサフォーク州議会は新公文書館建設のために500万ポンドを出資し、サフォーク大学 (University of Suffolk, UOS<sup>(37)</sup>) が敷地と100万ポンドを投資することに合意した。その後、同年12月にサフォーク州は不足した約1100万ポンドをNLHFの大型プロジェクトに応募するようになった。プロジェクトはNLHFの審査を受け、開発段階 (Development Phase) で53万8千ポンドの開発補助金が交付された。サフォーク州は約2年間で、建物設計のみならず、具体的な公文書館の運営プログラムも開発するようになった<sup>(38)</sup>。

2018年4月に国営宝くじ基金からプロジェクト名「The Hold: 21世紀のためのサフォークアーカ

イブサービス（The Hold: a Suffolk Archive service for the 21st Century）」に最終的に1030万ポンド（そのうち53万8千ポンドの開発補助金が含まれている）の支給が決まった<sup>(39)</sup>。このプロジェクトはイプスウィッチ地域とその歴史的水辺地帯の再生に寄与し、地域社会の教育学習施設としても利用できるよう、UOSとの連携プロジェクトとして計画された。UOSの北部キャンパスの一部がThe Holdの敷地として提供され、書架延長約9マイル<sup>(40)</sup>を超えるSROの所蔵資料ほとんどが新しい公文書館において集中管理されることになった。建設中のThe Holdの3Dモデルと現場の様子は図2と図3のようである。

SROは当時HLFの「500万ポンド以上の応募プログラム」に応募した。このプログラムはNLHFの中で最も大型のプロジェクト向けであり、交付対象は非営利組織及び非営利組織がリードするパートナーシップに限定される。プロジェクトは自然景観を構成する諸要素（Landscape）と自然環境（Nature）の保護、損傷危機のある文化遺産を保護する各種企画であれば応募することができる。審査に通って交付が決まってもプロジェクト費用は5年間までの期間中、2段階に分けて支給される。総額の一部が最初の開発段階で支給され、その間にプロジェクト全体が予定通り終了できるか、NLHF側が要求する様々な事項が誠実に遂行されたかが評価される。交付段階（Delivery Phase）の審査で申請総額の交付が承認されれば、開発補助金を除いた費用総額が志願者に支給されることになる。

なお、このプログラムは志願者が開発・交付段階で発生する費用の1割以上ずつ（partnership funding）を負担することが前提となっている<sup>(42)</sup>。応募する側はプロジェクトチームを構成することからNLHFが要求する資料や情報の提供、自己負担金の納付と他の外部資金の募金などを計画的に準備しなければならない。そのため、各段階にお

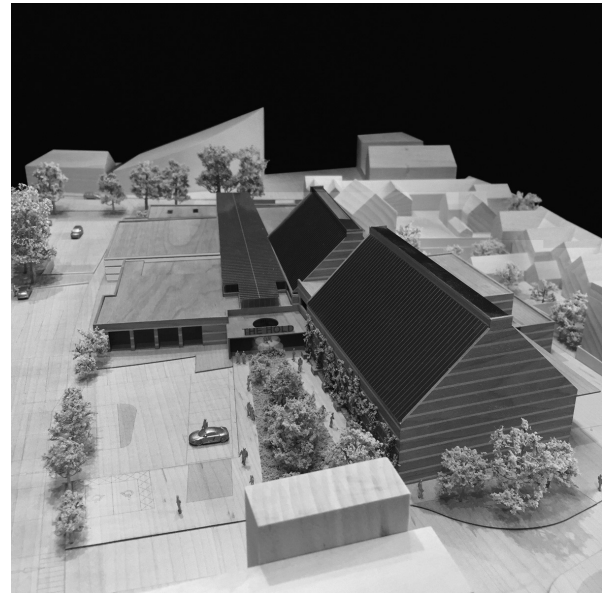


図2 現在建設中のThe Holdの3Dモデル<sup>(41)</sup>



図3 イプスウィッチ・ウォーターフロントに位置するUOSビル（右）と建設中のThe Hold（UOSの左奥）（筆者撮影：2019.08.21）

いて定期的にプロジェクトの内容、進行状況をNLHFの地域事務所側<sup>(43)</sup>に相談・報告し、助言を受ける体制が整っている<sup>(44)</sup>。大型プロジェクトの応募のみならず課題を解決するための努力は応募組織にとっても大きな負担になると考えられる。

さて、The Holdは公文書館と教育及び研究空間を提供する上に、地域社会のための新しい名所として重要な文化資源としても活用できるように計画された。施設には講堂、ティーチングスペース、目的に合わせて使える公共研究施設、芸術作品な

どを保管できる収蔵庫、販売及び展示空間とカフェが含まれる<sup>(45)</sup>。書庫は現在アーカイブズと図書資料等の管理に最も適している文化遺産の保存等に関する標準BS EN 16893<sup>(46)</sup>とアーカイブズと図書館コレクションの管理と保存に関する標準BS 4971<sup>(47)</sup>に準拠して設計された<sup>(48)</sup>。

2018年、The Holdの建設等には約2000万ポンドの費用がかかる見込みとなった。NLHFから受入れた1030万ポンドの基金はこれまでサフォーク州においては最高額の基金であったが、州議会とUOSからの出資以外に不足する資金は外部から調達することになった。

そのため、ウォルフソン財団 (the Wolfson Foundation<sup>(49)</sup>) の補助金8万ポンドが学習空間を作るために受給された。サフォークアーカイブ財団 (Suffolk Archives Foundation<sup>(50)</sup>) も追加募金を行い、ニューアングリア地域企業パートナーシップ (New Anglia Local Enterprise Partnership (LEP)<sup>(51)</sup>) から25万ポンド、海岸地域コミュニティ基金から414,763ポンドの基金が支援された。そのほかにもガーフィールド・ウェストン財団<sup>(52)</sup>、地域財団、文化遺産関係協会と財団、SRO友の会 (Friends of the Suffolk Record Office) と The Hold's John Blatchly Local Studies Libraryに寄付した個人寄付者等により資金が調達された。図4はThe Holdが受け入れている外部資金団体のロゴである。



図4 The Holdプロジェクトの資金提供者のロゴ<sup>(53)</sup>

The Holdは2020年3月開館を目指し、完成に向かっている。2019年末現在、プロジェクトにかかる費用は総額20,667,604ポンドになる見込みである<sup>(54)</sup>。NLHFにおいてもアーカイブズ施設の改築・新築するための大型プロジェクトが選定され

る事例が少ない中、The Holdは公文書館が大学と連携して地域再生と新たな教育・学習空間の提供を企んだ事例として位置づけられると考えられる。

### 3. 大学図書館と連携して新しい公文書館像を提示したウスターシャー州のThe Hiveプロジェクト

ウスターシャー州 (Worcestershire County Council) は、面積1,741km<sup>2</sup>、人口約567,000人の州レベルの地方自治体である。州議会は州の中心部の州都ウスター市 (Worcester City) にある。自治体は2層制で構成されており、1998年に地方政府再編の際にヘリフォードと分離された<sup>(55)</sup>。現在は、州の下位自治体として6つの非大都市区<sup>(56)</sup>が存在する<sup>(57)</sup>。

ウスターシャー州には1947年に州立公文書館 (Worcestershire Record Office, WRO) が設立された。現在のWROは州議会庁舎 (County Hall) に「企業情報管理ユニット<sup>(58)</sup>」及び「出生、結婚及び死亡申告<sup>(59)</sup>」部門があり、「公文書館と考古学サービス (Worcestershire Archive and Archaeology Service。以下、WAASという)」部門は市内の図書館等複合施設のThe Hive<sup>(60)</sup>に分かれている。前者の2部門は12世紀から現在までのウスター地域とその住民の歴史に関する公的記録を管理し、WAASはウスターシャー州で作成、収集された公文書の公的保存庫及び閲覧施設と考古関連資料提供サービスを提供している。

ウスターシャーには数千の考古学的な遺跡地があり、それらの歴史的建造物や自然景観が記録された書架延長12マイル<sup>(61)</sup>に及ぶ原本資料がWAASの管理の下で収集及び保存されている。所蔵資料には現在および過去の行政記録やウスター教区の記録のほかに不動産、家族、学校記録やウスターシャーのグループ、企業とコミュニティの記録、古い地図や写真資料などが含まれている。The Hiveではウスターシャーの人々や空間・情報

等に関するあらゆる形の史資料を包括的に利用することができる。そのほか、地域や先祖探し、人口調査報告書など出版物を閲覧することもできる

<sup>(62)</sup>。

The Hiveが企画された当時、ウスターシャーでは州立図書館や公文書館ともに問題を抱えていた。州立図書館は国際図書館連盟（The International Federation of Library Associations and Institutions, IFLA）が提案する書架延長の1/4程度の空間しか確保できず、建物は歴史的なものであったが劣化が進み、慢性的な空間不足に悩んでいた。またWROは、当時公記録保存所（Record Office）と歴史センター（History Centre）のサービスを一か所で運営できず、書庫も市内の教会と郊外に分散されていた。公記録保存所は市の郊外に位置し、所蔵する一次資料の約2割は3か所の書庫に分散して保管されていた。他方、歴史センターは主に地域と家族の歴史を調べられる二次資料と出版物などが置かれている閲覧施設であった。考古資料はウスター大学（University of Worcester, UOW）のキャンパスの中でサービスされるなど、州の歴史の証となる公文書や図書資料が分散管理されていた。

The Hiveは、そのような状況を打開するために新しい機能の公文書館・図書館施設の新築を検討することになった。イギリス及びヨーロッパでは初めての試みとして、地域学生と住民を対象に地方自治体と地域大学が共同で設立・運営する学術図書館兼歴史センターを作ることになった。結果、The HiveはUOWとウスターシャー州の協定によりウスター市の象徴的な複合施設として建てられるようになった。2004年10月から検討が始まり、UOWとウスターシャー州では学生と住民のための数百万ポンドもかかる図書館・歴史センター及び住民センターの複合施設を設立するためのプロジェクトを立ち上げることに合意した<sup>(63)</sup>。The Hiveには当初UOWの大学図書館、ウスターシャー

州立図書館、WRO・考古学サービス（Worcestershire Historic Environment and Archaeology Service）・住民統合サービスセンター（Worcestershire Hub Customer Service Centre）がパートナーとなって2010年から建築が始まり、2012年7月2日に一般公開、同月11日に公式に開館された。両機関は公的施設を共有することで政府側の投資と資金支援を受けることができた。

The Hiveの建設等にかかわる資金は、主に政府機関の公的資金による。当時の文化、メディアとスポーツ省（Department for Culture, Media and Sport, DCMS<sup>(64)</sup>）によるPFI<sup>(65)</sup> クレジットから4300万ポンド、イングランド高等教育基金委員会（Higher Education Funding Council for England<sup>(66)</sup>）から戦略開発基金<sup>(67)</sup>として1000万ポンド<sup>(68)</sup>、「地域開発公社・アドバンテージウェストミッドランズ（Regional Development Agency - Advantage West Midlands）」から700万ポンドが支援された。地域開発公社（RDA）は、1997年労働党政権の地方分権に関する公約による政策の一環として、1998年Regional Development Agency Actに基づき、1999年地域再生を担うためにイングランドの9地方（Regions）に創設された準政府機関である。RDAは「事業の効率、投資及び競争力促進」「雇用促進」「雇用に関わる技術の開発と適用の向上」そして「持続可能な発展に寄与」することを目的に経済発展と再生を促進させるために設置され、地域経済関連事業に公的資金を実行、配分する役割を担っていた。2010年6月の廃止が発表され、2012年に廃止されたが<sup>(69)</sup>、The Hiveは当時DCMSとRDA等の地域開発政策の支援を大いに受けたと見られる。

上記の資金提供者たちはThe Hiveのビジョンを理解し、州議会と公立大学といった異なる運営主体同士が図書館・歴史センターという合同のサービスを提供することを支援をするようになった<sup>(70)</sup>。The Hiveは新しい図書館と歴史センターの建設及

びサービスを提供し、地域の経済を育成するために、民間業者とPFI契約を結んでいる<sup>(71)</sup>。契約期間中に年間単数支払額は2007年4月基準額により460万ポンドであり、契約終了後の資産は州議会と大学、70:30の比率で分割されることになっている。契約の請負期間は設備の譲渡から25年であるが、延長することも可能である<sup>(72)</sup>。

現在The Hiveには、大学の学術書を含む25万冊の図書、書架延長12マイル分のアーカイブズ資料、歴史的記念物と建物に関する記録を含む26,000点を超える考古資料などが所蔵されている。10,000m<sup>2</sup>の一般開放空間があり、800席の学習空間を備えている。1階と2階は子ども図書館とウスターシャーハブ、地域の作物を中心としたカフェが運営されている。3階はWAAS、4階は州立図書館とウスターシャー大学の図書閲覧室、5階は学習室として運営されている。行政サービスのウスターシャーハブ以外のすべての施設は、国が定めた祝祭日<sup>(73)</sup>を除き、月曜日から日曜日、午前8時から午後10時まで誰でも利用できるように開放されている<sup>(74)</sup>。1階の一般人の立ち入り禁止区域にWAASの書庫が置かれているが、3階(Level 2)の閲覧空間は公文書館エリア(Original Archive Area)と利用者が自由に使えるセルフサービスエリア(Self-Service Area)、歴史的環境記録(Historic Environment Record, HER<sup>(75)</sup>)の検索・閲覧エリアとして区分されている。利用者は開館時間内に自由にWAASを利用することができる。

The Hiveはデザイン及び光、温度調節機能等の持続可能性を配慮した設計で建築学的にも高く評価されており、都市のランドマークとして機能している。より多くの人々が公共図書館のサービスに参加することを奨励するため、都市の中心部に建てられた<sup>(76)</sup>。The Hiveは子どもから成人までの図書館サービス、文化遺産と考古学等の学術研究を含む歴史資料センター、州の行政サービスの

窓口として、地域に関わるあらゆる情報を総合的に利用できる施設として位置づけられると考えられる。図5はThe Hiveの入り口からみた前景であり、図6はThe Hiveの運営主体がウスターシャー州とUOSであることを示している様子である。



図5 The Hiveの入り口からの全景  
(撮影: 2019.08.20)



図6 UOWとウスターシャー州とのパートナーシップを明記した入り口の様子  
(撮影: 2019.08.20)

#### 4. The Hold と The Hive からみた大型外部資金の特徴

本章では、サフォーク州とウスターシャー州における新しい公文書館の試みから外部資金利用の共通点と特徴をまとめる。

第一に、The Hold と The Hive は親組織の予算のみでは充当することができない莫大な建設費用を確保するために外部資金制度を有効に利用した。公文書館施設を最低限の費用で改修する自治体も存在するイギリスにおいても地方公文書館関係の予算は削減されていく傾向があり、近年もその状況は変わっていない<sup>(77)</sup>。イギリスにおいては選挙結果によって政策の変化が多く、地方自治体の中でも行政組織の改編が頻繁に行われる。公文書館の施設改修・新築事業は比較的安定的な資金の確保が求められるため、親組織と外部資金を適切に組み合わせた契約を結ぶことで新公文書館建設といった目的を達成することができたのではないだろうか。

ただし、プロジェクトの規模や応募書類等の作成・準備にかかる時間と努力が無駄になることも少なくなく、さらにNLHFのような大型のプロジェクトは準備期間と審査期間、進行状況の報告と相談などにかかる負担が大きく、開発段階での準備不足などにより申請総額の交付が認められない結果になった場合のリスクも少ない。また、プロジェクトの完成段階まで順調にプロジェクトを進行させるプロジェクト・マネージャーとスタッフを探すことも難しいとされているため、大型外部資金の獲得には十分な計画性が必要とされる。

第二に、The Hold と The Hive は両方とも地域の公文書と各種歴史的資料を一カ所で保存し、利用者がアクセスしやすくするために単一目的の施設ではなく、多目的の複合施設を作り上げる必要があった。前者は主に各種イベントができる講堂と大学の授業等ができる教室を備えた上でコミュニティにオープンな施設を、後者は子ども図書館

も充実しつつ、大学レベルの学術的利用まで提供できる地方公文書館、さらに地域情報のハブとして機能する施設を目指した。これらの資金提供の審査は地域の連携性と発展可能性が最も高く評価され、プロジェクト完了後の施設の運営、維持管理、新しい雇用体系の考案、地域活性化への寄与なども含まれている。これはNLHFや当時のRDAが目指した地域発展に貢献できる公的施設の建設条件にも合致しているとみられる。

また地域の再生と住民の参加を考慮した新たな公文書館像を提示することも注目すべき点であろう。建物の建築的価値を高め、維持管理の費用と環境にやさしい設計なども工夫され、公文書館が地域の歴史情報センターとしてより広く認識されていく可能性を狙いにしていると考えられる。

第三に、The Hold と The Hive は自治体と大学の連携による地域社会の教育・学習施設とコミュニティ活動の場所を提供することで、地域に開かれたアーカイブズ機関を目指している。これまで博物館や図書館に比べて一般の人々になじみの少ない施設であった公文書館が、学生の教育学習や住民コミュニティ活動の場所を提供することができ、従来より利用しやすい施設として位置づけられている。The Holdの場合、UOSのキャンパスの一部を敷地として提供してもらい、UOSからも一定金額を出資してもらった。そのパートナーシップにより、The Holdの中にはUOSの学生を教えられる教室も設計されており、学生は講堂や公共スペースを利用することもできる。また、The Holdの北側にはUOSの図書館と学生施設などがあり、地域研究のための公文書の活用性を高めることもできる。

The Hiveの場合、地域大学とより強力なパートナーシップを持っており、大学の学術図書館でありながらウスターシャー州の全世代に開かれた図書館を目指している。そして公文書館と考古資料が一カ所で利用できることで地域研究のハブとし

て利用されている。また、図書の閲覧室の他、学習のための閲覧室も充実しており、大学生の研究と学習、地域の住民にも寄与することができる。子どもの図書館としても優秀な評価を受けており、地域の名所として注目を浴びている。

一方、2007年から2012年までイングランドとウェールズにおけるアーカイブズ機関の収入（年間予算）調査では、収入の82%が親組織からの予算配分によると応答されており、残り18%の中に自らの売上（5%）、様々な公私の基金や民間からの寄付（3%）の存在が確認できた。外部資金の中では旧HLFの割合が1%に過ぎないと応答されており、NLHFの基金はごく一部の公文書館・アーカイブズ機関にしか影響を与えていないとも考えることができる<sup>(78)</sup>。それでも小型のアーカイブズ資料整理作業から大型の建設事業までを支援し、一部の州立公文書館によっては地域社会の中に新たな公文書館の役割と利用可能性を示すきっかけとして外部資金は制度が有効に活用されていると考えられる。

## おわりに

本稿は公文書館の新館建設のために公的資金制度を活用した二つのイギリス州立公文書館の事例を取り上げ、外部資金が調達された経緯とその目的を概観し、州立公文書館が地域の中心機関として位置づけられる意義について考察した。具体的にはNLHF基金を調達して新公文書館を建設しているサフォーク州のThe Holdと、主に地域開発のための公的資金を調達して地域情報のハブの中に公文書館を位置づけたウスターシャー州のThe Hiveを紹介した。

両者の実績からイギリスにおいてアーカイブズ機関を支援する大型の外部資金はアーカイブズそのものだけを対象にするものではなく、コミュニティやそのアーカイブズが属している地域社会の発展を図る努力から始まることが分かった。アー

カイブズ機関が従来の「研究」目的のみならず、地域を知るための学習センター、コミュニティを活性化するためのイベントの会場として全世代を対象とする施設として位置づけようとしている点に興味深い。

ただし、これらの新公文書館計画が常に地域社会の中で歓迎されるわけではない。例えば、The Holdはこれまで3か所で運営されていた公文書館の統合に否定的な住民の意見もみられる。それぞれの地域のアーカイブズ資料はその地域で大切に保存、利用できるように予算を配分し、整備していくべきだといった意見である<sup>(79)</sup>。サフォーク州議会はローストフト公文書館の資料に関する意見聴取を行い、重要な公文書等をThe Holdに移管した後でも、地域の図書館で二次資料のマイクロフィルム、複製物や出版物が閲覧できるように体制を整備していくように住民の意見を調整することもある<sup>(80)</sup>。

さて、本稿で取り上げた事例の他にもイギリスにおいてアーカイブズ機関が受け入れられる外部資金にはNLHFのほかにトラストや財団などからの寄付により維持される公的資金も存在する。例えば、2006年に始まった国家目録化補助金制度（The National Cataloguing Grants Scheme<sup>(81)</sup>）はPilgrim Trustによって支援されている<sup>(82)</sup>。実際多くの公文書館、アーカイブズ機関が支援を受けている民間助成基金についても十分に紹介できなかった。アーカイブズ施設の補修や資料のデジタル化、利用促進のための事業を支援する民間の助成機関としてはウェルカム・トラスト（Wellcome Trust）などの民間基金も有名である。アーカイブズ機関等においてこれらの資金制度が与える影響や活用されるプロセスを解明することは今後の課題にしたい。

※本稿の執筆に際しては、科学研究費助成基金（若手研究）「地方公文書館を取り巻く基金助成と財

源確保に関する研究 (研究課題番号: 18K18332) の助成を受けた。また現地調査にあたっては、The Hold のプロジェクト・マネージャー、Amy Rushton 氏 と The Hive の Archive Manager and Diocesan Archivist、Dr. Adrian Gregson 氏にたいへんお世話になりました。記して感謝申し上げます。

## 注

- (1) 本稿では「公文書館法 (1987 制定)」、「公文書等の管理に関する法律 (2009 制定)」で定める公文書館等の定義に基づき、国公立の行政機関、地方自治体、独立行政法人等が設置するアーカイブズ機関・施設を公文書館と表記する。
- (2) 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会調査・研究委員会編. 公文書館機能ガイドブック. 2015 参照。  
[http://www.jsai.jp/kanko/guidebook/guidebook\\_all.pdf](http://www.jsai.jp/kanko/guidebook/guidebook_all.pdf) (2019-11-30 参照)
- (3) <https://www.heritagefund.org.uk/> (Accessed, 2020-01-05)
- (4) 「Heritage」は「遺産」と訳されるが、財産的な遺産と区分するために本稿では文化遺産と訳す。
- (5) イギリスにおいて地方自治体が設置・運営する公文書館、あるいは地方自治体等が作成した公文書を保存・公開する施設 (例えば「Record Office」、「Archives」他) を公文書館ということがある。
- (6) <https://www.heritagefund.org.uk/our-work/museums-libraries-and-archives/> (Accessed, 2020-01-05)
- (7) アメリカの State が州と訳されることは周知のことであるが、イギリスの County は州、県、郡、カウンティなど訳語が固定されていないのが現状である。出版されている主要辞典類を参照した限り、行政単位としての「州」は「(米) State」「(英) County」と訳されることがほとんどである (『リーダーズ英和辞典第 3 版 (2012, 2016)』; 『新英和大辞典第六版 (2002, 2017)』; 『ジーニアス英和大辞典 (2001-2017)』; 『ウィズダム英和辞典大 3 版 (2013)』; 『ジーニアス英和辞典第 5 版 (2014-2017)』参照)。両者の行政単位と行政機関として自治の権限には相違があるが、アメリカの行政下位自治行政単位に County が存在し、その場合は「郡」と訳されることが多いため、本稿ではイギリスの地方行政単位「County」「County Council」を州と訳すことにする。
- (8) 本稿ではアメリカの「State」「State Government」を「州」「州政府」と訳すことにする。
- (9) 拙稿「アメリカ州立公文書館における NHPRC 基金の活用」(『京都大学大学文書館研究紀要』第 17 号、2019 年、p.67-82.) を参照。
- (10) National Lottery etc. Act 1993 <http://www.legislation.gov.uk/ukpga/1993/39/contents/> (Accessed, 2020-01-05)
- (11) 「good cause」の訳語は『文部科学省平成 24 年度委託調査スポーツ庁の在り方に関する調査研究 WIP ジャパン株式会社 2013 年 3 月』「第 3 章 イギリス」を参照。[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/chousa/detail/1333391.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/chousa/detail/1333391.htm) (2019-11-30 参照)
- (12) <https://www.heritagefund.org.uk/about/what-we-do/> (Accessed, 2020-01-05)
- (13) 布施美穂 (1997) 「イギリスにおける宝くじ助成金による博物館支援——その限界と問題点をめぐって——」博物館学雑誌、第 23 巻第 1 号 (通巻 27 号) p.37-50 ; 竹内有理 (2002) 「新しい財源が博物館を変える——イギリスの国営宝くじと科学館」全科協ニュース、Vol.32. No.1、p.1-3 ; 石川宏之 (2006) 「英国の科学館による都市再生と地域振興——レスター市のナショナル・スペース・センターを事例として——」博物館学雑誌、32 (1)、p. 1-11.
- (14) 坂井文 (2008) 「英国の国営宝くじ基金に見る公園の整備及び再整備に関する財源確保の手法」ランドスケープ研究、Vol.71 No.5、p.723-726 ; 安齊真吾 (2012) 「英国の都市再生における象徴的建築プロジェクトに関する研究」日本建築学会計画系論文集、Vol.77 No.672、p.377-383. ; 芮京祿、木下剛 (2014) 「国土のエリアマネジメントを可能にする英国のランドスケープ・パートナーシップ・

- プログラム」都市計画論文集、Vol.49 No.3、p.957-962.
- (15) 岡村祐 (2011a) 『英国国営宝くじ基金による歴史的町並み保全事業に関する研究-観光まちづくりの視点からの分析-』都市のしくみとくらし研究所調査研究報告書；岡村祐 (2011b) 「英国における歴史まちづくり事業タウンスケープ・ヘリテイジ・イニシアチブの制度的特徴と運用実態」、都市計画論文集、No.46-3、p.187-192；岡村祐 (2011c) 『我が国における歴史まちづくりを目的としたまちづくりファンドの到達点と課題-萌芽期の日本と成熟期の英国の事例研究を通じて-』平成23年度国土政策関係研究支援事業研究成果報告書。
- (16) 杉浦幹男 (2003) 「3. 国家政策としての“文化政策”～英国とフランスの文化支援と財源～」『Arts Policy & Management』No.19、p.53-69
- (17) 文部科学省『諸外国および国内におけるスポーツ振興施策等に関する調査研究（平成22年度）』；『ガバナンスに関する調査研究（平成23年度）』；『スポーツ庁の在り方に関する調査研究事業（平成24年度）』；『海外のスポーツ基本計画に関する調査研究（平成25年度）』；『スポーツ庁の在り方に関する調査研究事業（平成25年度）』；『スポーツ庁の在り方に関する調査研究事業（平成26年度）』などがあり、イギリス編を参考することができる。文部科学省調査研究報告書は以下を参照。文部科学省トップ>スポーツ>スポーツの振興>スポーツ政策に関する調査研究[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/chousa/1309347.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/chousa/1309347.htm) (2019-11-30 参照)
- (18) 2019年12月現在。
- (19) [https://www.heritagefund.org.uk/our-work-hub?utm\\_expId=.Zs6FTrejQMyTtgMiLO5yHA.1&utm\\_referrer=https%3A%2F%2Fwww.heritagefund.org.uk%2Four-work-hub/](https://www.heritagefund.org.uk/our-work-hub?utm_expId=.Zs6FTrejQMyTtgMiLO5yHA.1&utm_referrer=https%3A%2F%2Fwww.heritagefund.org.uk%2Four-work-hub/) (Accessed, 2020-01-05)
- (20) 前掲注6)
- (21) <https://www.heritagefund.org.uk/funding>
- (22) Cox, R. J. *Managing Institutional Archives: Foundational Principles and Practices*. New York: Greenwood Press, 1992, p.172.
- (23) Joffrion, Elizabeth. Fernández, Natalia. Collaborations between Tribal and Nontribal Organizations: Suggested Best Practices for Sharing Expertise, Cultural Resources, and Knowledge. *The American Archivist*. Spring/Summer 2015, Vol. 78, No. 1, p. 192-237.
- (24) Ray, Louise. Shepherd, Elizabeth. Flinn, Andrew. Ander, Erica. Laperdrix, Marie. Funding archive services in England and Wales: institutional realities and professional perceptions. *Archives and Records*. The Journal of the Archives and Records Association. Volume 34, 2013 - Issue 2. p. 175-199.
- (25) (地理的・機能的・社会的・文化的特徴による) 地方。イングランド内ではYorkshire and the Humber, West Midlands, South West, South East, North West, North East, London, East of England, East Midlandsに区分される。
- (26) <https://www.ons.gov.uk/methodology/geography/ukgeographies/administrativegeography/england#regions-former-gors>
- (27) 地図はGoogle Mapをキャプチャし、本人が加工したものである (2020-01-05)。
- (28) 1974年4月に「地方政府法1972 (Local Government Act 1972)」により、イーストサフォーク、ウェストサフォーク及びイプスウィッチが合併した。サフォーク州はイプスウィッチ、サフォーク・コースタル、ウェバニー、ミッド・サフォーク、バーバーク、ベリー・セント・エドマンズ、フォレスト・ヒースの7つの地区 (district) から再編された。2018年にイプスウィッチ、イーストサフォーク (サフォーク・コースタルとウェバニーが合併)、ミッド・サフォーク、バーバーク、ウェストサフォーク (ベリー・セント・エドマンズとフォレスト・ヒースが合併) した5つの地区で再編された。詳しくは、The West Suffolk (Local Government Changes) Order 2018 (<http://www.legislation.gov.uk/uksi/2018/639/contents/made/>) (Accessed, 2020-01-05) と The East Suffolk

- (Local Government Changes) Order 2018 (<http://www.legislation.gov.uk/ukxi/2018/640/contents/made/>) (Accessed, 2020-01-05)) を参照。
- (29) Ipswich Borough Council
- (30) East Suffolk Council
- (31) West Suffolk Council
- (32) Record Office Branch。イプスウィッチは旧イストサフォーク州の、ベリー・セント・エドマンズには旧ウェストサフォーク州の、ローストフトにはウェバニーをカバーする地域の公文書等が所蔵されている。
- (33) イギリスに州立公文書館の設立根拠となる直接的法律や条例は存在しないが、州立公文書館等では以下の法令等によって定まった公文書等を保存及び公開し、運営の根拠としている。
- 地方政府 (記録) 法 1962 (Local Government (Records) Act 1962)
- 地方政府法 1972 (Local Government Act 1972)
- 公記録法 (Public Records Act 1958, as amended 1967)
- 地方政府 (情報利用) 法 1985 (The Local Government (Access to Information) Act 1985)
- 情報公開法 2000 (Freedom of Information Act 2000)
- データ保護法 1998 (Data Protection Act 1998)
- 什分の一税 (Tithe Document Rules 1960 and 1963)
- 教区記録規則 (Parochial Registers and Records Measure 1978, amended 1992)
- 環境的情報規則 (Environmental Information Regulations 2004)
- 荘園記録規則 1959 及び同規則 1967 (Manorial Document Rules 1959 and 1967)
- (34) <https://www.heritagefund.org.uk/news/suffolks-beacon-discovery-attracts-national-lottery-support> を参照。 (Accessed, 2020-01-05)
- (35) [https://www.suffolkarchives.co.uk/the\\_hold/background](https://www.suffolkarchives.co.uk/the_hold/background) (Accessed, 2020-01-05)
- (36) Concert 社。 <https://www.concertus.co.uk/projects/the-hold-ipswich/> (Accessed, 2020-01-05)
- (37) 当時の校名は University Campus Suffolk
- (38) 前掲注) 35
- (39) <https://www.suffolkarchives.co.uk/about-suffolk-archives/> (Accessed, 2020-01-05)
- (40) 約14.5キロメートル
- (41) <http://www.prsarchitects.com/projects/current-projects-arts-civic-education/hold-suffolk-county-archive/> (Accessed, 2020-01-05)
- (42) ただし、その負担額は非現金でなくても納付でき、ボランティアの時間給でも計上することができる。例えば、専門的ボランティア (会計・教育) : 1 時間 50 ポンド、技術的なボランティア (徒歩ガイド等) : 1 時間 20 ポンド、ボランティア (清掃、イベントの手伝いなど) : 1 時間 10 ポンドと算定することができる。
- (43) 各事務所はイギリス内の圏域別に運営されており、その支部は現在以下の地域で運営されている。London & South (London, South East, South West: Exeter)、Midlands & East (East Midlands: Nottingham, East of England: Cambridge, West Midlands: Birmingham)、North (North East: Newcastle Upon Tyne, North West: Manchester, Yorkshire and Humber: Leeds)、Northern Ireland (Belfast)、Scotland (Edinburgh)、Wales (Cardiff)
- (44) Application guidance: £250,000- £5million [https://www.heritagefund.org.uk/sites/default/files/media/attachments/HF%20Application%20Guidance\\_C\\_LARGE\\_v2.pdf/](https://www.heritagefund.org.uk/sites/default/files/media/attachments/HF%20Application%20Guidance_C_LARGE_v2.pdf/) (Accessed, 2020-01-05)
- (45) <https://atomconsultants.co.uk/the-hold-suffolk-archives-heritage-center-ipswich/> (Accessed, 2020-01-05)
- (46) BS EN 16893:2018 (Conservation of Cultural Heritage. Specifications for location, construction and modification of buildings or rooms intended for the storage or use of heritage collections)
- (47) BS 4971:2017 (Conservation and care of archive and library collections)
- (48) <http://www.prsarchitects.com/projects/current->

- projects-arts-civic-education/hold-suffolk-county-archive/ (Accessed, 2020-01-05)
- (49) ウォルフソン財団 (<https://www.wolfson.org.uk/about/>) は博物館、美術館、歴史的は建物と自然景観等を含め、化学、健康、教育及び教育と人文分野における優秀性を支援・促進するための補助金を授与する独立的な慈善団体である。 [https://www.suffolkarchives.co.uk/the\\_hold/news/hold-receives-planning-permission/](https://www.suffolkarchives.co.uk/the_hold/news/hold-receives-planning-permission/) (Accessed, 2020-01-05)
- (50) <https://www.suffolkarchivesfoundation.org.uk/> (Accessed, 2020-01-05)
- (51) <https://newanglia.co.uk/> (Accessed, 2020-01-05)
- (52) <https://garfieldweston.org/> (Accessed, 2020-01-05)
- (53) Logos-for-Hold-home-page-1-1024x270.jpg  
[https://www.suffolkarchives.co.uk/the\\_hold/](https://www.suffolkarchives.co.uk/the_hold/) (Accessed, 2020-01-05)
- (54) The Hold プロジェクト・マネージャーの Amy Rushton 氏から以下の雑誌を紹介された。本稿ではこの記事と SRO のウェブサイトを中心に参照している。Grant, Sheena. “SHARING SUFFOLK'S STORIES”. Suffolk: June 2019: 32-35. Print <<https://www.suffolkmag.co.uk/out-about/places/the-hold-heritage-project-in-ipswich-1-6087256>> . / (Accessed, 2020-01-05)
- (55) Local Government Act 1992 <http://www.legislation.gov.uk/ukpga/1992/19/contents/> (Accessed, 2020-01-05) ; <https://publications.parliament.uk/pa/cm199495/cmhansrd/1995-03-21/Writtens-2.html> (Accessed, 2020-01-05)
- (56) Bromsgrove District, Malvern Hills District, Redditch Borough, Worcester City, Wychavon District, Wyre Forest District.
- (57) <https://www.in-tendhost.co.uk/worcestershire.aspx/ViewDocument.aspx?dt=3&id=141/> (Accessed, 2020-01-05)
- (58) The Corporate Information Management Unit
- (59) Birth, Marriages & Death Registrar
- (60) The Hive という名は目的のある活動及び開発に役立つ共同体の意識を表現するために選択された。建物の外観は黄金色のハニカムの屋根になっており、ウスターの新名所としての狙いを込めている。  
<http://www.thehiveworcester.org/creating-the-hive.html/> (Accessed, 2020-01-05)
- (61) 約19.3キロメートル
- (62) [http://www.worcestershire.gov.uk/downloads/file/4555/about\\_us/](http://www.worcestershire.gov.uk/downloads/file/4555/about_us/) (Accessed, 2020-01-05)
- (63) 前掲注) 60
- (64) 現在の Department for Digital, Culture, Media and Sport の前身
- (65) PFI (Private Finance Initiative : プライベート・ファイナンス・イニシアティブ)とは、公共施設等の建設、維持管理、運営等を民間の資金、経営能力及び技術的能力を活用して行う新しい手法。  
[https://www8.cao.go.jp/pfi/pfi\\_jouhou/aboutpfi/aboutpfi\\_index.html](https://www8.cao.go.jp/pfi/pfi_jouhou/aboutpfi/aboutpfi_index.html) (2019-11-30 参照)
- (66) 現在は、UK Research and Innovation と Office for Students に分離された。<https://www.gov.uk/government/organisations/higher-education-funding-council-for-england> (Accessed, 2020-01-05)
- (67) Strategic Development Fund
- (68) 500 万ポンドは助成金、500 万ポンドは無利子貸付
- (69) Closing the RDAs: lessons from the RDA transition and closure programme. を参照 <[https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment\\_data/file/34749/12-986-closing-rdas-lessons-from-transition-and-closure-programme.pdf](https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/34749/12-986-closing-rdas-lessons-from-transition-and-closure-programme.pdf)> (Accessed, 2020-01-05)。RDA を巡るイギリスの地方の役割分担政策については、以下を参照した。砂原庸介「第6章 イギリスにおける国と地方の役割分担」(『主要諸外国における国と地方の財政役割の状況』報告書』平成18年12月26日) <https://www.mof.go.jp/pri/research/conference/zk079.htm> (2019-11-30 参照) ; 馬場健. イギリスの Region レベル

- における基礎自治体等を構成団体とする連合体と中央政府開発公社との関係に関する調査報告. 2010年03月15日. p.1-16.; (財) 自治体国際協会『英国の地域再生政策』(クレアレポート No.253、2004) [http://www.clair.or.jp/j/forum/series/pdf/h21\\_02.pdf](http://www.clair.or.jp/j/forum/series/pdf/h21_02.pdf) (2019-11- 30 参照)
- (70) 前掲注) 60
- (71) Galliford Try Investments Ltd (現在 DiF Infra 3 UK Limited)
- (72) [http://www.worcestershire.gov.uk/download/downloads/id/11356/financial\\_accounts\\_20182019.pdf/](http://www.worcestershire.gov.uk/download/downloads/id/11356/financial_accounts_20182019.pdf/) (Accessed, 2020-01-05)
- (73) Bank Holidays
- (74) <http://www.thehiveworcester.org/documents/the-hive-level-by-level.pdf> (accessed : 2020/01/04)
- (75) HERは考古学及び歴史的建造環境等について地理的・総合的情報を提供するサービス。<https://historicengland.org.uk/advice/technical-advice/information-management/hers/> (Accessed, 2020-01-05)
- (76) Hannaford, Anne. Fairman, Roger (2011) The Hive: a New University / Public Library and History Centre, Worcester UK. In: Connection and Convergence: Second International Conference on Joint Use Libraries, 3rd - 4th November, 2011, Adelaide, South Australia. <https://eprints.worc.ac.uk/1532/> を参照。(Accessed, 2020-01-05)
- (77) 拙稿「イギリスの地方公文書館制度の発展」(『レコード・マネジメント: 記録管理学会誌』68、2015年、p. 99-109) を参照。
- (78) Rays, p.183-185. 1%といった数値はHLFからの受け入れた基金の総額ではなく、毎年の支給額に準じる可能性もあり、一律的には考えられないが、民間からの助成・寄付よりは少なめに集計されたとしている。
- (79) <https://www.suffolk.gov.uk/council-and-democracy/budget-council-tax-and-finance/the-budget-for-suffolk/> を参照。(Accessed, 2020-01-05)
- (80) <https://www.suffolk.gov.uk/council-and-democracy/consultations-petitions-and-elections/consultations/lowestoft-record-office-consultation/> (Accessed, 2020-01-05)
- (81) 4万ポンドまでアーカイブズ資料の目録整理のために受給できるイギリス国立公文書館(The National Archives, TNA) 基金の一種。<https://www.nationalarchives.gov.uk/archives-sector/funding-funding/archives-revealed/cataloguing-grants/> (Accessed, 2020-01-05)
- (82) Rays, p.191



## 京都帝国大学における図書疎開 —附属図書館所蔵貴重和漢書の事例を中心に—

川口朋子 †

### はじめに

1937年に公布された防空法により、兵士以外の民間人にも空襲から都市を守る防空が国民の義務として課された。防空壕を掘ったり灯火管制を敷くなど銃後の国民が従事した防空は、軍防空と区別して民防空と称された。図書館の防空も民防空であった。敵機に見つかりにくいよう図書館の壁に迷彩を施す、貴重図書を所蔵する部屋をコンクリートで防護する、ガラスや火炎が館内に飛散するのを避けるため窓の外に砂嚢を積み上げる方法などが主流であった。これらは図書館という建築物を防護することで、所蔵する貴重な図書類を守ることを目的とする。それに比べ、蔵書を他所へ疎開させる方法は事業規模が大きく実施は容易ではなかった。

図書疎開に関しては図書館界での組織的、統一的動きは見られず、散発的で計画倒れに終わった事例も少なくないためか、資料による実証研究はほとんど見られない。一部の公共図書館において、戦前の図書館界が戦時下の思想統制を強め国民の言論・出版の自由統制に拍車をかけた事実への反省とともに、図書疎開事業の検証や記録化が行われているに過ぎない<sup>(1)</sup>。

高等教育機関として大量の蔵書を抱える帝国大学においても、どのようにして図書を疎開させたのか実態は不明な部分が多い。戦前期における高

等教育機関のうち、本格的な総合大学として附属図書館を有していた東京帝国大学と京都帝国大学に限れば、大規模な図書疎開を実施した事実は両大学の通史から明らかである<sup>(2)</sup>。しかし、通史ではその事実が記述されるにとどまり、一次資料を用いた研究は管見の限り見当たらない<sup>(3)</sup>。

2019年、図書疎開に関する資料を学内で調査した結果、附属図書館において未整理の資料二点を確認することができた。『本館所蔵貴重和漢図書疎開点検目録附点検控』、『本館所蔵貴重和漢図書疎開荷造目録』と題するこれらの資料は、1944年に作成された疎開図書の目録である。書名に加えて資料を作成した背景も詳細に記されており、京都帝国大学の図書疎開を明らかにする手掛かりとなると考えられる。本稿の目的は、戦争末期に京都帝国大学で行われた図書の疎開<sup>(4)</sup>について、今回確認できた一次資料を用いて可能な限り実証することである。東京帝国大学では、当時の附属図書館職員による記録や証言が残されており<sup>(5)</sup>、これらも援用しながら京都帝国大学の図書疎開について明らかにしてみたい。

### 1. 防空における図書疎開の位置付けと実施

#### 1-1 公立図書館および官公庁

わが国で防空を目的とした疎開が本格的に展開する契機の一つは、1943年12月23日、東條内閣

† 京都大学大学文書館助教

で閣議決定された都市疎開実施要綱である。その前日の12月22日、文部省より全国の公共図書館に図書疎開の指示がなされた。

当日、文部省主催の「都道府県中央図書館長並図書館事務担当会議」が文部省第一会議室で開催された。通常の中央図書館長会議は、読書会や優先配給など戦時下の図書館が果たすべき責務に対して文部省側の訓示や指示が伝えられる場である。今回の会議では、国策として貴重図書の疎開を行うよう教学局文化課長よりはじめて指示があった<sup>(6)</sup>。ただし行政処分という位置付けで法的強制力はなく指導や推奨に留まったため、実際に行われた時期や規模は図書館によって異なる。「図書の疎開などは不急の計画としてきわめて冷淡に扱われていた時代<sup>(7)</sup>」であり、「労力・資材・運送・経費・疎開先での管理問題等々、どちらを向いても隘路又隘路の連続<sup>(8)</sup>」であると関係者には認識されていた。実施が困難であるため、図書疎開を行った公共図書館のほとんどは、防空体制の崩壊が国民の目にも明らかになった1945年3月の大都市空襲以後に着手している<sup>(9)</sup>。

文部省の指示を待たずに図書疎開を実施した例もある。着手時期が最も早いのは官公庁である。宮内省図書寮（現在の書陵部）は、対米開戦前の1941年9月から図書を含む貴重文化財の疎開を計画していた<sup>(10)</sup>。同年12月には疎開図書類と公文書類の点検および梱包作業を進め、1942年5月下旬から6月はじめにかけて武蔵陵墓地（東京都）の一部に建設した倉庫へ木炭トラックで搬出した。このとき疎開させた図書、公文書類は172,455点に及ぶ。疎開先には出納掛や整理掛が出勤し、閲覧や整理業務を行った<sup>(11)</sup>。その後も那須御用邸（栃木県）、軽井沢（長野県）、常照皇寺（京都府）など複数の場所へ疎開を実施した。

帝国図書館の場合、図書疎開を計画し始めたのは1943年10月であった。空襲が少ないと予想される山岳地帯と堅牢なコンクリート建築物がある

場所という条件で疎開先を探し、長野県立図書館に決定した。1943年11月から1944年8月まで3回にわたり、約13万3400冊の図書を疎開している<sup>(12)</sup>。

外務省は1944年1月から、帝国図書館や当時目白にあった蓬左文庫を訪ねるなど図書疎開の方法について調査を開始し、3月から大倉精神文化研究所（神奈川県）へ疎開を行った<sup>(13)</sup>。

## 1-2 東京帝国大学における実施状況

東京帝国大学の場合、1943年10月12日の「官庁ノ第一次地方疎開実施ニ関スル件」（閣議決定）に従い、法・文・経済の三学部と東洋文化研究所を疎開することに決定した。移転先となる施設を探した結果、大学と千葉県及び千葉市との交渉が実り千葉市立商業学校に決定し、11月下旬には文部省の了解を得た。三学部と研究所の蔵書に関しては、法文学部の貴重図書の一部は1944年3月7日と9月30日に成田図書館へ運び込んだことが確認できる<sup>(14)</sup>。7月に入ると、当時野田町にあった私立図書館、興風会図書館（現在の野田市立図書館）へ法学部図書館の蔵書を疎開し始めた<sup>(15)</sup>。講義室等の本格的な疎開は10月1日から開始する予定であったが、予定された10月1日が来ると東京帝大は疎開が実行不能に陥ったと判断し、文部省に計画の中止を上申した。千葉への大学移転計画は、結果的に一部の貴重書を疎開させるにとどまったと言える。

他方、理学部、文学部、史料編纂所の貴重図書類の一部は1943年末に附属図書館へ既に預けられていた。附属図書館では1944年3月に入ると本館の蔵書とともにこれらの図書の疎開先を探す準備を始め<sup>(16)</sup>、3月末には司書二名が成田図書館を訪れて書庫の見学や調査を行った<sup>(17)</sup>。最終的には「土蔵作りノ旧書庫ガ極メテ堅牢ニシテ環境亦好都合ナルヲ認メタルヲ以テ<sup>(18)</sup>」旧青洲文庫（山梨県市川大門町）を借用することに決定した。目

録の作成、荷造り用の木箱の確保、箱詰め、点検などに半年をかけ、同年8月10日から14日にかけて貨車に載せて蔵書を旧青洲文庫へ運び入れた。1945年6月には同文庫へ追加疎開も行っている<sup>(19)</sup>。

史料編纂所の場合は1944年1月に蔵書の疎開を所内で決定していたが、大学が疎開を一時見合わせる方針をとったため、同年3月から疎開先の選定を開始した。調査の結果、重要図書類は次の三か所へ疎開することが決定した。一か所目は都内の静嘉堂文庫（東京都世田谷区）、二か所目は同大学附属図書館が計画した旧青洲文庫への疎開に一部委託、三か所目は長野県上田市立上田図書館であった。各所へは同年8月に図書を搬送している。静嘉堂文庫では、その後同年12月と翌年2月の二回に一部入れ替えをし、同年3月に追加疎開を行った<sup>(20)</sup>。3月10日の東京大空襲後は、東京で編纂事業を継続するのは到底不可能と判断し、地方に疎開して業務を続行するよう所の方針を変更した。長野県上田市と伊那郡伊賀良村にそれぞれ上田文庫、伊奈文庫を開設し、図書を疎開すると同時に図書管理を行う職員を派遣した<sup>(21)</sup>。疎開させたものは図書だけでなく図書の利用環境にまで及んだことが伺える。

以上見てきたように、東京帝国大学の場合、蔵書の疎開について大学全体の一致した行動はみられなかったと言える<sup>(22)</sup>。部局で独自に疎開を計画し、追加疎開も度々実施していた。

## 2. 京都帝国大学附属図書館における図書疎開

### 2-1 図書館商議会での方針

1908年に京都帝国大学図書館商議会が設置されてから、附属図書館の運営に関する案件はここで審議されてきた<sup>(23)</sup>。1944年以降実施された図書疎開も図書館商議会の決議を経ているが、図書館商議会の当時の議事録は管見の限り存在しない。『京都大学附属図書館六十年史』によると、同年4月

17日に開かれた図書館商議会で「文献疎開の件」が審議された際、疎開場所は大覚寺（右京区）と岩倉公旧跡保存会（左京区、現在の国指定史跡岩倉具視幽棲旧宅）が候補に挙がった。将来的に第2次図書疎開の実施も予定しており、随心院（現在の山科区）、上賀茂演習林附属建物（左京区）、桑田郡保津村（現在の亀岡市保津町）にある個人所有の土蔵、阿武山地震観測所（大阪府高槻市）も候補地に挙げられている<sup>(24)</sup>。

図書館商議会の決議を受けて、すぐに具体的な準備が始まった。まずは、候補地の実地調査である。図書館職員は候補地を実際に訪れ、図書を疎開させるのに適切な場所かどうか検討を重ねている。調査を開始した段階では自前で場所を用意することも想定しており、大学の近郊や近隣都市にあった附置研究所も調査対象となった。そのため、調査範囲は京都市内では洛北（岩倉鞍馬方面、八瀬大原方面、上賀茂・西賀茂方面）、洛西（嵯峨方面）、洛東（山科方面）、京都府内では亀岡園部方面、大阪府、奈良県方面にまで及んだ。洛北方面のうち上賀茂・西賀茂（現在の京都市北区）には、京都帝国大学の気象学特別研究所（1926年開設）、上賀茂地学観測所（1909年開設）、農学部附属演習林上賀茂試験地（1926年開設）があった。大阪方面では高槻市を訪れ、同じく大学の阿武山地震観測所（1930年開設）や摂津農場（1928年開場）を調査している<sup>(25)</sup>。

調査の結果は、図書疎開の実施要領案とも言える「文献疎開案」にまとめられ、5月4日の図書館商議会へ提出された。それによると第1次図書疎開は大覚寺、保津村にある個人所有の土蔵、第2次図書疎開は随心院にそれぞれ決定した<sup>(26)</sup>。4月の商議会で審議された内容と少し変更がみられるのは、実地調査の成果であろう。

疎開地を選んだ個々の理由は不明であるが、「敵弾直撃ノ可能性、兵火以外ノ火災、盗難、運送ノ便宜、随時点検ノ利便、文献保存上ノ設備及湿度

等ノ見地ヨリ<sup>(27)</sup>」調査を行ったことから、ある程度の推測は可能である。図書疎開の目的が防空であることを考えると、疎開先を選ぶ際に最も重要な点は一般的に地形や場所性である。空襲による戦火は言うまでもないが、空襲で治安が混乱した場合に盗難が発生することも想定された<sup>(28)</sup>。図書を保管する環境として、川のそばや低地で湿度が高い場所、浸水の恐れがある場所も避ける傾向にあった。気象学特別研究所の場合、府立植物園（左京区）の北西隅に位置しておりすぐそばを鴨川が流れていること、摂津農場の場合、もともと淀川の水位が高く周囲一帯が排水不良地であったこと<sup>(29)</sup>などから、浸水の恐れがあると判断されたと推測できよう。

附属図書館の職員が点検のために訪れる利便性も考慮された。「文献疎開案」によれば、図書を疎開させた後、職員は月1回ないし数回の巡視を行う予定であった。実際に巡視や点検が実施されたかどうかは不明だが、年1回の曝書を実施し、研究上閲覧が必要な事態となった場合は職員が疎開地まで同行して閲覧をさせることを規定していた。大学で所蔵していた状態と同じ管理・利用環境を疎開地でも維持することを想定していた点は、前述した宮内省図書館寮や東京帝国大学の場合と共通する。

## 2-2 和漢書の目録作成、点検、荷造り、搬出

2019年5月、学内で附属図書館の疎開に関する資料調査を実施したところ、未整理の資料二点を確認した。どちらもA4判で、京都帝国大学の事務用紙を綴じた文書である。表紙にはそれぞれ『本館所蔵貴重和漢図書 疎開点検目録附点検控』、『本館所蔵貴重和漢図書 疎開荷造目録』とあり、作成時期は二点とも1944年6月である。作成者は前者が疎開文献点検係（貴重和漢書係）、後者は疎開文献点検係（貴重和漢書係）と疎開文献荷造係である。これらは附属図書館が図書疎開を実施

した過程で館職員によって手書きで作成された疎開資料の目録であった。以下、二点の資料を用いながら附属図書館の図書疎開について目録作成から搬出までをみていきたい。

1944年4月17日図書館商議会での決議後、実地調査と並行して疎開図書の目録作りも進められた。目録は、国宝、和漢書、洋書、特殊文庫（谷村本や近衛家本など）についてそれぞれ作成されたと考えられるが、本稿では蔵書の大半を占めていた和漢書に限定して述べる<sup>(30)</sup>。

4月21日、まず和漢書目録係が「本館所蔵貴重図書目録」（以下、点検目録）を用意した<sup>(31)</sup>。これは、附属図書館が1935年以降刊行してきた和漢書目録を元に作成したものと推測される。次に、附属図書館第三書庫の二階に配置されていた貴重和漢書の書架5列分ほどと、一階にあった法隆寺壁画資料について、点検目録との照合作業が行われた<sup>(32)</sup>。点検目録に記載された和漢書が書架に存在するかどうか、点数や整理作業の進捗具合を一点ずつ調査した<sup>(33)</sup>。点検目録に記載されていない和漢書でも貴重と判断したものが見つかった場合は、追加図書とした。こうして点検目録の情報を整理し、書名で五十音検索が可能なように並べ替え、疎開に必要な情報（格納した荷箱の番号等）を新たに追記したものが、『本館所蔵貴重和漢図書 疎開点検目録附点検控』（以下、疎開点検目録）である。

疎開点検目録によれば、疎開対象の和漢書は貴重性の高い順に最貴重図書<sup>(34)</sup>（に含まれる和漢書）、甲種貴重和漢書、乙種貴重和漢書と区別された。最貴重図書と甲種貴重和漢書が大覚寺、乙種貴重和漢書が個人所有土蔵へ運ばれている。

疎開点検目録には、「荷造冊（点）通号」という項目がある。これは書物番号であり、疎開点検目録にある甲種、乙種和漢書をそれぞれのグループ内で貴重性が高いと判断した順に1から通し番号を付与した。書物番号順に並べなおして目録化

したものが『本館所蔵貴重和漢図書 疎開荷造目録』(以下、疎開荷造目録)である。疎開荷造目録を見れば、書物ごとに大覚寺(疎開荷造目録では甲と記載)と個人宅(乙と記載)のどちらへ運搬したかという搬入先と、その際に収められた荷箱の番号を容易に把握することが可能である<sup>(35)</sup>。例えば「甲1」という記載は、その書物が大覚寺へ運ばれた荷箱のうち荷箱番号1に収められたことを示す。和漢書目録係が最も貴重性の高い和漢書と判断したものにあたるが、該当したのは宗教や哲学関係の図書であった。神道史や禅宗、仏教各宗雑論、書経・歌経、四書など全部で49点である<sup>(36)</sup>。一部の貴重和漢書に関しては、疎開地と荷箱番号に加えて「秘」という文字も付された。個人所有土蔵へ疎開させた43箱の荷箱のうち番号が43、つまり最終番号の荷箱に収められ和漢書は「乙43」ではなく「乙秘43」と記され<sup>(37)</sup>、秘本として扱ったことが分かるが、詳しくは後述する。

荷造りの際は、通し番号順に一定の容積になるまで箱に収め、順次荷箱番号を付与し梱包した<sup>(38)</sup>。荷箱の形状や大きさについては不明だが、物資不足の時代において、荷箱や包装用の荒縄が確保できたかどうかは定かでない。帝国図書館の図書疎開に関する東京帝国大学の調査報告書(1944年4月作成)によれば、当初木箱を使用していたが木箱が入手不可能になるとハトロン紙に図書を包み、藁でできたこもをかけて荒縄で包装したという<sup>(39)</sup>。

梱包が済むと、いよいよ搬出である。3054点の和漢書は大覚寺行き28箱、個人宅行き43箱の荷箱に区分して収納された<sup>(40)</sup>。大学農場所有のトラック1台を借用し、運搬中は常に責任者である図書館職員が付添い、監視を行った<sup>(41)</sup>。東京帝国大学の場合は、疎開地で先発の職員が待機して図書の到着を待つなど、先発隊と後発隊で役割分担がなされていた<sup>(42)</sup>。京都帝国大学附属図書館の場合は不明だが、先発隊があったとすれば疎開場所の鍵の受け取りや、関係者への挨拶回りを事前に済ま

せて搬入の準備を整えていたと考えられる。

1944年6月11日、甲乙どちらかは不明だがいずれかの疎開地へトラックが出発し、搬入、最終点検を終えて大学へ戻ってきた。13日、もう一つの疎開地へ同じようにトラックが出発し、図書を運搬した。こうして、図書館商議会で図書疎開の実施を決議してから2か月後、附属図書館の第1次図書疎開は終了した。

### 2-3 疎開させた和漢書の内訳

では、どのような和漢書が疎開対象に選ばれたのだろうか。疎開点検目録と疎開荷造目録では、記載された書物のほとんどに「図書番号」という番号が付されている<sup>(43)</sup>。これは附属図書館の和漢書分類番号であり、書物の内容を和漢書の部門と分野で表現している。図書番号を手掛かりにして、疎開させた和漢書を部門別に分類したものが表である。表によれば、文学語学部門が最も多く809点である。これは第1次図書疎開の和漢書全体の28パーセントにあたる。次に多いのは歴史地理部門568点であり、宗教哲学教育部門が539点と続く。経済社会や産業に関する書物は非常に少ない。

文学語学部門のなかには、前述した乙秘43に該当する秘本96点も含まれている。秘本の書名を具体的に挙げると、『御前獨狂言』(井原西鶴、宝永

表 疎開図書(和漢書)の部門別点数一覧

| 部門       | 点数  |
|----------|-----|
| 宗教 哲学 教育 | 539 |
| 法律 政治    | 48  |
| 経済 社会    | 10  |
| 文学 語学    | 809 |
| 歴史 地理    | 568 |
| 理学 博物    | 45  |
| 医学       | 398 |
| 工芸 武技    | 106 |
| 産業       | 12  |
| 全書 叢書    | 322 |

出典：『本館所蔵貴重和漢図書 疎開荷造目録』(京都大学附属図書館所蔵)

注) 部門は京都帝国大学附属図書館分類による。

2年)、『好色江戸紫』(石川流宣作、古山師重画、貞享3年)、『魂胆遊蟬窟』(不知足散人作、鈴木春信画)、『催情記』(明暦3年)、『色道後日男』(江島其碩作・西川祐信画)などである<sup>(44)</sup>。すべて「元禄文学」に分類されており、その特徴は高い娯楽性である。戦時中は戦意発揚を妨げ精神を墮落させるものとされていたため、疎開の事実を特に秘匿したと考えられる。文献疎開案によると、1944年5月時点では秘本として疎開させる予定の和漢書は153点あり、状況次第では疎開を留保する可能性もあった。すなわち、疎開対象の和漢書の中では重要度が二次的であったためか、荷箱の数が足りないなど何らかの不具合が発生した場合は館内で所蔵しておく予定であった。結果的には153点のうち約6割にあたる96点を疎開させたことになる。

その他の特徴として、医学部門の書物398点のうち360点が「和漢古方 按摩」に分類された書物であることを指摘したい。なぜこれほど多くの漢方医学の書物を疎開させたのか分からないが、和漢書分類の分野別にみると「和漢古方 按摩」は最も点数の多い分野である。

## 2-4 疎開図書の貸出

疎開した図書は、「研究上閲覧ヲ必要トスル事情起リタル場合ハ責任アルモノ同道立合ノ上閲覧ノ便宜ヲ図ル但シ貸付ハナサズ<sup>(45)</sup>」とされた。疎開地では、附属図書館の利用環境のうち閲覧を維持しようとしたことが伺える。ただ、実際は閲覧や貸出を申し出る利用者はあまり想定されていなかっただろう。1944年4月に仮閲覧室と第二閲覧室を併合させた事態に象徴されるように、学徒動員や勤労働員に伴い図書館の利用者は減少しており、閲覧業務も縮小していた<sup>(46)</sup>。

ところが、1944年9月下旬、靖国神社内にある遊就館から、所蔵資料を借用したいという申し入れがあった<sup>(47)</sup>。同年秋の靖国神社大祭で行う展示

「総武装の歴史を物語る」に陳列するため、「賀茂行幸図」(森寛斎筆)一幅を貸してほしいというものである。当該資料は附属図書館が所蔵する資料の中でも、尊攘堂で所蔵する最貴重品であった。大覚寺へ疎開中であつたが、沢瀉久孝館長と司書官は差し支えないと判断し、直ちに次のように返答している。

当図書館管理ノ尊攘堂所蔵品中館外不出ノ最貴重書品ニ所属致シ、現在ハ某遠隔地ニ疎開中ノ処御依頼ニ依リ特ニ疎開所ヨリ搬出ノ上郵送致候次第ニ付キ御取扱上特ニ御注意被下様願上候尚御受領ノ際ハ至急借用証本館宛御送付相成度右発送御通知申上度如斯候<sup>(48)</sup>

遊就館での展示が好評だったため、「賀茂行幸図」は当初の貸出期間が延長され、返却の際も東海道線や中央線等鉄道の故障により郵送できない事態に陥り、予定を大幅に遅れて返却された<sup>(49)</sup>。附属図書館の疎開図書が、疎開中にかかわらず外部へ貸し出されたという非常に稀な事例であったと言える。

## 2-5 第2次図書疎開

1945年に入ると、3月10日未明の東京大空襲を嚆矢とする夜間大空襲により大都市が次々と焦土と化した。3月18日「決戦教育措置要綱」が閣議決定され、4月1日から1年間、国民学校初等科を除くすべての学校で授業が完全に休止されることになった。京都帝国大学を取り巻く防空も大きく進み、5月22日「戦時教育令」により教職員・学生による学徒隊が学部・学科・学年などを単位として組織された<sup>(50)</sup>。附属図書館でも学徒隊を結成するとともに、全学的な木造建物の取り壊しの一環で第一書庫、第二書庫、第三書庫をそれぞれつなぐ木造の渡り廊下、教官閲覧室や作業部屋、玄関付近と廊下、書庫の西側にあった木造建物の

廊下や便所を選定した<sup>(51)</sup>。

1944年5月の文献疎開案で、第2次図書疎開の実施も見据えていたことは既に述べた。ただし実施する時期は未定であったため、実施を決定するには何らかの要因があったはずである。『京都大学附属図書館六十年史』によれば、第2次図書疎開は、京都府通牒「文化財資料緊急疎開ニ関スル件」を受けて実施している<sup>(52)</sup>。しかし通牒を史料で確認することができず、いつ発せられたものかわからないため、第2次図書疎開の開始時期は不明と言わざるを得ない。第2次図書疎開の荷造りが終了したのは1945年7月20日前後であるため<sup>(53)</sup>、通牒が発せられたのはおそらく同年6月末から7月初旬と推測する<sup>(54)</sup>。

府の通牒は内政部長、警察部長の連名で、府下の文化財所有団体に疎開を実施するよう勧告するものであった<sup>(55)</sup>。通牒の内容は次の通りである。

標記ノ件別紙要領ニ依リ実施候条御了知ノ上至急御手配相成度追而実施ニ関スル詳細ハ内政部学務課ト打合相成度尚本疎開ハ比較的安全ト思料サル一箇所ヲ選定スルモノニシテ絶対安全ヲ保証致シ難ク候条御諒承相成度申添候<sup>(56)</sup>

附属図書館側は第2次図書疎開の場所を随心院と考えていたが、通牒を受けて「山科は京都の都心部よりやや遠いが市内であることには変わりはなく、市内空襲の恐れもあるため、京都府通牒の主旨に添い<sup>(57)</sup>」、京都府北桑田郡の国民学校へ変更した。このことから、通牒にある「別紙要領」のなかで府は京都市内への疎開を避けるよう指示していたことが推測できる。

相談窓口とされた内政部学務課は、府内の幼稚園、国民学校、中等学校、高等女学校、青年学校、実業学校等の学校事務を統括する組織であった。1945年3月以降、京都市内では国民学校初等科児童を市外へ疎開させる学童疎開が本格化していた。

京都府側は府下の学校を図書等の疎開先として想定していた。学童疎開を通じて学務課が有する現地との連絡手段を使って疎開を実施しようと考えたのであろう<sup>(58)</sup>。実際に京都帝国大学の図書疎開を受け入れたのは京都府北部や南部の国民学校であった。具体的には、北桑田郡知井国民学校（現美山町）、同郡神吉村神吉国民学校（現南丹市八木町）、周山国民学校（現京都市右京区）、網野国民学校（現京丹後市）および京都府林業種苗場（現京都市右京区）である。疎開場所の数が多いのは附属図書館の第2次図書疎開では、附属図書館だけでなく他部局の蔵書も府の斡旋により疎開させたためである。

内政部は、京都帝国大学から疎開先となる国民学校までの道路状況や所要時間に関する情報も一部所持していたことが確認できる。京都府は府内数か所の道路を「戦時重要物資輸送道路」に指定していた。1944年8月、改良工事に必要な情報を収集するため、内政部長の川井章知が実際に視察を行っている。北桑田郡知井村の中を通る府県道知井京都線も戦時重要物資輸送道路であった。1944年8月の視察の対象に含まれており<sup>(59)</sup>、内政部長は自動車で知井村へも訪れた。その結果、「府庁より（知井村まで：注筆者）自動車で往復約10時間」という情報を得ている<sup>(60)</sup>。

知井国民学校で受け入れた図書は、少なくとも附属図書館と文学部の図書併せて36100冊、960包に及び、知井国民学校の特別教室と講堂兼体操室に保管された<sup>(61)</sup>。『知井小学校百年誌』には、「京都大学図書館が周山小学校に疎開すべく図書を輸送して来たが、周山小学校では全部保管出来ず、残り六百冊を知井小学校に保管し、終戦後返却する」という記述がみられ<sup>(62)</sup>、当初予定していなかった図書も緊急で受け入れていたことがわかる。

第1次図書疎開は附属図書館が主体的に企画から実行まで携わったのに対し、第2次図書疎開の特徴として京都府の斡旋により実施し、郡部の国

民学校校舎を利用したことを指摘できる。

### 3. 文学部の図書疎開

#### 3-1 実施への懸念

附属図書館の他にも、図書疎開が実施された部局・研究室を断片的にはあるが確認できる。大学文書館に移管されている文学部教授会資料からは、大学の統一的方針に対して文学部が独自の方策を模索した様子が伺える。

1943年10月2日、在学徴集延期臨時特例により学生に対する徴集猶予が停止されると、文学部、法学部、経済学部、農学部（農学科、農林生物学科、農林経済学科のみ）学生の6割から7割程度が同年12月に徴集され、陸軍や海軍へ入隊した。文学部の場合、このとき徴集された学生は在学者476名のうち302名にあたる63.2パーセントであった<sup>(63)</sup>。大学に残留した学生は、勤労働員の強化により宇治、太秦、愛知県豊川など各地の工場へ動員される日々を送っていた。応召による職員不足も目立ち始め、当時の文学部図書室は、哲学科と文学部の閲覧室では「利用者殆トナシ現在夜勤者得難シ<sup>(64)</sup>」という理由から開室時間を午前9時から午後5時に短縮した。夜勤担当職員がいた史学科は、従来どおり午前9時から午後7時まで開室していた。

文学部教授会議事録においてはじめて図書疎開の記述が見られるのは1944年4月24日である。当日の教授会では図書館読書指導委員会委員の選出が協議された際、4月17日の図書館商議会において附属図書館の貴重書の疎開が審議されたことが報告された。この時点では報告のみで終わり、文学部として図書疎開を行うかどうかという議論には至らなかった<sup>(65)</sup>。当時の教授会は、割り当てられた勤労働員への対応や動員学生への講義や試験、卒業論文や口頭試問の取り扱いなどの対応に追われて、利用者のほとんどいなくなった図書室への認識は優先順位としては低かったのかもしれ

ない。

文学部の図書疎開が教授会で議論されたのは、それから1年以上が過ぎた1945年7月6日であった。附属図書館の第2次図書疎開の一環で、文学部教授会にも照会がかかった時であった。図書疎開を強化すべく、「京都府の斡旋に依り左記箇所へ疎開を急速に実施することとなる 葛野郡小野郷村 北桑田郡細野村 宇津村 知井村各国民学校及び芦生演習林事務所<sup>(66)</sup>」と事務官より報告された。大学全体として今回の図書疎開では約10万冊の疎開を予定しており、1週間後の7月15日に完了させたいという話であった。行政の斡旋による疎開という方法は文学部にとっても初めてであり、教授会では疎開先が国民学校であるという点に不安の声が集中した。教官たちの反対は、帝国大学の研究資産である貴重な蔵書を国民学校に預けて保管責任をきちんと果たしてくれるのかという懸念と捉えることもできよう<sup>(67)</sup>。

だが、反対の理由はそれだけではなかったようである。教授会では、図書費を使って各研究室の判断で独自に疎開したいという希望が出た<sup>(68)</sup>。文学部教授会では図書疎開のことを「集合疎開」と称するなど、全学で一致した行動を取ることにある種の抵抗があったように見受けられる。この理由については後述する。

「集合疎開」を希望する教員については、当日夕方までに図書の冊数と現況、30～50冊ずつ包装した場合の個数を附属図書館へ通知するよう求められた。前述した知井国民学校の例から文学部がこれに応じたことは明らかであるが、大学全体で10万冊の図書を1週間で疎開させることは無理であった。文学部の蔵書は7月半ばまでに疎開させることを目指したが、実際は予定より遅れ8月5日までかかった。このとき、各講座が所有する図書は附属図書館へ「寄託」という形で取りまとめられ<sup>(69)</sup>、国史・東洋史・西洋史・支那哲学史<sup>(70)</sup>・社会学に関する対象図書5500冊、220包が知井国

民学校へ運び込まれた<sup>(71)</sup>。

### 3-2 新たな疎開先

附属図書館による全学的な図書疎開が進む一方、文学部の一部教官は独自に別の疎開地を探し始めた。国史専攻では、図書委員であった教授西田直二郎を中心に調査した結果、新たな候補地を決定した。ちょうど文学部の「集合疎開」が終了した8月初旬であった。新しい疎開地は、滋賀県栗太郡上田上村国民学校校舎であった。文学部の庶務掛では、滋賀県知事、栗太郡上田上村村長、上田上村国民学校の三者へそれぞれ図書疎開の受け入れを願い出る落合太郎文学部長名の文書を送付した。大学文書館にはその写しが残されているが、三種類とも8月11日付で作成されている。文面はほぼ同一だが、滋賀県知事稲田周一へ出した書面は次の通りである。

拝啓陳者時局に鑑み學術資料保存の為此度京都帝国大学文学部国史関係重要研究史料並貴重図書貴県下栗太郡上田上村国民学校校舎の一部に疎開致度計画相立候に就而は特別之御配慮に預り度此段御依頼申上度如斯候

追而右に関し近日常文学部教授西田直二郎参上拝面之上委細申述御依頼可申上候 敬具<sup>(72)</sup>

上田上村国民学校長へ充てた書類では、特に「近日愈々運搬入致度候御諒承願度候尚何分之御高配冀上度候」とある。先方と十分に交渉する間もなく図書の搬送を急いだことが伺える。しかし、西田が訪問を予定していた矢先に敗戦を迎え、疎開が実施されることはなかった。

### 3-3 抵抗の史的背景

文学部国史専攻が独自に探し出した保管先は、場所こそ違うが同じ国民学校であった。非常時にも関わらず全学的な図書疎開に歩調を合わせるこ

とを潔しとしなかった理由は、大学における図書館業務の史的経緯と関係があるのではなかろうか。

京都帝国大学では、附属図書館が開館した1899年に法科大学、1906年に文科大学が設置されたが、分科大学はそれぞれ独自の図書取扱規程を有していた<sup>(73)</sup>。図書業務に関して各部局は独自の方法で研究教育に供し、独立性が強かったと言える。附属図書館設立以降、図書の受入・登録に関しては附属図書館で行う中央登録制を採用してきたが<sup>(74)</sup>、各部局が購入した図書は、図書館で必要な手続きを済ませた後はそれぞれの部局に備え付けられていた<sup>(75)</sup>。

1933年に東京文理科大学附属図書館が行った調査結果によると、当時の京都帝国大学は95万冊の蔵書を有し、そのうち約半数は学部で所有していた。法学部と経済学部の図書室で約30万冊を所蔵し、司書以下の職員も置いていた。文学部図書室の蔵書数は約22万冊で、図書室内を哲学科と文学科に区分し、史学科は別館として陳列館に設置されていた。その他、理学部のように各学科で図書室を持つ部局もあった<sup>(76)</sup>。

大学として図書業務を中央管理にするか否かという問題は現在の図書館行政にも通じるが、京都帝国大学の場合、附属図書館開館まもない時期から論点となっていた<sup>(77)</sup>。公式の場である図書館商議会の議論を見ると、1913年9月12日に開かれた第9回図書館商議会において、臨席した澤柳政太郎総長の提案により図書業務の一元化がはじめて議題となった。澤柳総長は、かねてより図書行政を合理的に統一することを望んでおり、各研究室には研究上不可欠な文献のみ配置し、なるべく多くの図書を附属図書館に集中させるべきと考えていた。各分科大学の図書取扱規程も統一させる必要があるとした。折しも、大学全体の図書の総合目録を出版しようという案があり、統一させる良いタイミングだと考えたのであろう。しかし、委員からは「別段、今日までのやり方に不満を持っ

ていないのに、統一を強行されては困る」「それぞれの分科大学の図書の特異性を考えたうえでの規程だから。従来のままでいい」と反対意見が噴出し、結論が出ないまま終了した<sup>(78)</sup>。

1916年の第11回商議会では、従来会議の主たる議題とされてきた翌年度図書館予算案の審議を、以後とりやめることになった。そのため少なくとも1年に1度開催されてきた図書館商議会は、数年間開催されない場合もあり、図書業務の中央管理に関する審議もみられない。

1929年6月10日に開催された第13回商議会では新城新蔵総長も出席し、新村出館長が提出した「図書館新営案」が審議された。「図書館新営案」は第9回商議会のものより検討を重ねたものであった。図書行政の統一化をさらに推進し、特に全学的な図書系事務の統合を意図していた。具体的には、管理部、中央図書館部、各学部図書整理部の3系統を敷き、各学部図書整理部の下にはとりまとめの司書官を2名配置する。各司書官の下に各学部の図書系職員（司書、嘱託、雇）が所属するという案である。すなわち各学部には司書が1～2名<sup>(79)</sup>と雇員若干名が所属し、彼らが図書業務を担うこととなる。附属図書館は中央図書館と位置づけ、附属図書館に以来から属している図書館商議会が指導的立場で各学部に関与する、というものである。新村館長の提案は、整理・運用だけでなく図書系職員の統合も意図する大変意欲的なものだった<sup>(80)</sup>。だが、このような中央集権的な方法は、図書業務を敏速に進めるに効果があると評価されつつも、議論は難航し結論は次回に延期された。第14回商議会（6月27日）、第15回商議会（10月24日）でも議論が続いたが、学部の反発は強く遂に実現には至らなかった<sup>(81)</sup>。

以後、図書業務の中央管理が公式の場で議論されることは戦後まで見られない。篠塚は「総長・館長の提案でさえも、ついに実現できなかったのは、法・経や文の学部図書室自体が、当時の他の大学

図書館以上の蔵書を有していたこともその背景として考えておくべきことであろう」と指摘する<sup>(82)</sup>。独自の図書取扱規程と、膨大な蔵書を有し、独立性の高い図書業務を進めていた部局にとって、1945年の第2次図書疎開は図書業務の一元化を想起させた可能性も考えられる。大学および学部の図書館業務の史的背景が影響して、戦時中の図書疎開という場面において、文学部独自の方針模索という形で表出し足並みが揃わなかったのではないだろうか。

## 4. その他の部局

### 4-1 人文科学研究所

1939年に設立されたばかりの人文科学研究所でも図書疎開を試みたことが確認できる。附属図書館の第2次図書疎開と同じ時期にあたる1945年7月頃、図書の疎開地として岡山県笠岡町と京都府福知山市を候補地に選定した。当時教授であった清水金二郎<sup>(83)</sup>（法学）と、研究嘱託員であった鳥越憲三郎（宗教史、歴史学）が出張し、現地を訪れた結果、研究所から遠く離れた笠岡町を疎開地に決定した。笠岡町は岡山県西部に位置する瀬戸内海に面した地域で、広島県との県境に近い。

二人は、北村笠岡町長の世話で青年学校や女学校などいくつかの候補地を訪ね、淳和高等女学校（現岡山龍谷高等学校）を選んだ<sup>(84)</sup>。このことから研究所は図書疎開の場所を決める際の方法として、まず適当な地域を決めて、その中で図書を所蔵するのに適切な施設を選出したことが分かる。清水と鳥越はその場で淳和高等女学校校長津田明導と交渉を行い、校舎の一部を借用する約束を取り付けた。このときかなり具体的な約束もなされていたようである。人文科学研究所庶務掛が残したメモによれば、女学校から借用するものとして教室（七）、講堂（一）、小部屋（一）が記録されている。輸送方法については、研究所から笠岡町までは大学側で輸送を担当し、女学校内への搬入

は女学生の勤労奉仕によることも決められた。その他、図書の整理や閲覧のため研究所の教職員が訪れることを想定し、笠岡町にある吉田寺が所員用宿舎として用意されることとなった。

実施に向けた準備が進められるなか、7月末から8月はじめにかけて事態は急転回する。高坂正顕所長名で岡山県内政部長に宛てられた8月6日付文書によれば、「陳者先ニ貴県下笠岡町所在ノ淳和高等女学校ニ舎ノ一部借用ノ件ニ付貴官ノ御了解ヲ可得近々参上可致旨御通知申上置候処今般都合ニ依リ疎開ヲ中止致候間右御諒承被下度候<sup>(85)</sup>」という。

中止の理由は定かでないが、疎開地の遠さが現実的でなかったことは否めない。計画段階では研究所から笠岡町までは民間の運送会社を利用して蔵書を運ぶ予定であったが、中止により計画は白紙となった。

1949年に人文科学研究所と合併した東方文化研究所は、当時は京都帝国大学の組織ではなかったが図書疎開が実施されたことが確認できるため付記しておく。東方文化研究所の場合、倉田淳之助（漢文学）の尽力で疎開地を探し出したとされるが<sup>(86)</sup>、1945年8月という実施時期から京都府が疎開地を斡旋したと言える。倉田は1943年3月『東方文化研究所漢籍分類目録』を作成、出版するなど<sup>(87)</sup>、所内の漢籍について所蔵状況を十分に理解していた人物の一人であった。経学文学研究室を運営していた吉川幸次郎や倉石武四郎の指示のもと、疎開図書の目録作成や疎開地の選定を担ったと推測される。

蔵書の梱包や搬出は所員総出で行った。蔵書を収めた178箱は、1945年8月9日、12日、13日に、三好重夫府知事が差し向けた木炭トラックで南桑田郡の山国村国民学校へ運ばれた<sup>(88)</sup>。戦後、1945年10月末に研究所へ返却されている。

#### 4-2 自然科学系

事業の規模は異なるが、戦争末期には自然科学系でも疎開を実施した。自然科学の分野では、精密機械や実験器具を疎開させる研究室疎開のなかに図書疎開も包含されていたようである<sup>(89)</sup>。工学部教授会議事録によれば、研究室の疎開がはじめて議題に上がったのは1945年4月である<sup>(90)</sup>。附属図書館の第2次図書疎開実施時期であり、必要があれば実施するという程度の認識に留まった。

実際に研究室疎開を実施した事例として、農学部農林経済研究室を挙げることができる。1943年10月、徴兵猶予の特典が停止された際、農学部においては農学・農林生物・農林経済の3学科学生は、文科系学生と同じくその対象となった<sup>(91)</sup>。当時教授であった渡辺庸一郎<sup>(92)</sup>（農林経済学）の回顧によれば、研究室と図書の疎開を自ら計画したという。渡辺の個人的なつてで疎開先を探し、丹波の府立須知農林学校の収納舎に研究室を移せるかどうか学校長と交渉を進めた。しかし実現には至らなかった。

渡辺が研究室で管理していた図書の疎開は実行された。特に重要な和漢洋書を選択し、北桑田郡周山の民家に疎開させた。物資が欠乏する時期にありながら、専売局の煙草元売捌きの大きな木箱を学生たちが手に入れ、木箱十数個に詰めて疎開させたという。運搬には府農業会のトラックを使用した<sup>(93)</sup>。

その他、理学部でも、図書雑誌と研究実験用機械器具類を滋賀県に所在する石山ボートハウスとその附属宿舎に疎開したことが確認できる<sup>(94)</sup>。医学部では、8月14日に図書の梱包作業が完了した段階で敗戦を迎えた<sup>(95)</sup>。

#### おわりに

本稿で得られた知見を次の三点にまとめる。

第一に、京都帝国大学における図書疎開は、1944年4月に図書館商議会の決議を経て附属図書

館がはじめて実施した。疎開地の選定や疎開図書  
の目録作成など、職員を中心に綿密な事前準備が  
行われた。図書だけでなく図書館機能の移転も意  
図しており、目的や実施時期、方法、規模など附  
属図書館が主体的に判断し実施した。

第二に、附属図書館の疎開図書に含まれる和漢  
書を和漢書分類部門別に分析した結果、教養書が  
非常に多いという特徴が見られた。具体的には「宗  
教哲学教育」部門が最も多く、次に「文学語学」、「歴  
史地理」と続く。秘本や漢方医学書なども含まれた。

第三に、附属図書館の第2次図書疎開は、京都  
府の先導により1945年7月以降に実施された。  
疎開地や輸送手段を府が斡旋した結果、受け入れ  
先は当初予定していた京都市内の寺院ではなく府  
下の国民学校校舎へ変更された。選定された疎開  
地や、大学から疎開地までの距離はいずれも大学  
側が想定していた範囲を超えるものだったと考え  
られる。

以上から、京都帝国大学の特に第1次図書疎開  
について当時の目録二点を手掛かりに具体的な方  
法を明らかにし、第2次図書疎開との主体や方針  
の違いを指摘することができた。洋書や他の貴重  
書類についても同様の方針であったと推測するこ  
とができ、京都帝国大学の図書疎開の全容を解明  
する一助を得ることができた。

以下、今後の課題を二点述べたい。防空という  
空間的広がりをもつ図書疎開事業から見てきた  
ものは京都帝国大学の防空認識であり、さらに戦  
争末期に京都帝国大学の蔵書の保管を担ったのは  
郡部の初等教育機関だったという構図である。こ  
れらは大学の位置する地域性とも関連性があり、  
行政文書や地域資料の発掘・分析も今後求めら  
れるだろう。

次に、東京帝国大学の事例からも推測できるが  
図書疎開に踏み切った背景は大学や各部局によっ  
て異なる可能性がある。京都帝国大学の場合も、  
図書疎開を実施した背景を京都大学の歴史的文脈

で検討する必要があるだろう。思想弾圧下の戦時  
下において、大学図書館が大掛かりな図書疎開を  
実施した意義については今後の課題としたい。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり廣庭基介先生に貴重なご教  
示をいただきました。また資料調査にあたり附属  
図書館の赤澤久弥氏に大変お世話になりました。  
ここに記して感謝申し上げます。

## [註]

- (1) 秋岡梧郎『秋岡梧郎著作集—図書館理念と実践  
の軌跡—』日本図書館協会、1988年、清水正三『図  
書館を生きる—若い図書館員のために—』日本図  
書館協会、1995年、奥泉和久『近代日本公共図書  
館年表1867-2005』日本図書館協会、2009年、金  
高謙二『疎開した四〇万冊の図書』幻戯書房、  
2013年。非常に珍しい例だが、東洋文庫の場合は  
図書疎開経験者による詳細な記録が残る(星斌夫『禿  
筆漫録』星斌夫先生退官記念事業会、1980年)。
- (2) 『東京大学百年史』通史二(東京大学百年史編集  
委員会編、1980年) pp.842-846、同部局史四(同、  
1987年) pp.1226-1228、『京都大学百年史』総説  
編(京都大学百年史編集委員会、1998年) pp.459-  
460。戦前期の実質的な総合大学という枠からは  
外れるが『東北大学百年史』通史一(東北大学百  
年史編集委員会、2007年)、『九州大学百年史』通  
史編I(九州大学百年史編集委員会、2013年)に  
も図書疎開の事実が記述されている。
- (3) 京都大学附属図書館の元職員であった廣庭基介  
による研究(「十五年戦争期における京大図書館の  
史的考察」『花園大学文学部研究紀要』41号、  
2009年)は数少ない先行研究であり、戦時期の図  
書館に勤めた先輩司書から著者が聞いたことを二  
次資料で辿りまとめている。
- (4) 図書疎開は文献疎開とも言われ、疎開する対象  
は書籍(和書、洋書)、絵画、貴重品等所蔵資料に  
よってばらつきが見られる。本稿ではそれらも含  
めて図書疎開と称する。

- (5) 東京大学附属図書館月報である『図書館の窓』「東大百年特集号」(173号、1977年)、薄久代『色のない地球儀 資料・東大図書館物語』同時代社、1987年
- (6) 「文部省主催都道府県中央図書館長並図書館事務担当官会議」『図書館雑誌』290号、1944年
- (7) 青野伊豫児「山科へ本の疎開」『図書館の窓』173号、1977年、p60
- (8) 「図書の疎開進む」『図書館雑誌』293号、1944年
- (9) 前掲『近代日本公共図書館年表1867-2005』、pp.113-116。
- (10) 大窪太朗「図書寮本の疎開前後」『書陵部紀要』30巻、1978年、p38
- (11) 同上、pp.38-40
- (12) 第1次は1943年11月に約6万6000冊、第2次は1944年5月に約5万4000冊、第3次は1944年8月に3400冊を輸送した(「帝国図書館蔵書疎開始末記」『国立国会図書館月報』232号、1980年)。
- (13) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B12080779800 (第446画像目から)、「文書及図書類疎開関係雑纂」(N.1.0) (外務省外交史料館)
- (14) 成田図書館編『成田図書館周甲記録』成田図書館、1961年、pp.173-174。当時成田図書館の書庫は耐火構造の煉瓦造であった。
- (15) 鈴木英二『財団法人興風会図書館の五十年』興風会、1991年、pp.57-58。興風会図書館の書庫は大谷石を使った防火構造になっており、所蔵スペースに余裕があったという。興風会図書館では1944年7月1日から1945年8月1日まで保管したが冊数は不明である。
- (16) 1944年3月15日の図書館商議会で「本学蔵書疎散に関する件」が審議された(前掲『東京大学百年史』部局史四、pp.1226-1227)。
- (17) 前掲『成田図書館周甲記録』p174
- (18) 前掲『東京大学百年史』部局史四、p1227
- (19) 前掲『色のない地球儀 資料・東大図書館物語』pp.140-143
- (20) 東京都『東京都戦災誌』明元社、2005年、pp.207-208
- (21) 前掲『東京大学百年史』部局史四、pp.578-580
- (22) 前掲『東京大学百年史』通史二、pp.845-846
- (23) 「京都帝国大学附属図書館商議会規程」(前掲『京都大学百年史』資料編一、p733)。商議会委員は各学部長と各学部の教授1名から構成された。図書館長や司書官は列席し開催は不定期であった。
- (24) 京都大学附属図書館編『京都大学附属図書館六十年史』京都大学附属図書館、1961年、p43
- (25) 同上書、p187
- (26) 実施前に疎開規模が判明していたため第1次図書疎開では図書を1か所に収蔵できないことが当初から分かっていた。防空上の観点からも2か所に分けたほうが安全と判断された(同上書、pp.187-188)。
- (27) 同上
- (28) モリソン文庫(現東洋文庫)の場合、所蔵図書を岩崎家の地方別邸や農場に疎開させた場合の危険性として「地方の治安が混乱した場合には、幾台かのトラックで運ばれたものがあると知った地方人は、それが生活とは何等関係のない図書とは知らず、宝物でもあるかと誤信し襲ひ略奪せぬとは誰が保証し得よう」と懸念していた(岩井大慧「戦火防衛対策について」『図書館雑誌』286号、1943年、pp.600-602)。
- (29) 前掲『京都大学百年史』部局史編二、p452
- (30) 疎開させた和漢書はさらに最貴重書と貴重書の2種類に区分された。最貴重和漢書は約350点、貴重和漢書は3054点である。
- (31) 「凡例」『本館所蔵貴重和漢図書 疎開点検目録 附点検控』(京都大学附属図書館所蔵)(未整理資料)
- (32) 同上資料、目録作成過程の説明(件名なし)
- (33) 前註31
- (34) 重要美術品指定図書(国宝)、洋書を含む。
- (35) 疎開点検目録と疎開荷造目録の違いを整理しておく、書物から荷箱番号を検索したいときは疎開点検目録、逆に荷箱番号から書物を検索したいときは疎開荷造目録が有用であり、二つの目録は点検番号(点検の際、書目に代わる番号)が共通している。
- (36) 「甲地疎開荷造目録」『本館所蔵貴重和漢図書

- 疎開荷造目録』(京都大学附属図書館所蔵資料)(未整理資料)。なお、一つの荷箱に収められた和漢書の平均点数は46.6である。
- (37) 同上資料所収「乙地疎開荷造目録」
- (38) 前註31
- (39) 前註7
- (40) 和漢書以外で大覚寺へ疎開させた館所蔵図書は、重要美術品指定図書(国宝)3点、洋書181点、尊攘堂甲種貴重品32点、古梓堂文庫貴重書77点である。同じく個人宅へは「谷村本」貴重書690点、本館所蔵最貴重洋書65点、尊攘堂乙種貴重品58点、寄託「近衛家本」貴重書980点を疎開させることが疎開文献案には記載されている(前掲『附属図書館六十年史』p188)。
- (41) 附属図書館第2次図書疎開のケースであるが、当時附属図書館司書であった佐々木乾三の戦後の回顧によれば、木炭トラックで疎開図書を芦生演習林へ運ぶ途中、周山街道の途中でトラックが不調になり同町の街道沿いにある寿司屋兼旅館で一泊したという(廣庭基介先生御教示による)。職員がトラックに同乗し付き添っていたことが確認できる。
- (42) 東京帝国大学附属図書館が山梨県にある「青洲文庫」(渡辺邸)へ所蔵図書を疎開させた記録「第二次図書疎開市川大門出張記録」によると、図書の運搬は荷受担当と運搬担当で実施した。荷受役の仕事は鍵の受け取り、関係者への挨拶回り、到着した荷箱の点検、搬入、収蔵状況の確認、鍵の返却である。「到着早々、関係方面へ挨拶に廻った。各方面の疎開図書に対する関心は意外なほど強く、現に前記のように当日現状視察に来庫されたばかりでなく、図書の数量・内容等についてもよく知ろうとする態度が見え、警察からは簡単なものでよいから是非ともリストを欲しいという要求があった」という。搬入後、「西八代地方事務所長・同総務課長、市川警察署長・同特攻主任の諸氏現場視察の為来庫」とあり、関係者への対応を行った(前註7、青野論文)。
- (43) 河合文庫など一部の文庫本には付されていない。
- (44) 前註37
- (45) 1944年5月4日作成文献疎開案(前掲『京都大学附属図書館六十年史』p189)
- (46) 同上書、p172
- (47) 「絵画拝借の件 照会」『自昭和十九年至昭和二十年雑書類図書館』(京都大学大学文書館所蔵識別番号02B15553)
- (48) 同上資料所収「森寛斎筆賀茂行幸図借用方願出ノ件」
- (49) 前註47「遊就館からの書状 1944年12月15日」
- (50) 前掲『京都大学百年史』総説編、p456
- (51) 「図書館所属木造建物の中取壊すべき部分届出の件」『昭和二十年度建物取壊関係書』(京都大学大学文書館所蔵(識別番号01A09542))。実際に取り壊されたかは確認できず、選定のみにとどまった可能性もある(拙稿「戦争末期のキャンパス—木造建物の取り壊し—」『京都大学大学文書館だより』第37号、2019年)。
- (52) 前掲『京都大学附属図書館六十年史』p190
- (53) 同上
- (54) 京都府通牒の発信時期は、第2次図書疎開の対象を調査した「京都帝国大学所属疎開図書冊数並ニ包装個数調」が1945年7月7日付であることから推測した。
- (55) 前註52
- (56) 同上
- (57) 同上
- (58) 1942年7月、府政出張所や駐在職員の業務を統合した地方事務所が郡部に21か所設置された(「地方課 課の機構に関する件」『内政部事務概要』(京都府立京都学・歴彩館所蔵)。これらの地方事務所が現地行政の要として現地国民学校への連絡等を担った。
- (59) 府県道知井京都線が重要な理由は、ブナ材や木材、薪炭等を京都市内へ向けて搬出するためであった。京都市内の燃料不足が深刻化し、輸送手段がないまま府下の郡部や出荷駅に留まっていた薪炭をいかに運び出すかが当時問題となっていた(『京都新聞』1944年9月14日)。
- (60) 「内政部長管内要視察箇所調に関する件」『要書綴』1944年(京都府立京都学・歴彩館所蔵)

- (61) 『教授会記録 昭和二〇年 昭和二十一年』1945年7月6日(京都大学大学文書館所蔵 識別番号03B00064)
- (62) 『知井小学校百年誌』知井小学校創立百周年記念事業運営委員会編、1973年、p16。記述は1944年11月とあるが1945年7～8月の出来事と推測した。
- (63) 『京都大学における「学徒出陣」調査研究報告書 第一巻』京都大学大学文書館編、2006年、p19
- (64) 『教授会記録 昭和19年』1944年2月2日(京都大学大学文書館所蔵 識別番号03B00064)
- (65) 同上資料所収、1944年4月24日
- (66) 前註61
- (67) 図書を疎開する場合、保管者と依頼者が契約を締結することが一般的であったようである。附属図書館の場合も、第1次図書疎開の際に保管所責任者と京大総長との間で保管に関する1年間の契約を締結(必要に応じ期間を延長)することが規定されていた。それによると、保管所責任者の責任は四つある。第一に火災および盗難に対する予防措置をとること、第二に万一空襲や火災、盗難等が発生した場合万全の処置をとること、第三に保管所責任者および京大が指定する公用者以外は保管所に立ち入れないこと、第四に保管所借用料金を定めることである。このように疎開地における保管は基本的に預り先が責任を持つて行う(前掲『京都大学附属図書館六十年史』p189)。
- (68) 前註61
- (69) 「疎開図書寄託証」『自昭和十九年至昭和二十年 雑書類図書館』(京都大学大学文書館所蔵 識別番号02B15553)
- (70) 支那語学支那文学講座では1945年7月から8月にかけて図書疎開を計画し、そのとき作成された目録が確認される(『支哲文学疎開図書目録』(東京大学東洋文化研究所倉石文庫所蔵))。目録作成は当時の講座教授だった倉石武四郎の指導によるものと推測され、186の荷造り番号が記されている。支那文学講座の図書疎開が附属図書館が取りまとめた第2次図書疎開の一環かどうかは不明である。
- (71) 知井国民学校へ疎開した図書は1945年11月14日、15日両日に返還され、各研究室へ引き渡された(『教授会記録 昭和二〇年 昭和二十一年』(前註61資料、1945年12月5日)。なお、芦生演習林へ疎開した図書数は不明である。
- (72) 『庶務関係綴 昭和二〇年度』(京都大学大学文書館所蔵 識別番号02B07782)
- (73) 「京都帝国大学法学部図書取扱規程」「京都帝国大学文学部図書取扱規程」『本学内規例規関係書類(参考の二) 自明治30年至昭和23年』(京都大学大学文書館所蔵 識別番号01A00265)
- (74) 前掲『京都大学附属図書館六十年史』p78
- (75) 篠塚富士男「昭和初期の大学図書館」『大学図書館研究』No.36、1990年、p2
- (76) 同上、pp.1-3
- (77) 1909年2月17日に開かれた第1回附属図書館商議会の議題は「本学図書(各分科ヲ通シ)印刷目録調整希望ノ件」であった。当時の目録カードは手書きであったが、附属図書館内には全学共通で使用できる印刷目録の構想があったことが確認できる。開館後10年目には附属図書館内で既に図書業務の一元化構想が醸成されつつあったと言えよう(前掲『京都大学百年史』総説編、p1206)。
- (78) 前掲『京都大学附属図書館六十年史』pp.22-23
- (79) 司書の人数は法経文は各2名、医、医院、工理農は各1名とされた。
- (80) 前註75、篠塚論文、p5
- (81) 前掲『京都大学附属図書館六十年史』pp.32-34
- (82) 前掲75、篠塚論文、p5
- (83) 関西学院高商部教授であった清水金二郎は人文科学研究所が設立された直後の1940年3月から専任所員として1948年5月まで在職した。
- (84) 「書状発送に関するメモ」(件名なし)『庶務関係 昭二〇』(京都大学大学文書館所蔵 識別番号02B11312)
- (85) 同上資料所収、1945年8月6日付文書
- (86) 『人文科学研究所50年』京都大学人文科学研究所、1979年、p65
- (87) 倉田淳之助「東方文化研究所漢籍分類目録解説」『東方学報.京都』第14冊、1944年
- (88) 前掲『人文科学研究所50年』p65
- (89) 九州帝国大学の場合であるが工学部、農学部、

理学部、医学部が研究室疎開を計画する際、同時に図書疎開も試みている。前掲『九州大学百年史』通史編Ⅰに詳しい記述がみられる。

- (90) 『自昭和20年1月至昭和21年12月教授会議事録』  
(京都大学大学文書館所蔵 識別番号 02B00214)  
1945年4月10日。
- (91) 1943年12月時点で徴集された農学部(農学・農林生物・農林経済各学科)の学生は、在学者253名のうち140名であり約半数にあたる(前註63)。
- (92) 1944年12月から人文科学研究所教授兼任。研究所における戦時特別研究の第5班「戦時ニ於ケル農村問題」担当者でもあった(前掲『人文科学研究所50年』p64)。
- (93) 京都大学農学部創立四十周年記念事業会『京都大学農学部創立四十周年記念 歴史を語る』京都大学農学部創立四十周年記念事業会、1964年、pp.112-113
- (94) 前掲『京都大学百年史』総説編、p1026
- (95) 同上、p456。薬学科の研究室は一部疎開したという(『京都大学百年史』部局史編一、p967)

## 資料紹介

# 西田直二郎日記（１）

入山洋子 †

### はじめに

西田直二郎は大正から昭和初期にかけて活躍した歴史家である。哲学、考古学、人類学、民俗学等、歴史学の周辺学問にも多大な関心を持ち、当代の学者や文化人、郷土史家などとの豊かな交流を通じ、歴史上に展開された人間社会のあり方を問い続けた文化史学者である。西田の学問や人となりについて、幾許かの研究蓄積があるが、いまその日記を読むことで、その生きざま、研究生活が生き生きと蘇ってくる。

内田銀蔵をはじめとする京都帝国大学草創期の教授陣に鍛えられ、学部学科を超えた学友らと、時には菓子を食べながら夜遅くまで議論し、研究者としての実績を積んでいった西田のもとには、大正の末から昭和初期にかけて、その新しい学問に惹きつけられて多くの学生が集まった。京都帝大での授業や学務のほか、龍谷大学、大阪女子専門学校などでも講義し、傍ら卒業生の就職や学内人事に労を執る。当代有数の史学者の地位を確立した西田の影響力は学内にとどまらず、戦争遂行の国策に則って最大限に引き出された。

敗戦後、教職不適格の指定を受け京都帝大を追われた西田は、指定解除を待ち望みながら、在野での定期的な講義・講演活動や子弟との研究会に忙しく過ごし、戦後の食糧難を生き抜いた。一方で、

西日本かるた連盟理事長<sup>(1)</sup>として小倉百人一首に傾倒する姿も詳細に記録される。

西田の学問の評価としては、1970年代までの研究が現在でもほぼ定説となっている。個別の歴史的事実にこだわらず時代全体の普遍的精神を明らかにしようとした点において、史学史上重要な位置を占める、と高く評価される一方で、理論自体に皇国史観に陥る可能性をはらんでいた、とされる<sup>(2)</sup>。2000年代に入ると、より広い視点から西田を再評価しようとする動きが出てきた。門下生への影響力の大きさが指摘され、民俗学への関心、史蹟・郷土史の取り組みといった方面での研究が進んだ<sup>(3)</sup>。佛教大学宗教文化ミュージアム所蔵の「西田直二郎旧蔵資料」を分析した斉藤利彦氏は、1920～22年のヨーロッパ留学中の生活や心情、留学の成果などの検討によって、生身の西田像を浮かび上がらせた<sup>(4)</sup>。斉藤氏紹介に係る資料は、本資料と相互補完的なものである。

戦争の時代、東京帝国大学の平泉澄に比べると、西田が社会一般に与えた影響力は地味であったが、こと文部省への影響力という点では多大なものがあつたとされる。ただその実態については長らく明らかにされてこなかった。天皇制ファシズムの理論的唱道者を分析した宮地正人氏は、「ファシズム期における西田直二郎文化史学の具体的な展

† 名古屋大学博物館 技術補佐員

開過程」を明らかにすることが「歴史学としては最も重要な課題」と認識しつつ十分資料が得られなかったため考察し得なかったという<sup>(5)</sup>。しかし近年、国史編纂事業への関与、日本諸学振興委員会での中心的な役回りなど、少しずつ、この時期の西田の具体的な活動が明らかにされてきている<sup>(6)</sup>。

一方で、戦後の西田の活動についてはほとんど注目されていないのが現状である<sup>(7)</sup>。

本稿は、京都大学大学文書館が所蔵する西田直二郎の日記のうち、一部の年を抽出して翻刻するものである。抽出した年の日記については、抄本ではなくほぼ全てを翻刻し、省略箇所はその都度補註した。

残された日記は、「学生ダイアリー」「博文館当用日記」など専用の日記帳1冊に1年分が記される。内容は、心情の吐露、読書・調査・執筆の記録、京都帝大および他大学等での授業の準備とその内容の記録、研究室・大学内の事情、来宅・訪問などの交友関係、公的職務の記録、と研究生活全般にわたる記録となっている。家庭・親族関係の記載は比較的少ない。年によって記述の量にムラがあり、数日しか記載のない年もあれば、ほぼ毎日書いている年もある。

今回は1911(明治44)、1912(明治45・大正元)、1913(大正2)、1915(大正4)、1919(大正8)年の5年分を紹介する。1886(明治19)12月生まれの直二郎、数えて26歳から34歳までの記録である。以下年を追って内容を簡単に解説する。

## 副手時代の日記

1910年夏に京都帝大文科大学史学科を首席で卒業した西田は、大学院入学と同時に文科大学副手となる。最初の日記は26歳、副手となって半年後のものである。

この年(1911年)の日記は心情を吐き出した記述が多く、後年はこうした記述が少なくなるだけ

に興味深い。大学院に入ると「文化史の研究を一生の業にせうと志した」<sup>(8)</sup>と回想するように、この時すでに研究の方向性を固めていたが、日記には将来への不安や大量の雑務に打ちひしがれながらも、恩師の気遣いを力に自ら奮い立たせ自戒し、教授就任への強い思いを胸に学問に打ち込もうとする青年の心情が活写される。同期の江馬務が西田を「謹直の人」<sup>(9)</sup>と評したが、日記からもまさにそうした人柄を窺い知ることができる。なお、京都帝大の副手規程<sup>(10)</sup>によれば副手は原則無給であるが、多少の報酬を受けていたことが分かる。

翌1912年1月には、京都府皇典講究分所(京都市上京区。神職者養成の私立学校)で神道史・文学史の講義を持ち、秋には大阪高等商業学校(大阪市立)でも教鞭を振るうなど、教員としての生活をスタートしている。

三浦周行が主宰する国史研究室有志の研究会—読史会—の初期の様子は、既に記録が掘り起こされ関係者の回想で語られる。たとえば『読史会二十周年史』(読史会1930.11)には、この年2月16日に三浦宅で記録文章購読の例会が開かれたことが記されているが、日記によると、この日は西田の播州旅行の報告と、栗野秀穂の報告があったことが明らかになる(1912.2.14)。11月には月末開催予定の大会のテーマや会主催の旅行について三浦から相談を受け、西田が実務を担当するなど、同会初期の姿をより立体的に復元することができる。10月11日に「報告第一回ノ上提出」とあるのは、この年の大会の西田報告「京都の心学」に関係するものであろうか。この報告原案は三浦の容れるところとならず、「史学研究ノ法見タヤウナモノ也。国史ト云フハ如何ト思フ故、記録ノ研究ヲ出スベシ」と根底から否定された。「記録」というのは古記録、古文書ということであろう。

内田銀蔵の感化を受け、早くから歴史理論や方法論に関心を寄せていた西田であるが、その後も、「記録研究のことにつき狩<sup>〔狩野〕</sup>の部長より云はる」

（1919.9.30）、「教授会に出で、記録研究のこと説明スル」（1919.10.1）と、大学からは「記録の研究」が求められた。

私生活では、西洋史の津田和一や東洋史の荻山秀雄、理工科大学の小松茂や富永収蔵ら友人と語り、下宿する百万遍知恩寺の塔頭「慶運院」で「牛肉会」を開き（1912.3.16他）、はたまた謡曲の手ほどきを受けるなど（1912.11.12、12.4）、学友と親交を深める様子が記録される。

学友とは、もちろん研究活動においても刺激しあう関係であった。国史専攻の2年後輩にあたる牧野信之助は、卒業後師範学校の職を得て金沢在住であったが、牧野より送付された能登総持寺の世界図が読史会例会での報告に繋がった（1912.12.20、1913.1.27、1.30）。また同じころ“岩橋君の頼み”で上田秋成木像を撮影したり、文科大学講師の富岡謙蔵宅を訪問したりしている。天王寺中学校時代からの親友である岩橋小弥太は、この頃東京の国書刊行会で『上田秋成全集』の編纂に従事していた<sup>(11)</sup>。全集に収録する秋成の「背振翁物語」（茶神物語）や富岡所蔵の秋成肖像画に関し、西田に依頼したものであろう（1912.11.10、1913.1.16、2.2）。

1913年2月には三浦に命じられ東京に史料調査に出掛ける。数日かけて内閣文庫、東京帝国大学史料編纂掛、同国史研究室、近衛家などを訪ね、大乘院日記・兵範記などの調査を行った（1913.1.27、2.3～2.17）。出張中に東京帝大の研究者たちの面識を得ている。平安時代末期の兵部卿平信範の日記「兵範記」は、その自筆本半数が京都帝大の所蔵であったが、残りの半数を、所蔵しているはずの東京近衛邸で搜索することが、出張の一つの目的であった。しかしこの時は見つかることができず、後日、二条城内の近衛家文庫の中から発見される<sup>(12)</sup>。日記中、この年9月末からの「二条城」との記載は、この兵範記の調査と考

えられる。

このころ、兵範記の他に満済准后日記の解説、平安末の京都の研究などにいそしみ、順調に研究生活を送っていることが分かる。研究成果は、文科大学三科共通の学会「京都文学会」の機関誌『芸文』や、史学科による「史学研究会」の機関誌『史林』などに掲載され、満済准后日記は『京都帝国大学文科大学叢書4』（全3巻、1918～1920）として刊行された。一方、児島高德の論考（1913.4）のように、発表には至らなかったものもある。

1915年3月には、初めての単行書となる『修学旅行 京都史蹟案内』（京都帝国大学学友会1915）の原稿に、共著者魚澄惣五郎の助けを得つつ、専念する様子が記録される。後年の回想で、この著作によって「京都市内外の史蹟調査にいたく心を惹かれた」<sup>(13)</sup> というように、この書は西田のライフワークとなった史蹟調査研究の原点である。

1920年からの留学経験は、西田が人類学や民俗学を歴史学研究に取り入れるターニングポイントとなったが<sup>(14)</sup>、人類学雑誌購入の話やオーストラリア原住民の調査（1915.3.16）に見られるように、留学以前はかなり早い時期に人類学への関心を持っていることが分かる。

## 講師、助教授時代の日記

1915年9月に大学院を修了、京都帝大文科大學講師となり、「日本文化史」の講義を担当する。18年には梅原末治らとともに京都府史蹟勝地調査会委員の囑託を受ける。1919年（西田34歳）1月13日の日記は、その報告書<sup>(15)</sup>に収録されることとなる紀伊郡納所村の「唐人雁木」に関連して、渡辺家所蔵史料が朝鮮通信使の応接役を務めた淀藩士渡辺蟻洲（善右衛門）自身の手になるものと判明したことを記す。これにより、宇治川旧路沿いに遺る「唐人雁木」と称される石階段の由来を明らかにし得たのであり、文献史料によって遺構

の来歴を裏付ける貴重な成果に繋がった。

1月末からは、「国民教化講座」や「史蹟踏査」の準備をしている様子が窺える（1919.1.28、2.22、3.1他）。これは、栗野秀穂の発案で1917年に発足した史学地理学同好会の企画になるものである。第一回目の講座は3月1日午後6時から寺町通四条下ル大雲院地内の高等家政女学校で開催され、西田や中村直勝、魚澄惣五郎、植村清之助ら若手研究者が講師を務めた（1919.3.1）<sup>(16)</sup>。その後も継続して開催している（1919.3.29、6.23）。「権威ある専門的研究が一般社会の知識の向上に資す」<sup>(17)</sup>ことを目指した史学者たちの活動の一環である。

私生活では、19年2月に大西祝（東京専門学校教授、哲学者）の長女道と結婚し、南禅寺北ノ坊町に新居を構える。新妻のこと、結婚のことに関しては淡々とした記述である。親しい友人にも事後報告であった。結婚前後の一灯園主宰者西田天香との交流（1919.2.11、2.18、3.8、10.5）は、一灯園と大西家とのつながりからであろうか。

6月に助教授に任じられるが、日記に関連する記載はない。翌月20日の恩師内田銀蔵の急逝に際しても特に記載はないが、『芸文』に寄せた追悼文で、過去の自分の日記（おそらく副手時代の）を読み返し「（内田から）訓戒をうけて涙こぼるゝばかりに」書き留めた箇所を見ては新たな涙を誘われた、と哀悼の念を記している<sup>(18)</sup>。

## 読書記録

折々に記される古典籍や文献の読書記録、寺院・旧家の調査記録なども興味深い事柄である。

1911年から12年にかけては、内田銀蔵より貸与され、以後の研究生活を方向付けた<sup>(19)</sup>コンドルセ *Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain* を読み進めている。桑木厳翼の『哲学綱要』（1913.4.20）や「オックスフォードノ社会法制史」（1913.4.25）など、洋の東西を問わず最新の研究の確認も怠らない。“オックスフォー

ドの社会法制史”は、同大学教授の法制史家ポール・ヴィノグラドフが1908年より主宰した叢書 *Oxford studies in social and legal history* であろう。叢書全9巻のうち、この時までには3巻刊行されている。「ブッヘルノ原始人民ノ経済状態」（1919.9.8）は、Karl Bücher, *Die Entstehung der Volkswirtschaft*（1893）と思われる。本庄栄治郎の論文「ビュッヘルノ経済段階説に就いて」（『経済論叢』8-6、1919.6）に触発されて紐解いたのであろうか。

以上、簡単な解説を試みた。内容の詳細な分析については、残りの日記の翻刻とともに今後の課題としておきたい。

本稿は限定的な紹介にすぎないが、はじめに述べた西田個人史研究においても、また近代の史学者・知識人の有り様を問う上でも、資するところの大きい史料の一端を垣間見ることができるであろう。

※本稿は、2016～2018年度同志社大学人文科学研究第10研究および、2019～2021年度同第9研究「歴史学の成り立ちをめぐる基礎的研究—現場と公共性—」の成果の一部である。解説にあたり、同研究班のメンバーをはじめ多くの方々のお力添えをいただきました。誠にありがとうございました。史料閲覧をご快諾いただいた京都大学大学文書館には大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

## 凡例

翻刻の基準は下記の通りである。

- ・日記帳に印字された「予記」欄および本文罫線から意図的にはみ出した記載については【 】で括った。「発信」「受信」欄の記載はそれぞれ【発信】【受信】とした。
- ・〔 〕内は翻刻者による註である。
- ・人物については、学会報告や肩書き等から判明

- した人名、および交友関係・前後の文脈から推測しうる人名を、原則として初出個所に補註した。
- ・旧字・異体字は正字に直した。固有名詞についてはこの限りでない。
- ・適宜句読点を付け、改行を詰めた。
- ・判読不明の文字は字数分を□で表し、字数が確定できない場合は〔 〕とした。
- ・アルファベットの不明文字は、大文字を＊、小文字を＊とした。
- ・原文中の欠字は該当個所に〈 〉を記載した。
- ・抹消部分は文脈上必要なもののみ翻刻した。
- ・朱筆は冒頭と末尾に補註を付したが、短文は冒頭のみ補註し「 」で括った。

## 註

- (1) 競技かるた百年史編纂委員会『競技かるた百年史』2008、109頁。
- (2) 史学史上の西田史学の意義については早くから論じられるが、ここでは永原慶二『永原慶二著作選集』9吉川弘文館2008（初出は永原『20世紀日本の歴史学』吉川弘文館2003）をあげておく。西田の生涯を通じた研究としては、柴田実「西田直二郎」（日本民俗文化大系10『西田直二郎・西村真次』講談社1978）がある。
- (3) 蘇理剛志「京都帝国大学民俗学会について―関西民俗学の黎明―」（『京都民俗』19、2001）、菊地暁「京大史の「民俗学」時代」（丸山宏他編『近代京都研究』思文閣2008）、入山洋子「『京都市史』編纂と歴史学」（小林丈広編著『京都における歴史学の誕生』ミネルヴァ書房2014）など。
- (4) 齊藤利彦「西田直二郎とヨーロッパ留学」（『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』5、2008）。
- (5) 宮地正人「天皇制ファシズムとそのイデオログたち」（『季刊科学と思想』76、1990.4）。
- (6) 長谷川亮一「『皇国史観』という問題―十五年戦争期における文部省の修史事業と思想統制政策』白澤社2008、駒込武他編『戦時下学問の統制と動員 日本諸学振興委員会の研究』東京大学出版会2011。
- (7) 前掲註（3）拙稿では、1948年まで続いた「京都市史」編纂事業への西田の関わりを略述した。
- (8) 西田直二郎「感想」（『読史会二十周年史』読史会1930）。
- (9) 江馬務「感想」（同上）。
- (10) 1909年12月達示。『京都大学百年史 資料編1』1999、331頁。
- (11) 『上田秋成全集 第一』国書刊行会1917、緒言。
- (12) 西田直二郎「兵範記に就いて」（『史林』1-3、1916.7）。
- (13) 西田直二郎『京都史蹟の研究』吉川弘文館1961、序2頁。
- (14) 前掲註（4）齊藤論文。
- (15) 京都府『京都府史蹟勝地調査会報告』第1冊1919。
- (16) 史学地理学同致会『歴史と地理』3-3、1919.3。
- (17) 「昨年の史学地理学界」西田執筆部分（『史林』3-1、1918.1）。
- (18) 西田直二郎「内田先生」（『芸文』10-10、1919.10）。
- (19) 西田直二郎『日本文化史序説』改造社1932、はしがき。

## 〔資料〕

明治四十四年当用日記（東京博文館発行）

一月一日 日曜

~~〔――〕年なり哉。~~

~~瑞雲のたなひくところに佳祥しきりに湧けり。~~

~~嗚呼過去一年を顧んか吾人は万夫の高みより千仞の巨谷に墜落せるの〔――〕七月□□六月、〔――〕。我半生の志望ハ惨々に破かれ血涙流れ□□□さるもの也。彼の我ノ才の足らざる〔――〕。~~

一月二日 月曜

時の利あらさるか、過古三年孜々としてはけみ屹々として務むるもの、遂に何等の最後の奮戦に助く

るものなく平々凡々の裏に予は大学ヲ出てたる也。  
失望、落胆、之れ余か大学の生活の最末に得たる  
唯一のもの最大のものたり。

一月三日 火曜 ～ 一月十六日 月曜  
〔全体に×印〕

一月十七日 火曜  
〔×印〕  
〔bewerkstelligtカ〕  
bewirkstelligt

一月十八日 水曜 ～ 二月一日 水曜  
〔全体に×印〕

二月二日 木曜〔文字にかかる形で全体に×印〕  
午後。夜精神疲労甚しくして読書に堪へず。何と  
なしに憤しくなり悲観す。

二月三日 金曜〔全体に×印〕

二月四日 土曜〔全体に斜線〕

二月五日 日曜  
過古は過去。  
寒し。午後散歩シ頭痛気味あり。風邪。

二月六日 月曜  
人行揚々坦途上、我在喘々峻道下。  
下鳥羽大沢、古文書。

二月七日 火曜  
戦へ戦へ。  
失望と落胆ヲ以テ首途ノ第一歩に得たるものは幸  
福なり。

三月六日 月曜  
〔和一〕 〔貞雄〕  
雨。津田・清原君来。

三月七日 火曜  
津田君柏原ニ行く談アリ。夜、津田君宅ニ行ク。

三月九日 木曜  
夜宿ニ居ル。

三月十日 金曜  
夜津田君宅ニ行く。寺嶋君。

三月十一日 土曜  
午後<sup>〔勝郎〕</sup>原先生を訪ふ。津田君のことにつきて也。  
夜、清原君来る。集会所に行き山本信吉君と共に  
菓子を食べ、出て、清原君宿にて雑談。帰ルトキ  
火事アリ。読書セズ。

三月十二日 日曜  
快晴。午前七時半起床。日曜にかく起きたるハ珍し。  
一時間半読書。  
午後テニスヲナサントスルトキ津田君来ル。<sup>〔勝藏〕</sup>桑原  
教授のことにつき心配する故、三時過桑原教授ヲ  
訪フ。津田君宅ニ行き、夕食を饗せられ、其後京  
極に行く。  
(本日大阪ニ飛行機ノ会アリ)。

三月十三日 月曜  
午後<sup>〔文三郎〕</sup>松本学長より大阪高商へ行カズヤト問ハル。  
夜松本教授を訪ヒ其話ヲ聞ク。九時前帰り。  
読書。  
久シク津田君ノコトニ関シテ読書ニ耽ル暇ナカリ  
キ。今ハヤーヤク落付カントス。

四月二十九日 土曜 晴 此頃寒ムシ  
<sup>〔那珂次郎〕</sup>名越君に手紙ヲ出ス。夕転宿。モトノ慶運院ニ  
カヘル。茶話会ヲ開ク。津田君宿へ行き宮津中学  
に赴任ノコトヲ奨ム。清原君同行。

四月三十日 日曜 曇少雨 寒

史学研究会アリシモ行カズ。

フレデリック大王ニツキ（中村善太郎）

儒仏道葛藤研究資料（高瀬武次郎）

テニスヲナス。夜、奴婢ノ研究。高楠氏手控ヲ見ル。

五月一日 月曜

〔Alteカ〕 〔Mutterカ〕

Alt\* \* \*\*\*\*, \* \*\*\*\* geld\*,

五月二十八日 日曜

近来動揺して静平たる事を得ず。

六月二十九日 木曜

最も惨酷なるものは静平を奪へるもの也。

吾人は過古をあきらめん。過去は過去たれ。過去は最早思はず、吾人に只僅に静平なる現在を与へよ。未来は暗々たる濃霧深煙に掩はれて固より見るわかず。

六月三十日 金曜

六月卅日ヲ送る。

此日記帳ヲ買ひテヨリ本日にて已に半年なり。既往の日次ヲ顧ミテ其如何に蕪雜荒涼タルカヲ見る。精神の動揺は悲しき悲しき波の如くうちかへし――して我頭脳を擾せり。此六月の日次ヲ顧ミテ其記事の存するものにして其の記事の内容を見よ。迫まれる生活と、之れに伴ふ<sup>□</sup>苦しき思想の哀愁の感<sup>□</sup>は吾人を弄ひて如何になさんとするか。吾人をしてせめて静に考ふる事を許さしめよ。吾人をしてミネルバ神の裡に眠る小児の如くあらしめよ。

七月二日 日曜

一、質素たれ、而も品格を墮す勿れ。礼義を乱るべからず。

一、確固たる信念を有し濫に迎合主義に走るべからず。常に自ら信ぜよ。

一、必しも成功せざるもよし、堂々としてやるべし。

七月九日 日曜

文明意義次稿ヲカク。夜遅くまでおき居たり。

寝<sup>〔にカ〕</sup>□つきたるは午前の三時半なり。

七月十日 月曜

文明の意義の続稿書了、午前十時半。

八月一日 火曜

偶感

一、報酬は少なきを以て幸福とす。用事をさほどせざるもよろしき故也。吾人は從來あまりにやり過したる也。よき加減にすべし。グズ――そのすじへ其の時云へ。去年は多少の事情の存するものあるか故にさほど勉強も出来ず、仕やうと思はず、故にどーてもよかりしも本年は小生も少しく勉学もしたし。故にさう――少報酬にてハ用事も出来ませぬと断然云へ、気に入らなければよすばかり也。

八月二日 水曜

一、なるべく研究して発表すべし。今の内ならば少々まづくてもかまはず。又何かをやらうとするならば憂さもはれるべし。

一、書籍は雑誌以外のものは一切かはず、書物の入るやうな研究ハせざるもよし、と云ふ積りにてやるべし。書物など言ふものは贅沢に学問する奴の飾りなり。一種の室内装飾也。乃至悪く云へば不勉強家か勉強家らしく見せる武器也。なるべく書物は買はざるやうにすべし。

一、見識を有すべし。何かにつけて識見を有すべし。平凡にして何等識見のとるべきなき人間はだめ也。

八月三日 木曜

一、形式にとらはれざるやうすべし。教師に対し<sup>〔ママ〕</sup>てても然り。

九月一日 金曜

儉に安ぜよ。時期を待つべし。あせるべからず。  
人の成功に気を奪はるべからず。悲観ハ大になす  
べし。而も其間に一介の乱れざるものを有せざる  
〔ママ〕  
かべらず。

九月十一日 月曜

十一月 五 四 10  
十月 三 七 12  
九月 三 四 7

九月二十五日 月曜

大学教授たるべし。  
大学教授たるべし。  
然らずんバ死すべし。  
〔折カ〕  
百 倒 不撓。  
他業に転ずべからず。  
一歩又一歩進ムべし。  
銀時計何モノゾ。  
負くるな――。  
勉強すべし――。

十月四日 木曜

朝、／  
夕、コンドルセー。  
本日ヨリ朝夕語学課定ヲヲク。(1) 夕ハ就眠前  
一時間。(2) 七時半ヨリ三十分、但シ学校ニ於  
テ三十分。朝ナシ得サルトキハ夜課学前三十分。

十月六日 金曜

午後四時ヨリ大阪ニかへる。

十月七日 土曜

在阪。遠忌。

十月八日 日曜

在阪。

十月九日 月曜

在阪。

十月十日 火曜

午前九時出発、上洛、十一時半帰着。皇典講究所  
試験。  
数日ノ帰宅ハ心神愉快トナリ、今後勉強出来ルヤ  
ウニ頭ガ清クナレリ。天気ヨク近来冷氣増シテ書  
ニ親シムベキ。

十月十一日 水曜

好節トナリタル故ナリ。  
【買物 名刺、罫紙、不磨墨】

十月十二日 木曜

一時間、コンドルセー。

十月十三 金曜

〔重雄〕  
末廣博士ノ伊土戦争観〔『京都教育』233号、1911〕。夜、  
江記読了、宇多天皇御記読了。  
【受信 清原君】

十月十四日 土曜

午前ハ満済〔満済准后日記〕。午後二時半ヨリ一条浄  
福寺マデユク。回顧料及少年会記念品ヲ持行ク。  
山塊記 六、コンドルセー 三十分。

十月十五日 日曜

午後、帝室博物館ニ行ク。東寺ニ行カントシタレ  
ドモ時間ナクテ止メタリ。

十月十七日 火曜

史蹟踏査会相談会、午後ヨリ開ク。六時頃まで相談。  
〔元次郎〕〔秀雄〕  
川島・粟野二君常任幹事。  
大学院も本学年を以て終りとす。

十月十八日 水曜

<sup>〔銀蔵〕</sup>内田教授ヨリ兵範記ノコト云ハル。夜、<sup>〔与市〕</sup>市村君来。

礼ヲ持ち来ル、辞之。十一時半過ニ床。

十月十九日 木曜

京極散歩。本日ハ参講にて賑也。神道史原稿ヲ書ク。

十二時臥床。

〔「京都駅発汽車時刻表」一枚挟み込み一省略〕

十一月六日 月曜

<sup>〔周行〕</sup>三浦先生預金

10. 95. 259

立かへ . 08. 三雲ヨリ水口マデ馬車賃  
    . 15. 五日昼食代 牧の氏立かへ  
    1. 00 宿代  
    1. 23

決算 . 60 停車場マデ車代  
    1. 10 水口マデ汽車賃  
    . 15 四日昼ベントー  
    1. 85

〔計算メモ一省略〕

十二月二十一日 木曜

本日学校帰ル時、内田先生より色々と問ハレタリ。  
先生ノ懇切ナル、涙コボル、バカリ也。

懇切ナル言葉ニホダサレテ女々シキ言葉ヲ吐クベカラズ。男子須ラク堂々タルベシ。研究室ノ用事ノ多ナルコトヲ<sup>〔Klagen〕</sup>クラゲンスベカラズ。男の腸ヲ見ラル、ワザ也。先生モ用事多キコトヲ氣ツカレタルハ大ニヨシ。言フベクバ、なほうき事のつもれかし。我心をためさんト云フ主義ニテヤルベシ。用事ガアラバドン―御言ヒ下サイ。自分ハ兎ニ角力カギリヤリマスガ、出来ナイトコロガアルナ

ラバ大ニ鞭撻シ下サイ。要スルニ世ノ中ハソー朝ヨリ吞〔22日に続く〕

十二月二十二日 金曜

〔21日より続き〕氣ニ學問ガ出来ルト云フトコロハ天下何処モナカルベシ。カクノ如キ苦シキ境遇ニ居テ先メテ學問ノ樂ヲ知り得ル也。吾等ハ実自分ノ為メト思ヒナガラ書ヲ贖ヒ思ヲ凝ス時間ナルモノハ、殆ンド数フルニ足ラサルバカリ也。而シ其レハ尚甘露ノ一滴万解の砂糖水ヨリモ甘美ナルト同シク、之レニ会ハバ凡テノ憂モ忘レハテ、天上ニ遊ビテ天の妙樂ヲ聴ク如シ。実ニ我ガ靈ノ往クミネルバノ宮居コソハコレ也。

一方、又予ハ年モ若クシテ成ルベク苦辛ヲ積ムルコト、樂ヲ尽クスニマシテ幸福也。閑ヲ得ルナラバ其レハ現今アルヨリモ多クノ勉強〔23日に続く〕

十二月二十三日 土曜

〔22日より続き〕是レニ伴ヒテ多少ノ成績ヲ上グルコトヲ得タルナルベシ。之れ確ニ快心ノ事業タリ。而シナガラ又顧ミテ例<sup>〔既〕</sup>令學問ハ幾分遅ル、ト雖、是の障リ多キ間ニヨク刻苦~~レズ~~ヨク忍ビ悲ミテ素レザル修養ヲ得ルナラバ、尚一層幸福ナラント存ズ。ノラ、人形ノ家ニアル言ヒブリデハナイガ。<sup>〔ママ〕</sup>人間~~〇〇~~人ノ妻トナル前ニ女ニナラネバナラヌ。否、學者ニナル前ニ先ヅ人ニナラネバナラスト思フ。

今後一層、之レヨリモ閑ヲ得ルナラバ此ノ精神其マ、ニ進ムナラバ大ニ事ヲナスコトガ出来ヤウ。尚一層モアン moan ノ場合ニハ之ノ連続トシテヨリ難艱ニ忍ブルコトガ出来ヤウ。

十二月二十四日 日曜

人生一面ニ於テハ悟ヲ有セナクテハナラヌ。一面ニハ攻撃的精神ヲ有セネバナラヌ。煩悶々々、古キ言ヒクサナレドモ煩悶ハ青年ガ有スル權利デアル。同時ニ又義務デアル。吾人ハ煩悶ヲ有シ大ニ

有ス。之レヲ有シツ、而モ糺乱セズ自ラ務メ自ラ  
慮ツテヨク人格の完成ヲ期セネバナラス。毅然タ  
ル人格の人ハ、之レヲ有スルコトナクシテハ遂ニ  
ナリ得ヌ。

十二月二十七日 水曜

午前中。

午後、午飯早々<sup>(耕作)</sup>浜田講師方ニ訪問。栗野方。菓子  
ヲ買フコト。

持ち帰ルモノ 歴史地理 第〈 〉、播磨鑑、播磨  
古城誌、社会学ノート、ランプレヒト英訳、神田  
本 太平記。

明治四十四年当用日記補遺

郵便貯金

記号番号 京ほ〇四六八九

受持貯金局名 大阪郵便貯金支局

四壺年十月廿九日

重曹 二四.  
(ゲンチアナ)  
ケンチヤラ末 五.  
(ジヤスターゼ)  
消化シヤスターゼ 三.  
(龍)  
番木別 〇. 八  
一服 1/30

下り バスミット . 五

秘 マリヨンヤ ウスタ . 五

金銭出納録

万年筆 二. 五〔2円50銭、以下同様〕

ラケット 二

蘭語 二. 五

手帳

明治四十四年三月収支一覧表

支出

暗室ランプ等 75〔75銭、以下同様〕

水洗皿 25

印画枠 25

印形 12

万年筆

ラ

明治四十四年十二月収支一覧表

収入

20 20〔20円、以下同様〕

20 20

14 14

2.5

〔朱筆〕〔5〕

565

〔朱筆〕〔5〕

〔朱筆〕〔615〕

支出

靴 5〔5円、以下同様〕

外套 30

返済 5

〔以下朱筆〕

書物 5.5

宿 6.0

食 8.5

〔以上朱筆〕

住所人名録

福井県遠敷郡口名田尋・高小学校 坂井慶三

上島羽字出在家 吉村洪一

伊セ山田市一志久保町

第七尋常小学校西側新屋敷内 清原貞雄

北海道小樽区堺町畑五 端良一方 寺田貞次

新町頭字岩栖院町 後藤方 大山友一

明治四十五年当用日記（東京博文館発行）

〔見返し〕

Es entfalt !!!

N.Nishida 1912!

Es Entfalt

Es Entfalt

entfalt!

滞り腐れる水はみるもうし

流れ――てきよき水よし

一月一日 月曜

明治四十五年は来れり。予は二十七歳となれり。  
本年は吾人に何を持ち来らんとするか。此日記  
三百六十幾頁の最後の頁は吾人は如何なる感想を  
以て筆を下すか。是の一年、是の一年は吾人の生  
涯に於て忘るへからざる一年となるべしと信ず。  
吾人は今や二十有七の歳を迎へたるなり。是の一  
年にして為すなくして終るならば吾人寧ろ愧死す  
べし。

一月十三日 土曜

風寒くして天晴れたり。今日午後六時家を出て、  
京洛に向ふ。京坂電車も無為にして京都につけば  
寒風凜烈時々白雪を交へたり。而も何となく愉快  
にして五条橋より北に行く小さき電車の一隅に身  
をよせれば元氣心の奥に湧き出て、<sup>〔ママ〕</sup>本年は努力す  
べし、必ず何物かを持ち来さざるべからずと思へ  
ば身も軽<sup>〔ママ〕</sup>らかにして今出川より電車を下りて宿  
に着く。

堺君・木村君と菓子を食べひて暫く話す。

【受信 年賀状来レルモノアリ（京都）。清原君・  
岩井武俊君・中村健一郎先生〔第八高等学校教授・元  
三高教授〕】

一月十四日 日曜

勝手かわりし故か室の暗かりし故か九時過に眼を  
さます。仕方なければとて床の中にて時を待つ。

十一時より湯に行く。<sup>〔茂〕</sup>小松君と共に。

昼食後小松君の室にて山本信吉君と共に話す。  
<sup>〔六八〕</sup>西依理学士来る。後理科助手来る。辞して我が室  
に帰り四時十分日尚あれば坂口<sup>〔昂〕</sup>先生を訪問せんと  
す。先め聖護院裏手の家を訪ひしも転宅につき新  
榎木町丸太町下ルところを訪ふ。先生は普請の大  
工の管<sup>〔ママ〕</sup>督をしてゐらる。日くれ六時過頃まで話す。  
家にかへり室を片附く。

一月十五日 月曜

学校に行く。本日河合弘民先生、朝鮮經濟史講義  
始ル。社会学ノ講義ヲキク。

一月十六日 火曜 良 雪アリ

大阪大火。号外切りなり。第三号外に生玉神社焼け、  
<sup>〔生国魂〕</sup>火は東北ニ走り又地藏坂方面ニ向ふと云ふ。兵士  
ヲ派して上本町東部を警戒し、火は熄まずと云ふ  
を見、稍心配しだす。時事新報夕刊を買はんとし  
て雪ふる中を京極マデ行ク。夕刊売ルモノナシ。  
三条ニ回り朝日ノ号外ヲ見、火鎮ルヲ見テ安堵。  
かへり来り、文学史ノ原稿ヲツクル。十二時過臥床。

一月十七日 水曜

昨日大火焼失家屋五千三百と号ス。

本日文学史講義アルベキノトコロ電話ニテ休ンテ  
クレト云フテキタ。

夜、小松君と共に湯屋ノカヘリニ津田君の宿ニ行ク。  
十一時マデ話ス。谷本教授が岡山孤兒院ノ慈善演  
劇ノ入場券ヲ十枚ハカリ封入シテ各教授ニ送ツタ。  
其仕ウチヲ<sup>〔いざぎよし〕</sup>屑 トセヌトテ大築千里教授ハ使ヲ  
以テ之レヲ返サシム。<sup>〔富〕</sup>大幸教授ハ紙屑籠ニ捨テ込ム。  
<sup>〔勇吉〕</sup>久原学長ハ書留郵便ヲ以テ送カヘス。<sup>〔朝弦〕</sup>中沢高工校  
長ハ三錢印紙封入シテ表記ニハ印紙ヲハラス罰金  
ヲ出サスヤウニシテ先方ニ発送ス。四者ノ各性格  
ヲ表ハスカ。

東大鶴田賢次教授免職理由等ヲモシロシ。鶴田教  
授ハ「三四郎」の中ニアル二ノ宮先生也ト云フ。

一月十八日 木曜

皇典講究所始業式。<sup>〔真浦〕</sup>大貫宮司ノ古事記酒宴<sup>ホカヒ</sup>ノ項ノ評釈アリ。武内宿祢ヲ日本三大忠臣（楠公、清麿、平重盛）ニ加ヘテ四忠臣ト云ハントス。三浦博士君臣一徳ト云フ話アリ。各国ハ皆ト<sup>〔tribe〕</sup>ライブガ併合シテ大トナル。我国天孫人民ハ他ノモノヲ同化シタ、外国ニハ革命等アリ、我国ニハナシ。  
夜、<sup>〔秀雄〕</sup>荻山君来リ。十時過マデ話ス。

一月十九日 金曜

午後皇典<sup>〔ママ〕</sup>研究所、神道。  
鎌倉時代、時代概況。平氏滅亡。源氏。頼朝ノ勤儉尚武。京都ノ荒廃、学校、学者、関東ニ行ク。承久ノ乱。関東、京都風ヲ入レ驕ルー貞永式目中ノ敬神思想。  
夜、山槐記ヲ読ム。巻七ヲ終リ巻八ニ及ブ。

一月二十日 土曜

午前九時前廿分起。学校、満濟。  
午後二時前カヘリ掃除。三時前頃ヨリ内田教授方ヘ借用書ヲ返却ニ行カントシタルニ、其書中ヘンにアムラインアリテ其レガ読ミタクナリ之レヲ読ム。「各時代及各人種の迷信」と云ふヲ読ム。  
夜同様。十二時過臥。精。

【学校ニテ一時間山槐記ヨムーナサズ。  
午後カヘリ三時迄コントロールセー読ム。  
三時内田教授訪問、書セキ返スーナサズ】  
【受信 名越君火事見舞。津田君借家断】

一月二十一日 日曜

午前八時半前起。少シ頭痛ム気味アリ。国民雑誌来ル。平清盛論ヲヨム。午后山槐記、夜同前。本日頭痛ノ気味モ覚シタルニ、十時過ヨリ又感ズ。少シ疲労の気味アレバ早く臥床、十時半。  
【発信 名越君御礼】

一月二十二日 月曜

<sup>〔Schirm〕</sup>シェールツ久シク紛失シタリシガ地理学研究室ニテ<sup>〔文太郎〕</sup>足立医科大学教授ノ借用セラレタルコトヲ知ル。

夜、慶運院ノ会ヲナス。是レ<sup>〔収蔵〕</sup>富永君〔理工科大学〕ガ神戸ヨリ帰リ来リシ故也。十時半終。室内掃除。眼鏡修繕。十二時過臥。今日帰宅後ハ読書セス。梅原末治君、川島君の紹介ヲ持ち来ル。予六時マデ朝鮮史ヲキキテイタ為メ会ハズ。

一月二十三日 火曜

七時起。七時五分梅原君来ル。歴史地理学会ニテ講演ヲシテクレト頼ム。播州行ナドアリ、且会ナド近日アルコト故忙シケレバ、来月ニ~~延シ~~テハ講演ヲセント云フテ帰ラス。七時半帰ル。保元ノ乱ノ地理デモ話サン。地理研究室ニテ<sup>〔貞次〕</sup>寺田君ニ会ヒ、梅原君ガ本日学校帰りニ君ノ家ニ行クト云フコトヲ云フテイタト云フタ。而シテ講演ヲシテヤツテ下サルヤウニ頼ム。寺田君ハ中バ承諾シソウナ様子テアツタ。先生ナドモ聞クノカトタツネテイタ。気懸リト見ヘル。寺田君ハ二十五日午前出宿ト云フ。  
【朝鮮史聴ク】

一月二十四日 水曜

皇典講究所ヘ文学史ヲ教ユ。

一月二十五日 木曜

本日何トナク悲シクナル。  
九時前<sup>〔ママ〕</sup>臥床、学校ニテ神道史ノ原稿ヲツクル。思フヤウニ行ケズ。カヘリテ夜在宅。児嶋誌上巻ヲ読ム。明日ノ神道史ノ原稿ヲツクラスニ寐ル。不快甚シ。故二十時半臥床。明日早起シテ愉快ナル気分ヲ得ント思フ。

一月二十六日 金曜

七時めざましを聞き八時十五分前ニ起ク。宿ヲ出スルハ矢張八時廿分程過也。学校ニテ神道史原稿ヲツクル。講究所ハ一時三十分ニ行ク。宿ヲ出スルトキハ一時十分前ナリ。厠ニユキナトシタル為

メ後レタルニテ今日以後モー少シ早ク行カント欲ス。二時間ノ授業ニ随分ツカル、コト也。

三浦教授宅ニテ読史会。

浜田講師ヨリ谷本教授宅ニ行カレタシト云ヒ来ル。

【受信 家ヨリ清華院□山ニツキ】

【<sup>（貞吉）</sup>喜田先生今日十二時前研究室ニ来ラル】

一月二十七日 土曜

【傘、靴下、手フクロ、地図、奉書】

二月八日 木曜

〔以下朱筆〕本日東寺行ク。百合文書い号ノ文書ヲ見ル。其他未整理ノモノ多ク見ル。

かヘリテ皇典講究所ノ原稿ヲカカントスレドモ百想乱レ来リテ筆トルニモノウシ。要スルニ本年度ヲ以テ是非此 <sup>（議カ）</sup>職 <sup>（ママ）</sup>ヲヤメントス。。〔以上朱筆〕

二月十日 土曜

十一時ヨリ芸文編輯会。

午後東寺ニ行ク。<sup>（牧野信之助）</sup>牧の君と共に。

午後五時ヨリ<sup>（天王寺中学校）</sup>天<sup>（券太郎）</sup>中<sup>（虎次郎）</sup>会。鈴木新校長ハ内藤先生と旧友ノ由ニテ、内藤先生ヨリ余ノ話ヲ聞キタル由、話シセラル。

二月十一日 日曜

けいうんゐんノ人タト石山ニ行ク。写真ヲトル。天気晴れて風も温かにして春の心地す。九時過に宿を出てたる事とて遅かりし故、石山につきたる時は一時半なりき。鯉汁に舌ツ、ミうちて二杯を吸ふ。八時かへる。

二月十三日 火曜

試験ス。

二月十四日 水曜

一時過マデ勉強ス。高德ノコト。之レハ明後日読史会上ニテ播州ニ旅行シタル報告ヲナス為メ也。

栗野君ガ神社ト古墳及び総論。余ハ高德及地理、結論。

コンドルセー序論ヲ読了。

二月二十二日 木曜

午後より勸修寺家ニユク。

夜二時マデ起キ、ランプレヒトノ近世史学〔Karl Lamprecht, *Moderne Geschichtswissenschaft*〕ヲ読ム。

【発信 勸修寺行】

【受信 名越君】

二月二十三日 金曜

午後五時帰り何ダカ草臥レテイルヤウテアルカラ床ヲノベテ仮寐ス。僅ノ間マドロムニ心地キハメテ良シ。十一時マデ勉強。明日ヨリ早く起キン為メニ早く寐ンコトヲ定ム。是れ本日昨夜ハ遅キ寐ネ、明本日遅く起キタルニ心地ハナハダ悪シカリシヲ以テ也。今夜ハ心地ヨク寐ルニ惜シケレド寐ネツ。

【受信 松本茂平君本催促。清原貞雄君転宅】

二月二十四日 土曜

午前八時ヨリ三浦先生宅ニ行キ、~~伴~~随ヒテ勸修寺家ニ行ク。

二月二十六日 月曜

午前九時牧野君と共に勸修寺へ行ク。

三月一日 金曜

大学ノ記念日也。陳列。

三月二日 土曜

学校ヲ休ミテ勉強ス。此ノ日山槐記ヲ大ニ読ム。

三月三日 日曜

午前ヨリ勉強。山槐記ヲ読ム。両日ニシテ四五六冊モ読ミタルニヨリ大ニ勢ツキテ読ミ出ス。

三月十日 日曜

【◎】

平安朝時代。絵画ヲ見ニ行ク。

【絵画。博物館】

三月十一日 月曜

<sup>〔清一〕</sup> 滝 先生ノ絵画史ニ出ル。月、火、木ノ夜六―八。

三月十二日 火曜

皇典講究所ニテ試験。神道史 一時間。

徳川時代ニ於ケル神道ノ諸派

平安朝ニ崇敬セラレタル神社ノ重ナルモノニツ  
キ簡単ニノベヨ

滝先生絵画史ニ出ル。

神道史、夜成績調査ス。

三月十三日 水曜

鳥兎<sup>〔効〕</sup> 早々、三月已ニ二十三日ナリ。以前日記カクコ  
トヲ怠ル。但シ勉強ハ大ニナシタリ。近来夜間ハ  
殆ンド勉強ス。

二年 一、諸院時代ニ於ケル勅撰集ト其歌風

二、方丈記、平家物語

文学史試験

一年 竹取物語

一、僧正遍照、紀長谷雄、小野篁

三月十四日 木曜

図表研究ノ時来ルモノ纔カニ一名ナリ <sup>〔四郎〕</sup> (山下君)。  
牧野君研究室ニアリケレバ牧野君モ行クコトナ  
ル。牧野君ハ本日ノ時間ハ休ム考ナリシナリ。

予、地理研究室ニ行キテ内田寛一君ヲ誘ヒテ図表  
研究ニ出ルヤウニスル。<sup>〔竹四郎〕</sup> 中野君トシバシ研究室ニ  
テ話ヲス。後、三浦教授ノ室ニテ満済准后ヲ校訂  
シツ、アルトキ、内田教授ハ学生ニ向ヒテ出席者  
少キコトヲ以テ若シカクノ如クンバ図表研究ヲ止  
メント云ハレテイルノガ聞ヘテイル。

三月十五日 金曜

昨本タヨリ、朝起会ニ加入ス。之ノ会ハ午前七時  
マデニ起クルヲ目的トシ、若シ過ゴサバ過料金五  
錢ヲ出ス規定ナリ。但シ予ト富永君ハ朝寐坊ナル故、  
特ニ標準ヲ寛クシテ午前八時トス。此会ニ入りタ  
ルコト故、遅レテハ恥カント思ヒシカバ、本日ハ  
本日午後ハ十二時ニ寐ネタレドモ翌日ハ午前六時  
半頃ニ目ヲ覚ス。又眠ニ落チテ七時半目ヲサマシ  
起ク。

三月十六日 土曜

本夕、慶運院ニテ牛肉会ヲ催ス。堺君・磁野君幹  
事ナリ。今北君・松山君来ラル。腹膨レテ本夜ハ  
安眠ヲ妨ゲラレ時々目ヲサマス。

三月十七日 日曜

午前七時半起。九時前家ヲ出テ雨ヲ冒シテ (但シ  
出ル時ハ止ミテアリ) 博物館ニ行キ、滝講師ノ説  
明ヲ聞ク。豊国神社ノ前ニ於テ下駄ノ花緒ヲ切ル。  
帰路<sup>〔友一〕</sup> 大山君及同君ノ友達ト三人ニテカヘリ来ル道  
ニテ直シ屋ニ鼻緒ヲ直サシム。津田君宅ニヨリ、  
又荻山君宿ニ行ク。荻君留守、雨ニ濡レツ、帰り  
来ル。

夜、山塊一冊 (但半冊)、勸修寺、採点。

五月十三日 月曜

長 五尺五〇

量 一三貫八〇〇

胸囲

常時 <sup>〔尺〕</sup> 二、五四

差 、二四

眼 15/F (-3.5 6/6)

1/F (-4.5 6/6)

五月二十五日 土曜

大阪ニカヘル。平野郷ニ行ク為メ也。

五月二十六日 日曜

平野郷ニ行ク。末吉家蔵古文書ヲ見ルタメ也。川島、  
牧の、栗の、<sup>〔道輔〕</sup>福恵、<sup>〔元健〕</sup>米沢、<sup>〔司氏〕</sup>座田、山下君。  
<sup>〔阪〕</sup>京坂電車にて帰洛。

五月二十八日 火曜

頭ノ加減悪ノ多シ事。  
暮し行くモノトナスの日送る。  
はかなし。

六月三十日 日曜

文明史ノ方法論ノ組立、已ニ一月ニ垂ントス。

九月十日 火曜

報告書キ初む。

九月十二日 木曜

【受信 樋口津弥太郎君ヨリ拙宅訪問尋合】

九月十三日 金曜

御大葬日也。学校に行かず。午後八時、百万遍ヲ  
初め諸寺の鐘なる。遠く伏見師団に弔砲の音響く。  
慶運院一同庭前に出て、奉弔ス。十一時より大学  
運動場に於て奉弔式あり。大学制服を着て行く。  
服ハ小松君のものを借る。

【発信 樋口君返書】

【受信 大阪高等商業ヨリ手紙、時間割ノコト。  
家ヨリ葉書一、右回送ノコト】

十月四日 金曜

読史会読物ハ、満済准后日記及森山孝盛日記米屋  
騒動ノ条（天明七年）。  
夜読史会新入歓迎会アリ。十時終て電車ニテ家ニ  
帰ル。十二時着。

十月五日 土曜

史学会ノ歓迎会アリ、行カズ。

十月六日 日曜

本日母の桃山陵を参拝に行くにつき之れに伴ふ。  
七時半家を出てたるに天満橋にて四時間許立<sup>〔ママ〕</sup>つ  
なから待ちたるに驚きたる。橋の詰より南一町島  
町の通りまでつゞけるなれは其人数の多き知るべ  
きなり。十二時十五分前乗車。一時着桃。附近の  
料亭にて食事して山にのほり山道にて一度休憩し  
て后、御香宮に参して京坂停留場に来るも人多く  
して乗る能はず。京まで来りて後之に乗りて家  
にかへす。

十月十一日 金曜

報告第一回ノ上提出ス。午後三浦先生ニ研究室ニ  
テ会フトコロ、報告ハ見タリ、サレドモ之レハ史  
学研究ノ法見タヤウナモノ也。国史ト云フハ如何  
ト思フ故、記録ノ研究ヲ出スベシト也。  
本日読史会ニテ三浦先生ノ藤房遺跡ノ研究アルベ  
キノトコロ延引。

十月十五日 火曜

六条邦綱ノ一生。平家ノ文芸保護。六条邦綱と平  
信範。

十月十六日 水曜

王朝末ノ京中ノ不安。

十一月

王朝末之京都、十一月末マデ  
大仏鑄造之鍛冶、其後十五日間  
兵範記ノ研究  
良忍ト当時ノ文化  
京阪ノ心学

十一月三日 日曜

独逸ノ日本協会雑誌ノコト。図書館・研究室。

十一月五日 火曜

天中会ノ茶話会。

百練抄ヲ読ム。一時過寐。

十一月六日 水曜

天皇皇后両陛下桃山陵御参拝。本日奉送奉迎ニ行カズ。

本日和田英松氏来ラル。研究室。兵範記見セタル様ナリ。余、皇典ニ行キテ留守也。<sup>〔謙蔵〕</sup>富岡先生ノ内ニ一寸ヨル。来客ノヤウナレバヤメル。本日時間割ヲ毎週水曜ヲ金曜ニ改メルコトヲ頼ミ置く。

夜、兵範記ノコトを調<sup>〔ママ〕</sup>ブ。夕一時間散歩。十二時寐。

【発信 岩橋】

十一月七日 木曜

二条新町ノ柴田寅三郎氏ヲ訪問ス。心学ニツキテノ事ヲ聞カン為メ也。

本日三浦教授ヨリ読史会大会ノ準備方法等ノ話アリ。川島君モ其談話中アリ。柴田家ヲ尋ヌルコト。新若竹町ノ新平氏<sup>〔民〕</sup>研究ノコト。京都ニ関係シテ国史ニ関係スルモノト演題ノ範囲ヲ定ムルコト。其後十六・十七日ノ読史会ノ旅行ニツキテノ相談アリ。住吉行トスルコト。十時ヨリ宿スルコト。

十一月八日 金曜

午後、後藤祐乗ノ子孫ナル後藤丈太郎氏ヲ三浦先生ト共ニ訪ヒタリ。祐乗ノ彫物、五十両及百両大判ノ雛形<sup>〔ママ〕</sup>。且元書状、前田利光書状等。庭ハ殊に見事ナリ。

大山氏ヨリノ林檎ヲ携ヘテ帰ル。

夜、今日後藤家ニ行クトキ鼻血出テ帰りタルトキモ少許出ル故ニ夜ハ静安ニスル為メ雑談ナドス。夜早ク臥床。

【受信 大山君、後藤邸ニテ】

十一月九日 土曜

【夜、清原君ノ宿ニ行キ荻山、栗野、二君会ス。十二時マデ話ス】

八時起床、九時登校。

製本屋ニ\* \*\*\*\*0x/Do\*\*\*\*-me/Hoffmannを遣る。Hoffmannノ表題ヲカリニSerrurier en Hoffmannトシタリ。内田先生ノ考ナリ。

十一時ヨリ芸文編輯会アリ。<sup>〔琢治〕</sup>小川、<sup>〔康算〕</sup>深田、<sup>〔乙男〕</sup>藤井諸先生及<sup>〔寿蔵〕</sup>植田君也。小川先生曰ク、芸文ノ表紙画毎年改ムルコトヲ止メテハ如何ト。之レ経費上ノコトモアルガ、又其表紙ニ内容・目録ヲ記シ得ル便アリ、之レ大ニ芸文ノ店頭ニアルトキ買フ人ガ之レヲ見ルニ便ナラント<sup>〔ママ〕</sup>」。

二時マデテニスヲナス。研究室ニ行キ勉強、基熙公記ヲ読ム。

【発信 <sup>〔務〕</sup>江馬君ノ読史会ノ演題ニツキ、其ノ範囲ヲ京都ニ関係スルコトニシテ一般国史ニカンケイアルモノトスルコト】

【受信 日名静一君、芥田家目録】

十一月十日 日曜 曇後晴

九時眼さむ。午前中百練抄を読ム。午後直チニ富岡先生ノ宅ニ行ク。<sup>〔小弥太〕</sup>岩橋君ヨリ頼ミノコトヲ願ハン為メナリ。且ツハ心学ノ家ノコトヲ尋ネン為也。門ヲ入ルニ玄関ニ「本日謝客」と記セル木札ノ下カレルニハ吃驚シタリ。案内ヲ乞ハンカト思ヒテ猶予してアリシガ、其中何ダカ面白クナクナリ其儘<sup>〔門カ〕</sup>□ニモドリ門ヲ閉デテ外ニ出ヅ。他ニ行ク心地モセズ家ニカヘル。兵範記研究ノ筆ヲトル。五時ヨリ少許時間テニスス。晩食食堂連ト共ニ牛肉ヲ喰フ。後芸文ヲ読ミ、和蘭文典、兵範記研究ヲ少シ書ク。十二時臥床。

【受信 予定 <sup>〔ママ〕</sup>河島君・<sup>〔覺蔵〕</sup>岩田君ニ旅行ノコトヲ通知スルコト。<sup>〔永〕</sup>富長収蔵君ヨリ平信、十五六日カヘル云々】

十一月十一日 月曜

【予定、三浦先生ニ芸文ノ原稿ノコト、読史会ノ

報告ノコト。】

午前八時離床。八時四十分学校に行ク。本日、満済准后ノ対読ナリ。之ノ用意をナス内、歴史地理学会幹事蘆田伊人君、岩井武俊君と共ニ来ル。下阪家文書等ノ話アリ。三浦先生来ラル。後蘆田氏帰ル。

満済准后日記対読。午後、武教講録、武教小学ヲ探ス。内田先生ノ命也。武教全書ヲ図書館ニテ借ル。武教小学ノ板本を求むれどもあらず。

本日、芥田家の文書ノコトニツキ三浦先生ニ手紙来リ。之レニツキテノ談話ヲ三浦先生トナス。買入並ニ借入ノコト、買入ノ値段ヲ小生ヨリ芥田氏ニ私信ニテ交渉スルコト。

【発信 岩田覚蔵君、読史会旅行ニツキ其方ニ行クコト】

十一月十二日 火曜

午前九時離床。午前中午後ノ予習。午後皇典講究所ニ行ク。天満宮と延喜式ノコトヲ云フ。タイプライター、西洋新着書ヲ押ス。Full Recognition [Robert P. Porter, *The full recognition of Japan*, 1911] 等。  
夜、<sup>〔義富〕</sup>錦田君ヲ訪問ス。九時カヘル。<sup>〔照雄〕</sup>友枝氏ヘ謡曲ヲ習フコトヲ談シス。カヘリテ扶桑略記少シ読ム。芥田ノ案文ヲツクル。

【芥田書状案文ノコト】

十一月十三日 水曜

午前九時離床。此頃起ルコト遅ル。暁夢ニ土中より古瓦、古磚、古文書等ヲ掘り出シタルヲ拾ヒタル夢ヲ見ル。

芥田案文ヲ見セル。修正等アリ。満済准后ヲヤル。夜兵範記研究ヲ少シ書ク。

墓番ノ家ヨリ貰ヒ来リタル小犬泣クコト頗ニシテ親犬モ来リテ不思議ナル声ヲ出シテナク。堺君、西村君、芦野君出テ、サハク。河原氏起キ来リテ犬ヲ放り出ス。堺氏ト喧嘩ス。

十二時過、一時近ク臥床。

十一月十四日 木曜

芥田五郎氏ニ手紙ヲ書ク。

喜田先生ヲ図書館ニ案内ス。

午後、後藤丈太郎氏方ニ行ク。三浦先生と共也。本日ハ第二回目也。古文書、器物等ヲ見ル。判金に關スルモノ多く其他前田家との交通文書、家康より拝領の頭巾・茶碗等見る。本日ハ丈太郎氏在宅にて色々便宜ナリ。七時過帰宅。

夜心学に関するものを読む。心学史要。

【発信 芥田五郎。磯の實恵】

【受信 哲学雑誌来ル。岩田覚蔵君より堺旅行ノコト】

十一月十五日 金曜

明日ハ旅行ナリ。本日ハ忙シク、午前マヅ学校に行きて昨日後藤家にて借入れる約束シタル古文書の目録を調整す。正午出来、食事ナス。直チニ車に乗りて後藤に向ふ。借り入れて皇典講究所に講義をなし又車を傭ふてかへる。

写真機の借入、レンズ甚た異りてありて面倒。

かへり食事して直ちに大阪に向ふ用意をして写真機及明日の持ち行く荷物など（堺大鑑、図、種板）<sup>〔重〕</sup>をもたけれど之れを持ちて三浦先生宅に行く。レンズヲ借らん為め也。之れより栗野君方に行き写真機を持ちてもらうふ事とし、且和泉名<sup>〔ママ〕</sup>勝 図絵を借り、其れより浅沼商会ニ行き種板及空氣球を買ヒ九時半乗車、十一時半帰る。

【発信 磯の君へ、旅行ノコト報知】

【受信 清原君、為替十五円送り来ル】

十一月十六日 土曜

午前八時半高商に行く。奈良朝ノ美術工芸の事を教へ平安遷都の事に及ぶ。

其れより梅田に向ふ。十二時五分に一行の着するを待つためなり。未だ十五分はかりありければ附近の鮓屋にて鮓を食ふ。一行と共に電車にて南海

の停留場まで行き住吉に行き神社に行く。岩田君に逢ふ。後山下君来る。文書を多く見る。神代記古し。<sup>(信末)</sup>折口君の来れるに逢ふ。堺市役所に行き已に日暮れたり。七時頃まで居、大浜まで電車、茅海楼に宿す。

【発信 内田先生。清原君】

十一月十七日 日曜

大浜を十時前出発、岸和田に行く。郡役所に行きたれとも昨日考へし如く大阪府庁より達しは泉南に行かず泉北役所に行きたる事とて、郡役所にてハ不得要領ノ事多し。古文書のことはだめにて城を見物する。後久米田寺に向ふ。道にて蜜柑を買ふ。久米田寺に着し古文書を見る。附近に橘諸兄公及光明皇后の墓あり。此辺古墳多くして中には大なるものもあり。周囲池を回らす円墳式のもの、又ハ前方後円式ノものの如きもあり。雨の為め山様甚だ破毀して土露れたり。埴輪の見ゆるものあり。岸和田より乗車、直ちに大阪に向ふ。晩食、駅前にて。汽車中相談笑して帰る。米沢君ハ其中心なり。美人ありて米沢氏と背を合せて坐するものあり。米沢氏を皆ひやかす。三浦・喜田先生等のひやかしに大に笑ふ。米沢氏ハ一行の会計をひきかまへてして大に功ありし也。

【受信 東京・京都文科大学出身懇親会ノ案内状】

十一月十八日 月曜

九時半学校に行く。写真機を持ち行く。社会学講義聴く。三浦先生読史会大会の事につきうち合す。夜ハ心学史要を読む。十二時半臥床。雨ふり出でぬ。

【受信 案内状返事】

十一月十九日 火曜

皇典講究所ニ行く。

十一月二十日 水曜

満済准后ヲヤル。午後少シテニスス。読史会大会

ノコトニツキテ三浦先生ト談ス。心学ノ書ヲ読ム。

十一月二十一日 木曜

兵範記研究ヲカク (午前)。午後ハ常德寺ノコトナド調べル。日名君来ル。石田梅巖ノ心学ノコトヲ考フ。心学ノコトモ面白クナシト思フ。十時半頃ヨリ寒クナリ読書懶ク、何トナク面白クナシ。

【発信 牧の、清原君、読史会大会ノコト】

十一月二十二日 金曜

本日愉快。八時起ク。午前中神祇志料・本朝文粹ヲ読ム。午後皇典、其ヲ了りて紫竹の常德寺に行く。後藤氏ノ木像ヲ見ニ行ク為也。住職不在にて尼僧出デ位牌棚ニアル厨子ニツヲ開キ見ルニ木像各一軀ツ、アリ。一方ハ奴ノ鷹ヲ持テルアリ。一方ノハ財布ヲ前ニヲク。五時半カヘル。

夜談話。後、心学史要ヲ読了。十二時寝。

【受信 名越君、桜島登攀ノコト】

十一月二十三日 土曜

九時起。富永氏帰り来り談話。十時半より読書心学ノ講演ノコトヲ考フ。大体ノ筋道ヲ立テントス。午後テニスヲナス。真如堂辺の中学生・三高生と共にマッチをなす。慶運院ノモノハ皆負ケタリ。夜、湯ニ行キ葉書ヲカキ、後富永君ノトコロニテ談話。十一時半ヨリ読書。大日本史醍醐天皇紀ヲ読ム。一時臥。

【発信 三浦先生、昨日の状況】

【予 三浦教授宛手紙。柴田氏ニ交渉ス。次デニ写真やニモ】

〔挟み込み紙片①〕

一、時日

二、会場

第九教室。座田君届ケルコト

教官室ヲ借ルコト。一座田君受持 会議室。

三、食堂。心理教室

四、陳列—先生ニ任ス。西田

五、食事。吾妻や

十七人分 西、江、大、清、磯の、川、栗、山、  
平、市、福、座、米、中、後三人  
牧

○費用

一円。八十銭。

8 80

〔挟み込み紙片②〕

七、演題。

在学生 必ズヤル。

在外生 意志ニ任ス。

時間二十五分。五分ノ猶予ヲ与ヘル。

九人分

五時—六時 夕食

六時ヨリ十時。

<sup>〔ママ〕</sup>華岡君、<sup>〔ママ〕</sup>牧の、岩田。大山、磯の  
内藤先生、喜田先生、江馬君

役員

会場 主任 座田

食堂 主任 福恵君

記録。<sup>〔直勝〕</sup>中村君

〔挟み込み紙片③〕

○陳列掛 座田 福沢

○会計 米沢君

○演題 時間配当。二十分

○交渉 栗野

在外

十一月二十四日 日曜

午前、中右記読ム。午後、二時半マデテニス。其  
レヨリ読書。

十一月二十五日 月曜

午前。

午後紫竹常德寺ニ行ク。写真三枚トル。カヘレバ  
慶運院ミーチング、遅レタリ。大日本史ヲ読ム。  
二時臥床。

十一月二十六日 火曜

午前。

午後皇典。かへり集会所にて読史会委員ノ会合。  
六時了。

六時ヨリ<sup>研究室ニ行キ</sup>直チニ学校ニテ満済准后日記ノ原本ヲ蔵  
ニ収メニ行ク。夜クラシ。其ヨリ急キ柴田ニ行ク。  
出ントスルトキ錦田君来ル。都合悪シケレバ友枝  
君トコニ行ケズ。柴田ニ行ケバ主人旅行ヨリカヘ  
ラズーカヘリ来ル。

中右記三十一冊四ヲ読ム。一時臥床。

十一月二十七日 水曜

午前後藤文書ヲ見ル。午後三浦・内田両先生及川  
島君角倉ニ行ク。予図書館ニテ心学ノ書ヲ借リル。  
夜柴田ニ行ク。鳩翁及梅巖ノ遺品ヲ見ル。

三浦先生宅ニ行キ読史会大会ノコトノ広告苦ノコ  
ト相談。十二時帰ル。

近来多忙、読書研究ハ常ニ十二時ヨリ始ムル有様也。

【発信 清原。大阪高商土曜休<sup>〔ママ〕</sup>曜ノコト】

【柴田電話】

十一月二十八日 木曜

午後五時半マデ読史会大会ノ広告ヲカク。

十一月二十九日 金曜

午前プログラムノ張紙ヲカク。陳列ノ下調。夜京  
都心学ノ原稿ヲカク。

十一月三十日 土曜

読史会大会ナリ。本日ハ大商ニ行日ナレトモ休ム。

午前十時ヨリ陳列。午後〇時半開会ノ予定ノトコロ、  
一時ヨリ初ム。清原君来ル。岩田君モ来ル。

五時半、江馬君ノ中世ノ京都髪風マデ。

晚餐。

七時夜ノ部開会。

京都心学、予

京間田舎間、<sup>〔ママ〕</sup>（喜田

角倉了以、<sup>〔ママ〕</sup>（内田

此間陳列品ノ観覧

桓武天皇、三浦

十二月一日 日曜

午前九時半<sup>〔ママ〕</sup>臥。文展見ニ行く。清原・栗の君共也。  
清原君ヲ停車場ニ送ル。カヘリ三時ヨリ辰馬君と<sup>〔悦藏〕</sup>  
共ニ史学研究会ニ行く、集会所也。<sup>〔神輔〕</sup>藤代先生ノ独  
訳忠臣蔵アリ。夜寺町ニ行く。カヘリテ新聞キリ  
抜ヲ整理ス。

十二月二日 月曜

午前九時<sup>〔ママ〕</sup>臥。本日対読アルベキニ、三浦先生出  
校ナシ。

十二月三日 火曜

午後皇典。心学ノ話ヲスル。

十二月四日 水曜

午前。

午後。

夕、錦田君ノ家ニ行キテ謡曲。錦田君、友枝君、予。  
本日夜勉強出来ズ。腹工合悪シ。

十二月五日 木曜

八時前起。

午前、中右記学校ニテ読ム。兵範記ノコト調ブ。

午後、テニスス。兵範記一時間調査。

夜、謡曲、友枝君宅。羽衣、高砂。史海読ム。後、  
皇典原稿造ラントスレトモダメ也。本日モ勉強セズ。

十二月六日 金曜

午前八時半。

写真屋ニ心学ノ展覧品ノ写真ノ乾板ヲ持ち行ク。  
カヘリテ鳩翁道話稿本ヲ校訂セントシ、鳩翁道話  
ヲカヒニ行キタレトモ<sup>勉強堂</sup>何処ニモナシ。却ツテ松翁  
道話以下二冊ヲ買フ。

皇典原稿ヲカク。神祇志料ヲ読ム。十二時前富永  
君突然研究室ニ来ル。電報ヲ持ち来ル。大高商ヨ  
リナリ。明日休ミノ由云ヒ来ル。

午後食後、出町柳ノ郵便局ヨリ速達郵便ニテ家ニ  
本日下阪セサル旨ヲ報ズ。女事務員甚ダ丁寧ニ取  
扱フ。皇典ニ行ク。白河鳥羽天皇頃ノ仏法隆昌、  
僧兵横暴、国司巡拝ノ制廢頽、総社ノコトヲ云フ。  
帰路丸太町ノトコロニテ平岡君ニ会ヒ共ニツレダ  
チ帰ル。西川ニヨリ鳩翁道話ヲ求ムレトモナシ。  
写真やニヨリテ本日ノ写真現像ヲ見ル。皆ヨクウ  
ツル。

夕牛肉会。夜ヨリ勉強ス。兵範裏書ノコトヲ調ブ。  
蘭語一時間。十一時臥床。

十二月九日 月曜

夜少シ勉強シタレトモ初メヨリ疲労ノ気味アリ。  
興味ナシ。十時半臥。

十二月十三日 金曜

夜帰宅ス。六時過百万遍家を出てたり。

十二月十四日 土曜

高商。

十二月十五日 日曜

帰宅、在阪。夜帰ル。

十二月十六日 月曜

喜田先生送別史跡踏査会茶話懇親会。於集会所。  
本日喜田先生ハ銅鐸の話をせられたり。日本には  
歴史にのこらさる一の古文化の存在を説かれたり。  
法苑珠林にある銅鐸と思はる記事ハ興味深かりき。  
後栗野君は多田荘の旅行談あり。

十二月十七日 火曜

午後五時半より学生集会所に於て浜田耕作君渡欧及楠基道君〔東京帝大支那史学1908卒〕の渡清送別の三高出身文科卒業生懇話会あり。僕と厨川氏ハ幹事なり。

本日皇典講究所の学期試験をなす。問題は一年級ハ平安朝の京都附近の神社の祭祀、(二) 王朝末の神社。二年ハ京都附近の神社と其祭祀、二神道史上の延喜時代ハ如何なる時代か。

羽田亨氏宅に本日の会の案内に行く。

十二月十八日 水曜

本日午後六時より学生集会所に於て読史会例会。読物ハ兵範記、後法興院政家記、蔭涼軒日録、貞永式目を読む。午後此ノ読物の印刷にて殊の外忙かりき。

本日教授会ありたり。内田教授の室にて。

喜田先生出発の由にて挨拶に来らる。

十二月十九日 木曜

午前午後学校にあり。夜、友枝君のところに行く。留守。錦田君を訪ふに本日ハ哲学会の由。かへりて芦野氏、富永氏と菓子を食べ話しす。

十二月二十日 金曜

午後満済准後の対校。夜、小川教授宅に行き、今迄に調べたる牧野氏より送り来れる能登惣持寺の南膳部地図の話を行く。明日ハ大阪高商に行くため朝早く起きざるべからず。

十二月二十一日 土曜

午前六時過起き、正七時に慶運院を出て二條熊野道より電車にて大阪に行く。本日ハ雨にて甚た困難。九時十分過に天満橋着。十時十五分前に大高商着。本日ハ試験也。問題ハ推古時代ノ文化、(二) 奈良平安朝の商業及貨幣につきて。試験ハ十時十分

より。

十二月二十二日 日曜

R 40P

L 3,5

瞳孔距離63

在阪。湯に行き後、眼鏡屋に行く。眼鏡をあつらふ。阿波殿橋の本や二行く。国史大系なし。安土町の鹿田〔松雲堂(古書店)〕によりて国史大系を見る。四時出発、京都に帰る。大学にて写真機を取出し種板を買ひ(大学病院横)寺町の時計屋にて時計をとり、荒神橋の靴やにて靴をとり、兼常氏方にて乾板をとり、パンを買ひてかへり、乾板を入れなると十二時過也。R40

十二月二十三日 月曜

午前五時起く。雨の気いなければとも天寒く月あかし。水をあふるに寒し。昨日買ひたるパンを嚼る。湯もなく水もなし。

三浦教授宅に行く。未だ用意出来ず。

市電にのり行くに時間おくれたり。六時五十五分。次の八時十五分にて柏原に行く。村役場に行き中川泉三氏に会ふ。具行卿墓を見、清滝寺徳源院に行く。此処にて宿す。

十二月二十四日 火曜

徳源院より出で眼覚めて顔を嗽くに雪チラ―として降り来る。山容白雪の間に濛乎たるもの其気甚たよし。已にして雪漸く降ることを増し、此れより出立ちたるときは白雪地を踏みて遠山近山の姿なかめ殊によし。霏々たる鵝毛の内をたとりて是れより成菩提院に向ふ。種々のものを見たり。三時出発、柏原より汽車にて京都にかへる。六時過也。かへりて高商の試験答案を点つける。壺時過頃まで起く。

十二月二十五日 水曜

学校に行く。三浦教授に会ひ昨日買ひたる地図を渡す。高商の採点表を郵送す。午後、全浙兵制をさかしたれともなし。テニスをなす。甚だながくなりたり。学校より近代文芸叢書の小説及笑話をもちかへりて心学の伝統につきしらべんとす。

十二月二十六日 木曜

午前遅くおきたり。阪本君来る。学校に行く、十二時。歳末整理。夜図書館に行き心学のことを調ふ。かへりて芦野氏のところにて謡曲をやる。壱時頃臥床。

十二月二十七日 金曜

朝遅し。近比朝ハ甚た元気なく、朝寐をする。毎日夜ふかし朝寐のみする。

朝図書館に行き心学のこと調ふ。午后研究室にて一寸読書。其れより内藤先生宅に軸を持ち行かんとし転宅、かへりに岡崎氏を訪ふ。五時かへり、図書館にて<sup>〔諸々〕</sup>読書、心学ノことに関して。

本日疲労したれば九時図書館よりかへりたる後、日記の追記をなす。

【発信 牧野君禅宗ノコト】

【全浙兵制ハ館長か借りてゐる】

十二月二十八日 土曜

内藤、富岡、榎、学校。葉書、手当。

内田一書物一心学、全浙、地図、洋書。

三浦一汽車。

原。

明治四十五年当用日記補遺

趣考

方法論、本文

採訪、旅行

講演

発表

文書目録

批評 何人ヲ読ム。コントロールセー、ブライシヒ、ベルグマン

## 金銭出納録

第一種經常費 二二〔22円、以下同様〕

第二種經常費（図書刊行会・汽車賃） 五. 五

準備金 一.

第二準備金 五.

〔計算式一省略〕

## 明治四十五年一月収支一覽表

### 支出

食料 9〔9円、以下同様〕

牛乳 1.35

宅料 3.00

油料 .5

炭 .3

世話料 .3

新聞 .45

共同新聞負担 .10

筆墨等ノ費用 2.5

学会等会費 2.0

湯銭洗濯等 1

雑誌 1.5

第一種準備 22.0

宴会等ノ準備金 2.5

新刊書 3.0

第二種 5.5

汽車賃 3.5

国書刊行会 2.0

〔欄外計算式一省略〕

## 住所人名録

京都田中村字樋之口二十三

新烏丸丸太町下

米沢元健

出雲路通<sup>〔次〕</sup>二郎

名古屋市南区熱田東町字玉ノ井五十八

中村健一郎

大宮頭舟岡建勲神社

松平藤佐

愛知豊橋市西八丁

福井忠治

高倉御池下ル児玉方 京ト

岩井武俊

転宅 新町頭字岩栖院町 後藤方

大山友一

転 北海道小樽堺町畑五 端良一

寺田貞次

宇治山田市宮後町字四谷一三一

清原貞雄

二月十二日転宅通知

紀伊郡東九条村

梅原末治

東京市牛込区市ヶ谷田町二丁目十三 小林方

松本茂平 三月卅日転宅通知

大連市近江町満鉄宿舍D区五番九号 中野竹四郎

金沢市新堅町三丁目八十二 加藤方 牧野信之助

拾月五日報告

〔挟み込み 演劇番組表一省略〕

〔挟み込み 名刺〕西田直二郎

大正二年当用日記（東京博文館発行）

一月

京都ノ心学

惣持寺ノ地図

兵範記ノ研究

王朝末ノ京都

播磨ノ鍛冶

知足院ト関白忠実

泰山府君ノ祭

賤民研究 古代ノ祭

氏族研究

世業ト遺伝

一月十三日 月曜

本日ハ皇典学神祭ある日なり。本日は行かない。  
芸文原稿として京都の心学を書き昨日午前脱稿。  
京都にかへりて九時より清書す。二時頃に至りて

漸く半数八頁はかりを記したばかりにて遂に寝に  
つきたから、本日ハ朝早くより起き、但八時頃なり。  
学校にて清書した。正午までかゝる。午後三時過  
之れを植田寿造君宅まで郵送する。三時五十分頃  
よりテニスをなす。久し振にて心身甚た愉快。五  
時食事、入湯、其より図書館に行く。皇典会誌の  
原稿をかゝんため也。

【書物を繰りながら雑誌を読む。実業日本の体力  
号〔『実業の日本』16-1、1913.1〕を読むだが大に利益  
を得るところあった。本日より早起の利を感じる  
こと大である。此の雑誌にもありたるが早起ハ確  
かに精神上利益あることを知り得たり。本日気分  
最よろし】

【発受信 谷井済一兄ヨリ来信。夕方之レヲ読ム。  
考古学会ノ入会ノコト也】

【受発信 谷井済一君ニ、雑誌ヲ一月分ヨリ送ラ  
レタシト云フコト】

一月十四日 火曜

午前八時前に蹶起離床。本日より早起主義ナリ。  
学校に行きたるは九時です。本日皇典ニ行<sup>〔にカ〕</sup>つ  
きて其の腹案をつくる。初め京都ノコトを話しせ  
んと思ひ、平安通志などを見た。又院政時代ノこ  
とを話さんとして、大日本史近衛天皇ノトコロを  
見たれども何分間ニ合ハザリシ、ヤメテ十一時半頃、  
鏡ノ話ヲセントス。之レニツキ、考古雑誌ト鏡と  
劔と玉〔高橋健自『鏡と劔と玉』富山房1911〕の二冊ヲ  
持チテ学校ヲ出テタリ。天寒うして道ニ之れを読  
まうとしたれどもやめた。向ふに着きたるときは  
一時五分過ナリ。本日より此方も時間励行なり。  
一時間半はかり話しをしてかへる。S受取、尚此  
外歳末の講師慰労会欠席者に<sup>〔相俟カ〕</sup>□□券として金壹円  
ヲ得、三時半研究室にかへる。三時半より四時ま  
でハ何も出来ぬ。中途に便所に行きたりなどした  
から益何も出来ぬ。四時家ニかへり四時半夕食。  
其れより木村の室にて富永氏ト闘球盤にて勝負を  
争ふ。十一時まで立ちかハリ院長、廣部、木村とす。

之れより臥床。本日ハ何もせさることとなる。可惜――。

一月十五日 水曜

午前八時起きたり。学校ニ行き皇居年表ナド読ム。午前中之ノヤウナルコトニテツプス。午後皇居年表ヲ読ツゝタルニ三浦先生来ラレテ芸文ノ話出テ、先生ノ原稿ハ訂正スベキトコロアルニヨリ取モドスコト能ハズヤト云フ注文ナリ。之レヨリサキ植田君ハ郵便ニ已ニ出シタルナラント思ヒシガ、植田君ヲ尋ヌルニ居ラズ、其レヨリ長者町裏ノ門西入岩原方ナル宅ヲ尋ネニ行ク。宿ニテ裏ノ門ヲ尋ヌルトコロ、宿の息子ハ上長者町トシテ上立売ヲ教ヘ相国寺方ヲ向ヒ行ク。之レヨリ後、下ニ下カリテ上長者町ヲ西ニ行クニ裏ノ門ハ堀川ヨリ遙カニ西ナリ。漸ク行キ一時間半バカリ話シテ帰ル。智恵光院ヨリ電車ニノリテ出町ヨリ宿ニカヘル。五時也。本日牛肉会ヲナス。芦野君ノ御土産松笠(饅頭)ヲ出サル。八時半カヘリ兵範記ノコトヲ調べントス。後富永君話シニ来リテ十一時半マデ話ス。

一月十六日 木曜

八時起ク。本日ハ八時二眼サメ起キアガレハ八時ノ笛ヲキク。学校ニ行ケバ未ダ九時前五分也。皇居年表ヲ読ミ、又風俗史ヲ見、大ニ著述ヲナスコトヲ考フ。京都ノコトヲ調べントス。午前ハカクの如クニシテアマリ大シタコトモナスコトナシ。午後岩橋君の先日ヨリノ頼ミナル西福寺ニ行カントス。天気晴朗ナレバナリ。一時前宿ヲ出テ吉田山ノ東テ廻リテ南禅寺に行き西福寺ヲトヒテ上田秋成の木像ヲウツシ、又其厨子ヲウツス。此ノ厨子ハ三室ニテ甚だ奇也。天井板ト云フハ加茂社ノ木ノ牀板ナリト云フ。秋成ノ顔等中々ニ面白シ。厨子ニハ野之口隆正の記したるものあり。写しとる。又墓ヲ写ス。本日写真機の伸縮甚た意の如クナラズシテ大ニ困リタリ。又同寺にハ秋成筆の軸一あり。又富岡鉄斎、<sup>〔富岡〕</sup>謙蔵、藤岡東圃、島華水等のよせ書

あり。

谷井君ニ出ス考古学雑誌ノコト。

【夜ハ図書館ニテ八十島使ノコト調べ。又満濟准后日記ノ本ヲ研究室ニ置キタル儘西福寺ニ行キタルヲ以テ、夜之レヲ倉ニシマヒニ行ク。本日ハ天気晴レタリ。風寒シ。後夜ニナリテ雨降り出テタリ。丙 Studien／甲 Werk／乙 Gefühl】

一月十七日 金曜

【la vie intellectuelle la vie volontaire】

一月十九日 日曜

○吾人は何もえらくななくともよい。凡てのものをあきらめよ。淡水の如くにして此の世を終らしめよ。身分不相応は破滅の因である。あせるなかれ。我身をは不幸なりと思ふなかれ。不幸は之れ仮装せる幸福なりとし、常に自ら慎みて楽しんで謡せず悲しみて乱ることなかれ。君子一生時に会はざるも尚自ら愧しずんは幸なり。皓として雪の如く清きこと月の如くなるべし、世を怨み人を恨むなかれ。是れ天の命なり。天命に安じて身安く体<sup>〔群々〕</sup>絆かにして神舒びたるの時、之れ吾人が吾人の最大幸福をうけたる時なり。貪と痴と瞋とは吾人の身賊なり。

一月二十四日 金曜

ビーフ会。終ルトキ<sup>〔文夫〕</sup>岡崎君来ル。九時頃マデ話シテ行ク。氏ハ何か教ゆべきところなキかと云ひて尋ねられたり。読書会を近日開くべき事など云ひてゐたり。九時頃になりて予が大商ニ行クコトヲ聞き、本日モ急グベキ日ナリトテ帰ル。其れヨリ用意して帰る。大阪につく時は十一時五十分也。本日はかゝる次第にて大商の予習をなし得ず、日本商業史、国史眼を持ちかへる。電車中にてハ商業史を少し読みたり。

本日は内田教授が一年の演習として、熊沢蕃山、加賀松雲公、池田光政、貝原益軒、徳川光圀につ

きて学生に書物を見せらるべしと云ふ事にて、昨日よりの命にて本今朝七時前に起きて学校に行き其書物を調ふ。彼是の用事にて皇典の予習も出来ず、歴史地理、京都神職会雑誌を持ち行きて話をなせんとしたり。熊野王子社の事を話す。

一月二十五日 土曜

七時半頃起ク。九時前大商に行く。鎌倉の滅亡、南北朝の争ひを述べ天竜寺を立つることまで行く。之れ天竜寺船の事より外交をとかんとする也。  
学校より電話にて四方君〔天王寺中学1904卒〕<sup>（恒三郎）</sup>の出勤を尋ね、午後三時半過、株式取引所を訪ぬ。菅原君（斉藤君）来れり。島本得一君〔天王寺中学1902卒〕に会ふ。三人及四方君と共ニ桃陰同窓会の事を話す。夜暮れてかへる。今昔物語を少し読む。

一月二十六日 日曜

午前九時頃起く。湯に行く。今日ハ余程寒く地上に淡雪ありたり。天神の御膳をなす。午前十一時半頃朝飯を食し、一時頃家を出てたり。博物館に旅行展覧会あること昨日大阪株式取引所に行く時見たるため、何かの参考と思ひて之を見て後帰京せんとして出てたる也。然るに博物館にてハ其の展覧会ハ来月十一日より三月頃まで開催する旨の掲示をなしたるに過ぎずして、現今ハ只新年展覧と云ふものをなすのみなりき。失望したれとも仕方なければ徒歩天満橋に出て電車にてかへる。途、中書島にて下車して本日竹田の安楽寿院に行かんとの計画をなしたるを以て、伏見を通りて鳥羽より安楽寿院に出づ。渡辺勘三郎宅に行き古文書（今般大学が買取らんとするもの）を見る。日暮之れを出て、師団前より乗車して帰洛す。師団前ハ此以前牧の君と来りたる時乗りたるころなるが其時ハ余程近しと思ひたるに、今度ハ甚た遠く感したり。京電に乗らんとするならば城南宮道にて下車すれば安楽寿院ハ直く其側なり。  
帰れハ本日ハ同宿藪田為三、大倉安蔵氏の誕生日

記念としてシルコ会也。極端に濃厚なるシルコを頂戴スル。種々談話あり。十一時半マデ話シタリ。

一月二十七日 月曜

本日学校にて、午前三浦教授より読史会ノコト相談ありたり。学生側の意見を聞き決定せんとす。午前満済対読。十三枚バカリ行ク。本日ハ時間少カリシ為也。午後三浦教授より東京出張の事を聞く。大乘院日記の調査ノ為也。大学にて之れが副本をとるにつき、内閣文庫に行く用を云はる。又後兵範記につきて近衛家に行くべき事も云はれたり。夕食後、院長、大倉、芦野君と共に寺町マデ散歩。帰りに学生集会所に行きミルク菓子を食べ。小生之れを払ふ。七十三銭。かへりて宿にてハ婆さん来りて息子が近頃遊ひて仕方なしと云ふ事を云ふ。次に藪田（和）君来る。婆さん之れによりて帰る。藪田君ハ英語を問ふため也。次に院長来る。藪田帰る。院長ハ先きの会食の費を払はんとす。之れを聞き芦野君来り又話する。次に又大倉来る。皆尻をすへて話す。後富永君菓子を持つて来る。皆話しする。十二時前也。

【発信 清原君に手紙出ス。上京ノコトヲ報ズ。  
宿ハ本郷区森川町三枡館。<sup>（磯野實恵）</sup>磯の君に手紙（読史会ヲ報ズ）】

【受信 牧野氏より手紙。地図ノコト進上、□解説ヲ乞フト。聖武天皇論来る。人類学雑誌来る】

一月二十八日 火曜

午前七時半起ク。九時出校。  
読書せんとして百練抄を見、又愚管抄を見る。皇典の原稿造ラントスル。<sup>（萬次郎）</sup>高橋君と壬生家の令ノ奥書ノ写真ノコトヲ彼是話してゐる。後、住吉神社の神代記ノ事を思ひ出して之れを見んとしたり。而し尚又日吉社ノ事を話す方よりかんとして神祇部を見る。住吉社神代記の記事が神祇全書の内にあるかと思はる。即ち神祇史の広告を見るに、其ノ神祇全書の広告中に此ノ書らしき名見えたり。

午前中、昨日藤原貞幹の自筆なりや否やのかん定をなす。

皇典、熊野社ノ雑話、牛王の話などして一時間を費し、後一時間ハ日吉社ノ話也。

散歩、芦の、西村。眼鏡や白井に寄り眼鏡の修理を依頼す。かへりに共に富田に行き菓子食ふ。

図書館にて安南遊記、安南〈 〉(〈 〉前集之内)ヲ読ム。万里石塘ノコトト思ハル記事アリ。

一月二十九日 水曜

【栗の・江馬君に電話】

一月三十日 木曜

本夕読史会アリ。此回ハ記録の講読ヲヤメテ各自研究ヲ発表スルコトシテ、川島君ノ長崎平戸博多ノ旅行談アリ。次ニ僕ノ惣持寺世界図ノ考証、次ニ三浦先生ノ北条時頼巡行説ニツキテ瀬川秀雄氏ノ史学談話会ニテ談シセラレタル巡行説ニツキテノ反証ヲ反駁せられたり(瀬川氏ノ文ハ読売新聞ニ載リタリ)(ノートブック参照。Note Bookノ部)。

帰りテハ東京行ノ準備ヲナシタリ。持ち行くベキモノヲト、ノヘタリ。明日ハ大商に行くため帰る日なれば忙しきゆへなり。午前二時過まで準備ヲナシタリ。

【受信 牧の君に葉書ヲ出ス。惣持寺ノ地図ノコト】

一月三十一日 金曜

午前、兵範記ノコトヲ調べネハナラズ。又皇典講ノ原稿ヲツクラネバナラズ忙し。先ヅ皇典ノヲ調べ。十一時マデカ、リ之レヨリ兵範記ヲ借りタルトキハ已ニ二十二時ナリ。事務の方よりして旅費ヲ取りに来るやう云へたるを以て、昼食后本部に旅費ヲ取りに行く。金貳十六円ノ手形ヲモラフ。日本銀行京都支店に行くべきなれとも忙しければやめて、皇典ヨリかへる。三浦教授ヨリ東京にてなすべき色々用を云はる。夕食後、図書館にて七時半まで

兵範記の事を調ぶ。七時半より内田教授の宅ニ伺ハントシタルガ来客のやうにてやめ、宿ニかへリテ大阪行ノ準備をして又内田先生ノ宅を伺ふ。客尚ありやめて大阪に帰る。電車中にて大商ニテ教めること調ぶ(二月八日追記也)。

二月一日 土曜

大商に行く。

帰途直ちに平の町の眼鏡やに行く。眼鏡の修繕ヲトリニ行ク。かへり途、心斎橋丸善にて万年筆ゼニスを買ふ。又オリオンの修繕をしてもらう。午後六時頃、家を出て、京に行く。九時宿に着く。内田教授の宅に行かんとしたれども其家の前に行きたれと、遅くあれば内に入ることはやめたり。準備をと、のへる。

油、ハミガキ等買ふ。京都にかへるとき丸太町にて電車をまつとき旅行用鏡を買ふ。

二月二日 日曜

十時頃内田先生のところに行く。先生ハ風邪をひきたりとのことにて会ふを得ず。転りて新村<sup>〔出〕</sup>先生ノ所に行く、不在。名刺をおき帰る。<sup>〔ママ〕</sup>立ちに富岡先生ノ宅に行く。本日謝客の日なり。心学のこと及、岩橋より申来る茶神問答及秋成肖像のことを頼む。十二時過出て、直ちに樫木町より鳥羽に向ふ。安楽寿院内渡辺方に古文書をかりに行き、桃山に参る。せんべいを買ふ<sup>〔モカ〕</sup>□尚種々考へたり。昼飯を食ひ又上りて埴輪を買ふ。かくて帰れば日已に没す。早食用意し又ビーフ会かありし也。学校に古文書ををき車にのりて七条に来る。約一時間も早し。九時二十三分にて東行き。岐阜に着く頃よりねむくなり、名古屋は夢の中なり。

二月三日 月曜

沼津あたりより夜明く。

午後文部省、宮城、日比谷、帝劇、中央停車場。水谷ニ逢フ、大溝<sup>〔講カ〕</sup>。夜岩橋。

二月四日 火曜

午後、<sup>〔国男〕</sup>柳田課長〔内閣書記官室記録課〕ヲ訪フ。

二月五日 水曜

内閣。

二月六日 木曜

内閣。

二月七日 金曜

内閣。

二月八日 土曜

内閣。夜、山本君ヲ訪ヒ山本君来ル。大成中学ノ前ヲ通ル。

【兵範記ノ研究。室町時代ノ風流】

二月十日 月曜

松本来ル。

【帝劇】

二月十一日 火曜

八時半起く。けふは紀元節にて岩橋君と見物をする約束をなしたれば、九時頃に出発する故、早く起きんと思ひたるか眼さむれば寒風吹きて障子にあたる音すさまじ。九時前おき、食後岩橋の来るを待つ。其間、惣持寺の地図の原稿を清書す。十時過に岩橋来る。予、岩橋君を誘はんとして行きかけたるとき来る。共に出て、先づ九段に行き遊就館を見る。之れより藪そばに行く。出て、芝公園に行く。寒し――。かへりハ帝劇に入る。第一、あきらめ、第二、忠臣講釈、矢間喜内浪宅ノ場にて重太郎か別れに来るところ、第三、長唄常磐津朝比奈釣狐、第四、演劇魔女之森、第五に珍竹林あれと第五は見ずにかへる。腹へりたるを以て近所ノソバヤに行く。其より手紙をかき寝ニ就く。

【発信 朝、谷本、<sup>〔ママ〕</sup>阪口、内田諸先生】

【史料 学長】

二月十二日 水曜

八時半起き髭を剃る。九時半史料編纂掛に行く。<sup>〔義成〕</sup>田中主任に逢ひて話を承ハリ各室を巡覧する。紹介せられたる人々は先づ古文書室にてハ芝葛盛、伊木寿一、南北朝部にてハ藤田明、室町、渡辺世祐、和田英松、辻善之助、外交文書にてハ――。藤田安蔵君に会ひ、午後経覚<sup>〔私〕</sup>要抄<sup>〔鈔〕</sup>を見る。三時半になると取りに來れり。

湯に行く。夜、松本茂平君の宅を訪問する。市か谷田町にており（新見付停留場）、漸くにして家ヲたつぬ。美濃屋と云ふ鶏肉屋也。九時半まで話しす。

歸りて三浦先生、荻山、牧の、慶運院への絵葉書をかく。二時頃か臥寐。

二月十三日 木曜

八時半眼さまし起き、十時史料に行く。経覚と大乘院とを見る。午後三時頃までかゝる。十時<sup>〔参次〕</sup>三上主任をたづねて話をうけたまはる。

夜手紙ヲカク。

【発信 三浦先生、荻山、牧の、慶運院。夜、内藤先生、松本、学長、皇典講、休講延期ノコト】

二月十四日 金曜

午前、<sup>〔私〕</sup>史要鈔ヲ数フ。中山校長ニ話シヲスル。三時半頃要鈔ヲトリニ來ル。之レヨリ<sup>〔勝美〕</sup>黒板氏ヲ尋ネテ応接室ニテ話シスル。明後日標本室ヲ案内スベシト云ハル。中山校長ト共ニ史局ヲ出ル。岩橋來ル。十一時マデ話ス。

【発信 内田いろ――ノコト。清原近状】

二月十五日 土曜

午前中史局。史料、弘長ノトコロヲ写ス。同日ハ九時ニ行ク。役員未ダ出ソロハズ、シハラク待ち

テ本ヲ出シ来ル。十二時前電話にて近衛家ニ問合せ。藤田明氏ヨリ住吉家文書ノ花押ニツキ話シシタシト云ヒ来ル為、史料ヲ写スコト十一時過ニテヤメタリ。中山校長今日ハ来ラズ。八代国治氏ヲ訪フ。先メテ也。和田部長ノ所ニテ話シシ、其時京都大学所蔵文書ノ真偽ニツキ云ハル。

【受信 新村・内田両先生ヨリ。拝借書物取扱ヲ丁寧ニスヘキコト。文科ヨリハ出発届及帰学届ノコト】

二月十六日 日曜

朝十時ヨリ上野図書館ヲ見ル。カヘレハ二時頃。其レヨリ小川先生ノトコロニ行く。又、芦野氏ヲ訪フ。夜、上野図書館ニ行カントシタレトモ、紙ヲ買ヒ又絵葉書ナト買ヒテアルト時間の都合悪シクナリ、食事済みたるときは六時過頃也。仍岩橋ノ処に行きて話す。羽織の紐を忘れてかへる。

【発信 文科ニ帰学届ヲ出ス。小松院長。】

二月十七日 月曜

午前八時起、九時史料ニ行く。要鈔少シ急キテ見ル。十一時マデ六冊ヲ見ル。十一時ヨリ黒板先生ヲ尋ネテ史学標本室ニ行く。今西龍君ハ留守ナリキ。博士の案内にて標本室ヲ見、其傍の事務室ヲ見ル。其レヨリ史学研究室に行く。大類文学士ニ会ふ。<sup>(中)</sup>其向ひの机にハ大谷勝真文学士あり、談話ス。室の排置、カード、書籍ヲ見ル。次デ今西龍君来ラル、牧野君来ラル、話シヲスル。後其室ヲ辞シテ今西龍君の室ニ行キテ暫<sup>(時)</sup>寺談ズ。

午後一時半過くる頃より近衛家ニ行く。巢鴨の停留場マデ行き其レヨリ市外電車にて目白ニ行く。不案内のため一電車ヲ空待チス。近衛家ニ行く。三時ヲ過グ。小便ナトシタルため遅レタリ。五時半辞シテカヘル。近衛家にてハ兵範記の古巻ヲ出シテイナイノデ落胆スルコト限ナシ。実ニ落胆シタリ。

岩橋ヨリ国書刊行会の義人纂書〔『赤穂義人纂書』第1、

第2、補遺、1910～1911〕ヲ三冊持来る（夕方）。

中山校長午前中僕ノ居ル間ハ史局ニ来ラズ。已ニ帰りシカ。

【芸文ノ寄贈ノコト聞ク】

【発信 内田・新村、注意ニ対スル御礼。帰日ヲ云フ（書く。出スハ明日也）。栗野君市民騒擾の絵葉書】

四月五日 土曜

<sup>(慧)</sup>  
□ 誉上人法要。

四月六日 日曜

午後、洋服屋ニ行く。

四月七日 月曜

宗祖降誕会ニテ抹茶会アリ。

【大阪】

四月八日 火曜

釈尊降誕会ノ会アリ。午前河内地方旅行。午後一時頃ヨリ雨フル。柏原駅ヨリ引キカヘス。午後六時出発京都ニ来ル。

一時頃話ス。慶運院ニテ、富永、芦野、堺。

四月九日 水曜

十時頃起ク。午後学校ニ行く。三浦先生ヘ手紙ヲ出ス。大乘院ノ目録ヲ送ル。夜湯ニ行き、カヘリテ心地ヨク大ニ勉強ス。寺院ノ文化的事業ノコト調ブ。

四月十日 木曜

午前七時半ニ起ク。八時学校ニ行く。兵範記ヲ調ブ。此ノ機会ニテ之レヲマトメント欲ス。嘉応元年八月九月ノ巻。一卷ヨリ進マズ。午後テニスヲナス。三時過。三時ヨリ五時半マデ兵範ノ裏書ヲ調ブ。五時過今西龍氏来、国史研究室ニテ談話。六時湯に行ク。

郷土研究室社ヘノ手紙ヲカキ、兎島高德ノコト片付ケントス。明日ハ高德ノコト片附ケン。

【発信 郷土研究社】

四月十一日 金曜

午前七時過起床、今日モ早起きなり。起くときハ甚た睡たかりしも努力して起きたり。八時前より机に向ひて高德公ノ調書を書く。午前中に出来上けんとしたれとも容易に出来ず。午後も続行して四時までかゝり、四時より疲労を回復するため庭球をなす。六時前やめ食事入浴。夜又高德公ノコトヲ書く。之れにて大抵道筋ハ出来上る。明日より閑々に字句修正及清書をせんとす。斯くの如くにして本日ハ学校に行かず。学校に行かざるときハ矢張仕事ハ出来るもの也。本日気分爽快。十二時臥床。

四月十八日 金曜

午前七時半起床。先日以来毎朝早起也。八時学校ニ行ク。本日ハ皇典講究所ニ行キ文学史ヲ教ユベキ日ナリ。本日行クガ本学期ノ最初也。其腹案ヲ少シ考フ。十時ヨリ裏書ノコトヲ調ベントス（兵範記）。大ナル捗ヲ見づ。

午後一時—三時、皇典講究所。

三時半ヨリ研究室ニアリ。内田先生ヨリ、クルツールデヤゲデンワールトノ内ノ哲学史〔Wilhelm Wundt, *Allgemeine Geschichte der Philosophie*, 1909, (Paul Hinneberg (ed.), *Die Kultur der Gegenwart*)〕ヲ借用シ来ルベキコトヲ命セラレ、哲学倫理学教室ニ行ク。四時ヨリ五時半マデ扶桑略記ヲ見ル。食事、テニス、入湯、食菓物。夜勉強セントス。兵範記裏書整理セントスルガ何ダカ気が進マズ。慶運院日記ヲカキ、後又裏書研究ヲ初メントスレトモヨロシカラズ。

【寺院ノ人文的事業、兵範記、兎島高德。旁、知足院】

【受信 家ヨリ荷物ノコト】

四月十九日 土曜

八時起床。午前学校、裏書研究。内田教授来室。午後一時マデ。午後一時半昼食。芦野氏ト談話。三時半学校研究室ニ行ク。六時マデ。六時夕食。六時ヨリ下駄足袋ヲ買ヒ来リ、母ガ三条養福寺ニ来レルニ、預レル着物ヲ持チ行ク。カヘリ京極ヨリ回ハリテ寺町ニテ富永、西村、小藪、山城君ニ会ヒ、京極ニ行キ歌舞伎座前ニテ一寸活動写真ニ入ル。二ツホド見ルガ少シモ面白クナシ。十二時カヘル。十二時ヨリ読書。芦野氏一時前ニカヘリ来リ一時間バカリ話シスル。後、少時読書シテ臥床。

四月二十日 日曜

午前八時半、九時頃カ起床。近来時計狂ヒヲリテ時計ヲ用ヒズ時間少シモ分ラズ。午前中裏書整理。一向面白クナク且捗ラズ。午後、京都図書館楼上の京都史蹟会、大嘗会即位式ニ関スル陳列ヲ見ニ行ク。栗野君及藤田君<sup>〔元春〕</sup>ニ逢フ。カヘリニ栗野君ノトコロニテ話ス。五時帰宅。母本日宿ニタツネ来リタルコトヲ知ル。雨降り出タル故、大ニ困リテ尋ネ来リタル也。夕食後、母ヲ三条養福寺ニ訪フ。雨降ルコト切りナリ。明日ハ晴天ニナレカシト祈ル。カヘリテ裏書ノ整理スル。

養福寺ヨリカヘリ路ニテ西川にて哲学綱要〔桑本嚴翼、東亜堂書房1913〕、独逸語雑誌ヲ買ヒ来ル。哲学綱要中欧米ノ哲学界ノ印象ヲ読ム。

四月二十五日 金曜

午前八時前起床。八時半学校に行ク。オックスフォードノ社会法制史（ヒノグラドッフ）〔Paul Vinogradoff (ed.), *Oxford studies in social and legal history*〕ヲ読ム。兵範記裏書ノコト三十分許書ク。午後ハ皇典ニ行ク。文学史ノコトヲ云フ。カヘル時暖クシテ堪ヘ難ク感ズ。家ニカヘリタリ、四時也。新聞ヲ整理ス。夜間読書。扶桑略記読了。十二時就床。

六月

一、兵範記研究

一、寺院人文研究

暑休中マデニ発表

一、兵範（史学研究）

二、泰山府君（芸文）

三、忠実ト知足院（歴史地理）

九月マデニ発表

四、寺院人文

五、京都

六、陰陽道

七、古代氏族制

七月

王朝末ノ京都、本月中ニ仕上グ

知足院ト関白

豊太閤と能楽（大阪朝日）

九月一日 月曜

新涼早ク来リテ九月一日ハ已に涼氣著シ。身体健ニシテ精神亦快朗。暑中休暇中ナスヘキ予定ナリシ報告ノ文ヲ送リツゝアリ。（十月一日追記）。

九月九日 火曜

夜京都に入ル。本日高商、此学期始メテ出講。五日ヨリ開校ナリキ。

九月十日 水曜

研究室ニ行ク。内田先生ニ会フ。

九月二十四日 水曜

天王寺ニ行ク。

九月二十五日 木曜

北小路氏来宿。近衛家文庫ヲ移転スルコトヲ云ハル。皇典。

九月二十六日 金曜

皇典。

九月二十七日 土曜

二条城。

九月二十八日 日曜

二条城。

九月二十九日 月曜

二条城。

九月三十日 火曜

読史会、午後六時ヨリアリタリ。余ハ大阪ニ行ク日ナル故、大阪五時ニ出発シ七時半参会。

・実隆公記

・実隆書状

○三浦先生「穂積博士著由井正雪と徳川時代の養子法」ノ批評。

十月一日 水曜

本日午前八時半出校。九時頃ヨリ二条城。兵範記ヲ借りニ行ク。俤ニ載セテ帰ル。午後二時也。

四時ヨリ図書館ニテ川島君、荻山君、友枝君ト共ニ会ス。谷本先生送別会ノ下相談。

夕ヨリ散歩ニ行ク。本日昼食ヲ三時頃ニナシ、五時半頃夕食ヲナシタルタメ腹加減悪シシ故ニ寺町マデ散歩ス。諸道山河地名要記〔略〕ヲ彙文堂ニテ買フ。一円四拾銭。商業史要、永田健助〔思誠館1900〕、世界商工史ヲ買フ（集古堂）。

十月四日 土曜

京一中・京一商ノボール試合を見る。

十月五日 日曜

午前研究、王朝。古鏡展覧会を見る。夜読書。

十月六日 月曜

夜大阪にかへる。

夕方より鹿ヶ谷なる松本学長のところに挨拶に行く。不在。名刺をおきて挨拶してかへる。

大阪にかへれば雨少しく降る。

十月七日 火曜

雨ふる。大阪高商に行く。雨を冒して午後三時より大阪図書館に行く。五代友厚論のことを調べんため也。不幸にして曝書中にて休館。又雨に艱みつゝ家に帰る。

京都に帰らんとしたれとも、雨ふること甚く風さへ加はりて途中危険を慮り、本夜かへることを見合す。明朝早朝かへらんとす。

十月八日 水曜

大阪より帰る。此日五時に起き六時出発、八時十分前七条京坂電車停留所着。

本日は三浦先生か新建の研究室の設備につきて相談せんと云はれたるために、かく早く帰ることとなる。

十月九日 木曜

神道史。農業ノ神、保食神の事。

十月十日 金曜

満済対読。四時より谷本教授送別会準備委員会。五時半より大正庵及慶運院の朋友の会あり。会場麩屋町丸太町下ル巴。十一時頃かへり之れより王朝末京都の推敲をなす。大に面白くなりて来りたれとも時一時半なるを以て止む。明朝此の部分だけ書き上げんとす。

【受信 清君貞雄君、雑々】

十月十一日 土曜

朝在宅。八時より王朝末の京都、貨幣のところを推敲す。十時までするつもりなりしか十時前なりと思ひて学校に行きたるに十一時なり。ために芸

文の編纂会か十時よりありたるにおくれて甚た相済まず、十一時教官室に行けば、丁度今済みて友枝君と植田君ノ去るところ也。午後運動（一時一二時半）。二時半より満済准後の今まで対校のとき不明の部分を選び抜く。本夕三浦先生ノ紹介にて丁度入洛中なる史料編纂官補鈴木<sup>(二)</sup>氏に其れを見てもらはんと思ふため也。六時半までかゝる。夫れより三本木により月波楼に至る。三浦先生ハ丁度来られ居たり。藤田明氏と同宿也。九時半までに尋ぬ。

牧野信之助君来信（旅行ノ概要、莊園時代ノコト）。【岩橋小弥太君へ西域記送ル】

十月十二日 日曜

【三井寺、読史会採訪】

十月十四日 火曜

大阪ニ行ク日。高等商業ハ修学旅行中ニテ休ミ也。知ラスシテ行ク。案内ナカリシ為メ也。

三時出発、五時半集会所ニ行ク。送別会出席者三十四名。会費壹円貳十銭。寄付五円也。本夕ハ甚た盛会也。

【谷本教授送別会（午後五時半）】

十月十五日 水曜

皇典。

十月十七日 金曜

朝読書。読史会記事ノ原稿ヲ清書シ送ル。午後一時ヨリ二時テニス。入湯。少読書。夕食。夕、五代論ヲカク。

【内田教授講演、幕末ノ京都梗概、新聞紙上ニアリ。七卿西竄五十年祭妙法院ニアリ。土方久元伯ノ講演モアリ】

十月十八日 土曜

九時学校ニ行ク。本日奈良女子高等師範学校歴史

地理科生徒十四五名来ル由ニテ国史研究室ニテ陳列アリ。手伝フ。十時頃来ルト云フ予告ハ変シテ十二時半トナリ、夫レにテ待ツ。同校教授田中一元氏来ラル。三浦先生ニ紹介シテ頂ク。午後同生徒ノ校舎ヲ観覧スルニ案内ス。地理研究室ト図書館ヲ案内ス。

本日内田寛一君、有高巖君ト紀念写真帖ノコト相談。カヘルトキ荻山君ニ出會フ。共ニ宿ニ帰り五時マデ話ス（三時ヨリ）。午後三時昼飯ヲ食フ。

夕、寺町マデ原稿紙ヲ買ヒニ行ク。堺君同道。丸太町ニテ内外近世商業史〔平沼淑郎講述『近世内外商業史』早稲田大学出版会1909カ〕、商品地理〔池本純吉『日本商品地理』同文館1905カ〕、二冊購求（四十銭）也。Meyrノ商業史〔Mayr.Richard『世界商業史』高尾常磐訳、博文館1912カ〕ヲ讀ム。時ニ夜深更。

【受信 松岡君手紙来ル。富永君】

【紀念写真帖ノ相談会】

十月十九日 日曜

晴天、本日天皇皇后<sup>〔ママ〕</sup> 陛下入洛セラル、日也。

八時過起床。午前中、五代友厚論ヲ讀ミ直シ清書ス。午後二時前マデ同様。二時ヨリ散髪ニ行ク。丁度砲声ノ遠クニナルヲ聞ク。両陛下ノ着京ナルヲ知ル。御苑内ニ向ヒシガ丁度入御ノトコロニテ鳳輦已ニ入ラレタリ。走りタリシモ甲斐ナシ。龍顔ヲ拝スルヲ得ズ。散髪ノ後帰ル、三時半。

ブッヘルノ原始人民ノ經濟狀態〔Karl Bücher, *Die Entstehung der Volkswirtschaft*〕ヲ讀ム。夕食後亦五代論清書。九時ヨリブッヘルヲ讀ム。腹式呼吸ヲヤル。昨臥床前ニヤリタルトコロ心地ヨシ。本日朝食前ニモヤル。

十月二十日 月曜

【新研究室ノ設備ニツキ相談アル筈】

十月二十四日 金曜

【二十四、五日頃妙法院ニ行クコト】

十月二十五日 土曜

【松本<sup>〔赤太郎〕</sup> 教授送別会（午後五時頃ヨリ）】

十一月一日 土曜

〔以下朱筆〕文科大學學友會大旅行。本日午前六時五十分出發。十時頃松本着也。中央線ニテハ、高藏寺多治見間ハ高藏寺川ニ沿ヒテ進ミ行クヲ以テ風光甚ダ美ナリ。又坂下駅ヨリハ木曾ニシテ御料林ノ深緑ノ内ニ紅葉、黄樹ノ点綴スル様實ニ言語ニ絶ス。松本ニ着キタルハ十時頃ニシテ、已ニ寢覺ノ床ノ見ユル處ヨリ夜ハ冥クシテ窓外ノ景色モ見ルコトヲ得ズ。永ク汽車中にアリタルコトトテ皆飽キテ寐ルモノモアリ。サレトモ汽車ユレテ悠カニ寐ルヲ得ズ。〔以上朱筆〕

十一月二日 日曜

〔以下朱筆〕午前四時半頃ニ起コス。本隊善光寺行ハ七時半出發ナレトモ、諏訪行ノ別隊ハ七時出發ナリ。朝食後尚少シ時間アレバ松本城ヲ見ニ行ク。昨夜松本小学校ノ演説ニヨレバ松本城ノ天主閣ハ日本ニ於テ最も高キモノ也ト云フ。今ハ公園トナレリ。天主閣ハ平地ニ屹立スルモノニシテ其威風昂ラズ。何トナク見スボラシキ感ヲ与フ。周圍ニアル曲郭ノ石垣モ低ク堀モ小サシ。本日ハ中学校ノ運動会ニテモアルニヤ、天主閣下ノ広場ニハ埒ヲ回ラシテ旗竿ナド立テアリ。天主閣登料金參銭。登レバ西方ニハ乗鞍ノ連山ヲ見得ル。前山アル為メニ纔カニ乗鞍嶽ノ峻峰ヲ見ルノミ。甚た壮大ナルモノ也。九時半諏訪ニ着ス。十四名ナリ。松本・鈴木<sup>〔虎雄〕</sup>ニ先生同行。温泉ニ浴シ昼食ヲナシ城ヲ見テカヘル。塩尻ニテ本隊ト合ス。六時頃福島着。〔以上朱筆〕

十一月三日 月曜

〔以下朱筆〕七時頃宿ヲ出テ興禪寺ニ行キ義仲ノ塔ヲ弔フ。塔ハ宝篋印塔ニシテ本堂ノ裏手ニアリ。

新シキモノ也。寺ニテ宝物ヲ見ル。覚明書状一通（写シトル）、当時ノ僧ニシテ狐ナリシモノガ書クト云フ般若心經、義仲所有甲冑、縁起、繪旨（享保妙心寺住持職ノコト）等アリ。是レヨリ上松駅ニ向フ。棧ノアルトコロ最モ景色ヨシ。四哩ヲ歩行シ上松駅ニ着シ、尚進ンデ寢覚床ニ行ク。十三町ナリ。十二時此処ヲ立チテ十二時四十三分ノ汽車ニテ京都ニ向フ。十時五十六分着。一行ニ分レテ大阪ニ行ク。十二時着。家ニカヘレバ十二時半ナリ。  
〔以上朱筆〕

十一月四日 火曜

〔以下朱筆〕大阪高商ニ行ク。富永君ノ会社ニ行キ忘レ物ヲ渡ス為メ也。富永君不在。置キテカヘル。  
午後十時夜ノ準備手伝フ。六時出発、京都ニ向フ。牧野君手紙。茶ヲ金沢ニテハ多ク植ユルコト。読史会ニテ近世開拓ノ特質ト云フ題カ人身犠牲<sup>〔ママ〕</sup>ノニツキテノ愚見カラ論ゼント。〔以上朱筆〕

十一月五日 水曜

【〔朱筆〕「芸文原稿ヲカクコト」】

十一月八日 土曜

多田神社行。原、喜田、三浦教授。箕面瀧安寺前ノ宿ニ泊ス。木崎好尚。  
【是レヨリ以後ハ十二月十四日追記シタルモノナリ。  
但シアヤマリハ無之】

十一月九日 日曜

勝尾寺行ク。寺ノ僧演説ス。夜カヘル。

十一月二十四日 月曜

此日午後四時ヨリ読史会準備相談会ナルモノヲ開キテ在京諸子ノ来会ヲ求メテ議定ヲナス。小生其プログラムヲ読□タリ。

十一月二十五日 火曜

高商。

十一月二十六日 水曜

皇典ニ行ク。朝ヨリ準備会アリ。原博士送別会。日暮れたれども尚準備ヲナス。米沢君ト共ニ原博士ノ送別会ニ行ク。

十一月二十七日 木曜

夜マテ広告ヲカク。朝モ広告ヲカキタリ。

十一月二十八日 金曜

午前、演題及プログラムヲ書ク。又陳列品ノ目録<sup>〔ママ〕</sup>印刷スルコトヲ取ハカラフ。午後余習ヲスル。

十一月二十九日 土曜

読史会ナリ。寒シ。

十一月三十日 日曜

午前清原君ト共ニ文展ヲ見ニ行ク。午後栗野君トコロニ腰ヲスヘル。夜御馳走ニナル。傘ヲカリテカヘル。雨フリテ寒シ。清原君、栗野君トコロニトマル。

十二月二十四日 水曜

【ニュートン祭大学ニテアル筈（大朝）】

大正二年当用日記補遺

大正二年一月十三日

午前六時半

七時

七時半朝食

八時 出校

十時

十二時

午後十時半執務休止

<sup>〔ママ〕</sup>午前 十一時臥床。

|        |           |     |   |
|--------|-----------|-----|---|
| 十月     | 文具箱       | .50 |   |
| 七時起    | 櫛         | .25 | ① |
| 八時食事   | カラ        | .23 |   |
| 十時 商業史 | 紙         | . 6 |   |
| 十一時 臥床 | 〔欄外数字一省略〕 |     |   |

大正二年 二月収支一覧表

収入

26〔26円、以下同様〕

10

〃 11

3

支出

万年筆 2.5〔2円50銭、以下同様〕⑤

名札入 .28

靴墨 .10

汽車賃 4.02 ⑤

車代 .40

桃山せんべい .22

〔鋼カ〕 鉋 価 .38

埴輪 .22

電車 .18

鏡 .17

〔香カ〕 □油 .17

齒磨 . 5

赤帽 .10

牛肉代 .35

弁当（静岡） .25

電車 . 9

車 .10

荷物アツカリ . 5

湯 . 3

石鹼及箱 .24

大正二年 三月収支一覧表

支出

牛乳及パン .14〔14銭、以下同様〕

印紙 . 75

画ハカキ .10

牛乳 . 4

印紙 . 6

祝儀（宿） 1.00 ①

女中心付 .50

本（独乙） .15

5日

昼 .40 ①

電車 □.□0

下駄 □.13

ハガキ .10

6

昼□及□□ 5.0

電車

干 . 2

図書館 .10 ①

印紙

7

昼飯 .40

鉛筆 .12 ⊕

電車 .10

8

電車 .10 ①

ノート .14

夕食 .24

|     |     |   |
|-----|-----|---|
| 本代  | .77 | ① |
| 図書館 | . 5 |   |
| 散髪  | .20 |   |

〔欄外数字一省略〕

## 大正二年四月収支一覧表

## 収入

20 + 10, + 1 x

## 支出

|      |       |               |   |
|------|-------|---------------|---|
| 9〔日〕 | 博物館二回 | .10〔10銭、以下同様〕 |   |
|      | ハカキ   | .10           |   |
|      | 西洋料理  | .20           |   |
|      | インク   | .10           |   |
| 10   | 昼食    | .50           |   |
|      | 電車    | .10           |   |
| 11   | 遊就館二人 | .10           | ① |
|      | 絵ハカキ  | .10           |   |
|      | 郵便印紙  | .10           |   |
|      | ソバ    | .28           |   |
| 12   | 電車    | .10           |   |
| 13   | 印紙    | . 75          |   |

〔欄外数字一省略〕

## 大正二年六月収支一覧表

|      |               |
|------|---------------|
| 1    | .12〔12銭、以下同様〕 |
| 京電切符 | .60           |
| 京坂   | 2.45          |
| 市電   | . 35          |
| 大学   | 20            |

〔欄外計算式一省略〕

## 住所人名録

宇治山田市本町 大正二年四月此ニ転居ス

清原貞雄

## 大正四年当用日記（東京博文館発行）

一月七日 木曜

## 【藤井氏芸文申込／鹿田、東京目録申込】

三月十二日 金曜

【津田君の宅に三高会かある報知を得たか今日欠席状出した。なるべく事を簡単にするやうにせなければならぬことよ。明日ハ歌でも作りませう】早くも三月か来た。日記は白らへと何も残されてゐない。草茫たる生活であった。たゞ忙しく忙しく思ふて日を暮してゐたので何もかも苦しいなつた。前田慧雲の余裕ある生活〔『楽しい人生』（大正名著文庫）至誠堂1915カ〕と云ふものを読むやうに内田先生から注意せられたか、是れを読むと何んだか多少気かのびた。つまり余り多く仕事をしやうとすることかいけないので、気楽にやるべきで世間のことに九分位の力でやつてゐて宜い加減である。此頃ハ漸く落付いてきた。日記帳でも書けることハ余程落付いた証拠である。独乙語の日課でもやってゐると世の中から離れて気楽である。明晩もやりませう。十二時十五分臥。

三月十四日 日曜

日曜ですか朝ハさむい。案内記の原稿か忙しいので何もせずになにかゝつてゐる。十時半頃栗野君来宿、晚餐招待せらる。午後案内記の原稿をかく。六時前清原君来る。相つれ立ちて栗野君宅に行き牛肉会を開く。岡崎氏酔ふ。かへり来りて原稿の続きをやる。頭の工合よろしからずして一向捗らず。世に満たぬ思ふ。歌を作らば若かへる哉。

三月十五日 月曜

朝をそく起く。原稿かく。十一時頃魚澄君来訪。<sup>〔惣五郎〕</sup>初めて也。案内記原稿のことに御閑になつたから少し助けると云ふのでいろへと御頼みをする。午後学校に行く。夜栗野君宅に行く。暫く学校にて三十分原稿かく。かへりて勉強せんとしたれとも昨夜来あたま悪し、いゝ加減にして臥床。十二時過。

十三時過臥床。

三月十六日 火曜

今日より旅行案内記第二期に入る。学校にて京都府全図見る。魚澄君の宅に行き旅行案内記原稿整理につき御手伝下さる様御願ひす。直ちに承諾あり。<sup>〔徳門〕</sup>石神君に途にて逢ふ。学校に行く途上なり。欧米の人類学雑誌の購入を諸教授に依頼したるが、石神氏ハ<sup>〔庄太郎〕</sup>米田先生に願はれたるに同研究室の方には金なし。米田先生ハ尚他二、ロンドン ロイアル インスチテュート オブ オントコポロジーかよしと云はれたり。又氏云く、<sup>〔幾多郎〕</sup>西田先生はフオルクロアか初巻より古本にて出て居るのを幸に購入することを承諾せられたりと云ふ。図書館にてオーストラリアの原住民ノコトニツキテノ著書を調査す。午後、旅行記のことにつき三浦先生・魚澄君と共に書庫三階にて相談会を開き引きつゝ、原稿整理。夜間同様。九時より帰宅、読史会記事原稿カク。一時臥床。

三月十七日 水曜

読史会例会。内田寛一君、南洋に於ける日本人の遺蹟。内田教授、早稲田学報の<sup>〔早苗〕</sup>高田学長の英国劍橋より牛津に至る視察に就ての批評にて、日本にても五山が文権を握り教育に与ること久しく続かば英国の両大学の如く宗教臭く僧院しみたる風のものとなるか否かと云ふことに就てなり。日本にては徳川時代の初期と明治維新に革命に近き教界の変動があったことを注意されたり。

三月十八日 木曜

旅行案内をやる。三浦教授は出校なし。読史会記事原稿は昨日来、昨日ハ読史会に渡さんとして渡し得す。今日は又三浦教授出校なき故に校閲を願ふを能はず。夜かへるとき其机上に置く。

三月十九日 金曜

朝八時頃に起きた。学校にては旅行案内を専心やる。午後九時より自宅にて<sup>〔Kurt Breysig〕</sup>ブライシツヒを読む。独乙語少し読む。読史会記事送る。

四月二十七日 火曜

清原君姉様病気に付、帰国の葉書到来。滞在ハ大分県東国東郡国東町栗林千五郎方。葉書ハ山陽柳井津より出ス。

四月二十九日 木曜

靖国神社祭礼ニ付休学。

大正四年当用日記補遺

商業史講義予定

一、 葡西蘭ノ東洋貿易

特許会社

日本徳川時代ノ貿易

支那印度

二、 露英仏独の商業発達

三、

(四) Russiaノ経済事情

(五) America

⑥ 支那

(六) 維新後日本ノ発達

住所人名録

名古屋市南区熱田東町字外土居四〇 寺沢重吉  
宇治山田市一ノ木町一六

大正四、四月二十二日報知 井上以智為

〔挟み込みメモ二枚（人名と数字）一省略〕

大正八年当用日記（東京博文館発行）

一月五日 日曜 晴

【講<sup>〔義〕</sup>□。歴史地理原稿。日本古代文化。

返信。牧の、今村、年賀状返】

京都に帰る。夕五時過家を出づ。

一月六日 月曜

Hoernes, <sup>〔ママ〕</sup>Lildene Kunst in Europa [Hoernes Moritz, *Urgeschichte der bildenden Kunst in Europa von den Anfängen bis um 500 v. Chr*カ]

岡崎氏方へ行ク。十時過迄ハナス。

一月七日 火曜

Hoernes

栗野氏方ニ行く。

一月八日 水曜 晴

【講、史、歴地】

午前九半―十散歩、十時半ヨリ講義。午後北坊ノ家ニ行ク、かへる。岩橋君宅ニ行キ御伽草子壺返却。心ノ花もらふ。岡崎・大溝<sup>〔惟一〕</sup>氏来訪ありしも不在。湯浴。太古文化考ヘル。十二時臥。

一月九日 木曜 雨

【大溝、岡崎来】

世はすゝみ人はいゆけどわれのみはおくれてある  
かとさびしきこゝろ  
枯はてし心は君ををもへども底ひに湧くよろこび  
ばこず

一月十一日 土曜

午前図書館。仏教美術の沿革研究と其歴史。満済校正。

一月十二日 日曜

【栗野君来訪、不在中】

ヴントノ民族心理学〔桑田芳蔵、文明書院1918〕読。  
Chamberlain, The child and childhood in Folk-thought [New York, 1896]

一時ヨリ大阪ニ帰ル。夜十二時<sup>〔既〕</sup>帰来。京坂中富枝。

一月十三日 月曜

日本古代文化原稿。Voltaire, Essai sur les Moeurs [Essai sur les mœurs et l'esprit des nations] ノ内ノ日本ノ部  
及ビ序論等ヲ読ム。

午後史蹟調査ノ唐人雁木ノ研究。朝鮮来聘記、渡  
辺蟻洲ノもの研究。コレハ渡辺蟻洲自筆の見聞記  
なること判明して、従前少々疑はしく思ひ居たる  
諸点を闡にし得たり。この書は延享五年朝鮮信使、  
淀ニ来るときの見聞記なり。中に自己のことを記  
せり。淀の饗応図も同筆なり。行烈<sup>〔列〕</sup>図も同筆なる  
べし。従って行烈図ハ他にある行烈図とは別のも  
の也。何れも自筆本なり。

夜ボルテール読ム。原稿記ス。満済校訂。

一月十四日 火曜 晴

【原稿作る】

大溝惟一君本日出発、東京大学言語学研究室に転  
任のこと九日夜来宿の節物語しゆへ、本日早朝大  
溝氏の下鴨の宅訪問、出発時刻間合すところ、夫  
人出来つて大溝君死去したる由云ふ。驚愕す。本  
日午後一時密葬すべしと云ふ。十一日夜中突然発病、  
夫人は二階の物音と次で起る呻き声に上り見るに  
已に意識明ならず、半身不随の症状を起し、翌日  
賀屋<sup>〔降吉〕</sup>博士来診ありしも重態、次で逝去。津田、岡  
崎氏に電話、午後葬送す。

夜栗野氏来ル。原稿打合。原稿少し書く。満済校正。

一月十五日 水曜 晴

午前原稿、午後同様。夜史蹟調査ノ朝鮮来聘記読む。  
十一時臥。満済校正。

一月十六日 木曜 快晴

朝六時前目覚、又入眠。八時半起床。

武専開講。一時間講義。武士勃興マデ。

午後南禅寺ノ家ニ行キ掃除す。七時前までかゝる。  
帰来、沐浴、史蹟。朝鮮来聘記読む。満済校正。  
十二時半臥。

一月十八日 土曜

午前江馬氏ニ電話にて大溝氏ノこと言ひ、香資のこと言ふ。江馬氏ハ独りにて香資を出したりと云へり。故ニ小生立替之こと言はず、二重になりたれどもそれにてよろし。

今西氏ニ史学研究会講演二月に願ふこと頼む。承諾されたり。

一月十九日 日曜 雨

午前片付、午後上代文化書く。梅原氏来、史蹟調査ノ報告ニツキ協議、六時かへる。夜上代文化原稿書く。十一時半臥。

一月二十日 月曜

【桑原先生ニ今西氏講演のこと言ふこと。朝原稿。

夜史蹟。昼大学講原稿、史原稿】

朝講原。午後研究室、栗野氏行く。夜八時半まで梅原氏と史蹟のこと書く。

一月二十一日 火曜

午前続日本紀読む。午後府庁行く。夜文化原稿書く。

一月二十二日 水曜

午前文化書く。ヴント読む。講原稿ノ為め研究室に行く。六時、参考書持かへる。夜読書。本朝通鑑。

一月二十三日 木曜 晴

午前起床後、武専の準備。武専講義後帰宅。午後講義原稿書く。武専ハ秩満解任ノ徒ノコトヲ云フ。講義ハ貨幣使用か社会問題ヲ惹起スルコト。

夜岡崎氏宅十時半迄。夜小島君ヲ訪ヒタレトモ感冒ニテ臥床ノ由。<sup>〔祐馬〕</sup>

一月二十四日 金曜 後雨

午前文化の文訂正。午後史蹟の写真版撮影せしむる為め研究室に行く。夜訂正。午後、岡崎君来訪不在。

一月二十五日 土曜 雨

【午後今宮神社ノ天治ノ仏像見ニ行クコト】

午前古代文化の原稿字句修正了。午後栗野氏宅マデ持行ク挿画ニスベキモノ二三未だ出来上らざる為め、大学に行き朝鮮古蹟図譜第二を借出し、考古学研究报告第一冊を持行き桑名に複写を命じたり。夜、北野天神に参詣したり。帰後満済校正。

一月二十六日 日曜

【〔朱筆〕「×」黒板博士ニ手紙出スコト。

大島徹水氏来宅アルベシ】

〔以下朱筆〕書斎掃除。午後岡崎来、大島氏来。五時過頃迄談話。大島氏要件ハ北野御前通阿弥陀寺ノ慈雲和尚ノ史蹟ヲ調査スベキコトナリ。

夜三浦先生宅訪。富森氏在り、後又橋川氏来ル。故ニ用件言ハズカヘル。

日本儒学史〔久保天随、博文館1904年カ〕。満済校正。〔以上朱筆〕

一月二十七日 月曜

【〔朱筆〕「観音寺。黒板。大阪中村盛文堂】

書斎掃除。午後学校。夜満済校正。

<sup>〔貞澄〕</sup>日野講師宅火災之為メ、令息令嬢五人惨死ノ御見舞として烏丸出水の和田琳態氏邸御見舞に行く。杉本哲三氏宅かへりよりて大溝惟一君ノ追悼会のことを相談。梅原末治君ノ独乙語教授のこと依頼したれども、杉本君承引せず。

一月二十八日 火曜

午前栗野君来、午後四時迄居たり。史蹟実地踏査、国民教化の為め講習会開催のことを相談す。

午後岩橋君宅。归来後、本朝通鑑。

一月二十九日 水曜

午前読書。午後学校。日本鉱業志〔大橋新太郎『日本鉱業誌』1911カ〕、懐風藻見ル。七時かヘル。夜原稿

作。

一月三十日 木曜

午前武専教授、午後講原作。夜三浦先生宅例ノ件御断り申上ぐ。満校正。

一月三十一日 金曜

朝手紙かく。

黒板博士、史蹟調査序言依頼。

中村盛文堂、史林印刷を早くすることを言ひやる。

観音寺、秀次秀頼書状借受の件依頼。

読史会、講演準備。

夕栗野氏宅、史学地理学同<sup>〔ママ〕</sup>攻会のものよりて、講習会、実地踏査ノこと相談と云ふによりて行く。  
<sup>〔清之助〕</sup>植村、<sup>〔直勝〕</sup>中村二氏会。

読史会。<sup>〔登〕</sup>鈴木、三浦先生の講演あり。小生ハ時間なきたためやらず。鈴木氏郷土の話五十分。三浦博士小牧ノ役ノ話二時間あり。

二月一日 土曜 晴 暖

午前本通読ム。満校正。

午後、散髪、沐浴。かへり路岡崎公園にて大阪の浦野義隆君に会ふ。府会のことなど話す。

夜坂口先生宅、三十分。岡崎君宅訪問。十一時かへる。近日疲れたる感あるため眠む。

二月二日 日曜 晴 暖後くもり雪

【昼今宮神社。夜史、満。岡部之戒禅師来状】

今宮よりの帰途、船岡山の石仏を見に行く。近世のものなるべし。石面葎煙してよく見えず。寒気骨にしみ雪ふること屢々なり。

午前朝遅し。本朝通鑑見る。

午後今宮神社にある天治の石仏を見るため梅原君を誘ひ行く。十二時前家を出で、正二時神社着。石仏、古地図二葉、古文書見る。地図ハ徳川初期のものならん。一枚ハ隆忠と云ふ社務の名あるによりて寛文の頃なるを知る。他も先づ同じ頃ならん。

古文書ハ建武のもの最古。大抵ハ足利氏の御教書にて馬を寄進のとなり。夜読書。一時半臥。満校正少し多くやる。

二月三日 月曜

【雪積む。夕史蹟調査のこと調査。聚楽第ノこと調査】

午前朝遅し。午後大学に行く。黒川真頼全集、新唐書等読む。

一時頃大鐙閣の面家莊吉氏来る。文化史図録のこと相談し催促さる。日本歴史図録、法隆寺大鏡壁画のものなど見せ、大に立派なる図録を作製すること我国にて必要なりと云ふ。

夜満校正。少し読書したるが頭重く気分勝れさる感ある故、早く臥床十一時過。

二月四日 火曜 晴 寒強し

朝遅し。朝昼在宅読書。夕散歩、四条迄行く。夜満済校正。

二月五日 水曜

講義原稿少し書く。午後大学三時より七時迄あり。八時帰宅、岡崎君来。十時過頃雑談。小散歩、其より講原稿。二時頃迄かゝる。

【武専校長劉須氏退職、西久保弘道氏新任】

二月六日 木曜

朝遅く起き武専行く。其後大学図書館にて調査する。五時講義済み帰宅。散歩。十二時半臥。

二月七日 金曜

午前。

午後大学。満校。武専校長ノ送迎会。八時帰、史蹟調査。聚楽第ノ史料蒐ム。

八時前送迎会よりかへり中村氏による。不在。本かりてかへる。

史料綱文かりてかへりたるものよみて聚楽に關す

るもの集む。

二月八日 土曜

【聚楽校、図書館、新村／遠足／夜、米国使視察談。  
講原。武専原。満】

朝東山中学ニテ津田貞祥氏〔府立五中教諭〕ニ逢ヒ、  
離宮八幡神社古図借用を依頼す。礎石のことは都  
名勝所図会にもありと云ふ。

其より大学に行き、史料綱文かへす。十一時より  
岩橋君と共に聚楽小学校に行き聚楽第の古図を見  
る。海北友松の原図より出でたりとする天保のも  
のを更に写したる也。古文書、秀吉朱印、家康朱  
印を有す。聚楽町の記録もあり。

奥村氏来り談話。湯に行く。食後暫くして読書。  
後臥床に入りて満済校正。十二時過。

【午前より雪ふりてつもる】

二月九日 日曜

朝早起、表具師来ル。襖等張かへの為也。続日本  
紀読む。

午後食後、日本時代史読みて秀吉聚楽築造の条読む。  
岡崎氏来る。電灯つくまで居る。雑談。後時代史  
と続紀読む。夕食後四条迄散歩、十時より読書。  
満校如例。

【朝雪白し】

二月十日 月曜

午前。大学に行く。中村氏家ニ借りたる本を持行く。  
家人不在に付、大学まで持行き中村君に言ひ持帰  
りのこと頼む。

史蹟調査聚<sup>〔ママ〕</sup>落第のこと調査。归来、夜散歩せず  
読書、続紀。十二時寐。

二月十一日 火曜

午前読書。午後一燈園まで行く。<sup>〔西田〕</sup>天香及夫人とも  
不在。大工来。霊異記読。手紙、栗本。

夜大西氏、奥村氏方来。

十一時より講義原稿作る。二頁書。余目録とす。  
一時半臥。

二月十二日 水曜

午前講義原稿、午後同。手紙書く、家。

北野神社宮司ニ歴史と地理送る。夜小散歩。講義  
原稿書く間寒し。二時頃過。

二月十三日 木曜

九時起床。十時半武専。一時半より下調。

夜買物に行き乱れ籠、ペン皿、ピン等買ふ。十二  
時臥。

学校にて大山崎観音寺より来る書状、文書借用の  
もの也。

二月十四日 金曜

午前家にて押入れに使用する夜具の台を作る。午  
後大学史林の編纂会あり。五時了、帰宅。

小島祐馬君来、十時迄談。病気快癒されたる故なり。  
沐浴に行く。十一時かへり読書。

二月十六日 日曜

午後大文字山ニ登ル。五時かへり、浜寺電話。十  
時過家出ラレ大阪ニ行ク。十二時天満橋着。一時  
前家ニカヘル。

二月十七日 月曜 快晴

八時過ナリて起床、湯ニ行き、十二時着衣服。二  
時半過高津湯豆腐屋ニ行ク。式四時頃初マリ写真  
トリ宴飲アリ。九時半自動車ニテ梅田駅ニ向フ。  
十時五十六分ノ汽車ニテ出発、七条駅十二時、自  
動車ニテ自宅着。一時就床。

二月十八日 火曜

朝起床遅し昼。奥村氏及一燈園挨拶に行く。坂口  
博士よりの祝品来りありたり。

二月十九日 水曜

原稿。

二月二十日 木曜

午前小散策。小島君ニ出逢ふ。報告をした。

買物に行く。

〔朱筆〕「満校」

二月二十一日 金曜

【〔朱筆〕「写真機。<sup>〔奥道〕</sup>近重原稿送附。出張】

史林編纂会（予備会）。

二月二十二日 土曜

【山城ノ図持行クコト。桑名来。】

雨降りたる故山城図持ち行かず。

午後史学研究会あり。岡崎氏と共に栗野君宅に行く。

国民教化講座のこと談話。千本今出川の牛肉店に入りて相談す。二氏に結婚のこと話す。

夕より夜中雨ふる。明日谷本氏行くこと能はさるべしと思ふ。

二月二十三日 日曜

朝遅く坂口氏行く。一家中風邪の為め臥床さる。名刺のみ出してかへる。途中より雨霽れたるを以て谷本氏に電話にて断ることをやめて、停車場に向ひ芦屋に行く。丸太町寺町ノ電車のりかへ場にて栗野君に会ふ。紹介す。かきやにて菓子カステラを買ひて行く。芦屋より大阪にかへり天然寺による。十時頃なり。大急にて京都行に行き、一時頃帰宅。浜寺は母病気の報ありて行かず。

二月二十四日 月曜

史林編纂会あり。小生分担の原稿、朝研究室にて書きたれとも出来ず。午後三時より編纂会。三浦、浜田、其他委員出席。三浦博士に結婚のこと申す。岩橋氏と共にかへり、黒谷前の通りに出る手前のところにて結婚のこと話す。岩橋氏略承知したと

云ふ。是れは小使森口か両三日前（水曜か）に宅に回章持ち来るとき見たりと云ひ、且つ郵便の来たる為めに知ると云ふ。

原・内藤・喜田三先生に書状かく。

二月二十五日 火曜

雨降る。

二月二十六日 水曜

原稿書く。

二月二十七日 木曜

講義、武専、大学奴婢。寺町まで行く。

三月一日 土曜

大学記念日。道子、講演聞きに行く。浜田、<sup>〔源治郎〕</sup>浜部氏講師。ポンペイ発掘。浜部氏、飛行機にのって。大溝君追悼会。国民教化講座第一回。

三月二日 日曜

朝から榊、藤代、栗野、清原、岡崎氏<sup>〔ママ〕</sup>ノ行く。

三月三日 月曜

大学にて研究室にて研究。本日ハ朝鮮国李太王の国葬にて休学の日なり。研究室には喜田博士あり。原博士とは正門入口の所にて出逢ふ。三浦博士又研究室に来らる。史蹟調査のこと調査。

三月四日 火曜

大学に行く。言経卿記<sup>〔籍〕</sup>尋ね書籍整理をする。かへる。中尾松枝氏来られあり。夕食を共にす。共に出で、送る。読書。

朝、三浦博士著法制史の研究〔岩波書店1919〕の原稿書き終りて三浦博士手元まで出す。

三月五日 水曜

原稿書く。

夕方谷本氏来らる。書状かねて受取る。午後三時頃、断の葉書来る。夜に入りて谷本氏来訪、断り状出したること忘れられたりと云ふ。花専の軸祝として賜ふ。表装も済みたれはとて即時床に懸く。一時半臥床。

三月六日 木曜

朝少し起きること早し。

武専一平安末期

大学一平安期□□文化と其特質

史蹟調査、参考書持かへる。

中桐確太郎氏宛手紙かく。

三月七日 金曜

学校に行く。史蹟調査のこと。満済やる。

三月八日 土曜 雨 暖

大学。夜天香氏来る。風呂に行く。十二時臥床。

三月九日 日曜

六時起く。大阪に行く。七時半出発。八時十分四条より九時半天満、十時前梅田。大西母出逢ひ、中川耒助氏行く。岩田文雄氏行く。岩田氏にてすし御馳走になり大阪にかへる。大西母は間もなく帰浜。夜、雨少しやみたる故、買物に行く。灘万にてかま鉾、厚焼かひ、大西母の土産にする。

三月十日 月曜

朝沐浴。九時出発。車にて清田、加藤に行き、直ちに難波より浜寺に行く。十二時なり。昼飯御馳走になり、永江、富永、今井、油谷行く。今井、油谷にてハ上りて談話す。九時頃かへり泊す。一時<sup>ママ</sup>床臥。

三月十一日 火曜

【自宅には<sup>〔亮三郎〕</sup>榊先生より祝品。宇野、高階来る、不在。天香氏来る。岡崎氏来る。岡崎君ハ本日も来る】

八時起床。湯に行き朝食後用意して出発間際、小林婆さん来る。二時頃出発。四時頃着。電車中にて満校正。夜日記つける。

三月二十二日 土曜

【黒板氏手紙】

三月二十三日 日曜

内田先生・原先生ニ挨拶ニ廻ル。カヘリ坂口先生宅ニテ談シス。九時カヘル。

三月二十四日 月曜

辻善之助・八代国治二氏、東京ヨリ来学ニ就キ八時大学ニ行ク。

三月二十五日 火曜

辻善之助・八代国治二氏歓迎会。

三月二十六日 水曜

在宅。

三月二十七日 木曜

午前大学。二時頃カヘル。中村君不在中来ル。

三月二十八日 金曜

中村君学校ニテ逢フ。

三月二十九日 土曜

朝学校、仁和寺借用文書撮影。二時頃終り、其レヨリ国民教化講座ノ準備。六時カヘリ七時家ヲ出テ家政女学校ノ会場にテ八時半より講演。十一時カヘル。少シ用事シテ臥床。

三月三十日 日曜

午後、中村直勝君夫人同伴ニテ来訪アリ。夜読書、原稿少シクカク。

三月三十一日 月曜

三上庄次郎（活版所）に行く。京都府史蹟勝地調査会報告印刷ノ件ノ為メ也。

午後、三浦先生・桑原先生まで挨拶ニ行ク。三浦先生不在、奥様玄関にて出られ挨拶ヲ受ケラル。桑原先生一時間余諸々ノ物語アリ。カヘリ岩橋君宅訪フ。夜原稿書ク。

四月二日 水曜

午前、聚楽城研究、満済准后日記校正、投函。午後大学に行く。四時ヨリ聚楽小学校ニ行ク。中村校長ニ会ヒ太閤朱印撮影ノコト願フ。木戸竹次郎氏ノ案内ニテ梅雨ノ井、聚楽城ノ庭園中ノモチノ木、濠池ノ跡等ヲ見ル。八時頃カヘル。疲労。読書、原稿。

四月三日 木曜

午前机辺掃除、手紙書ク。午後仁和寺に古文書（延暦売券等、公験目録）を返す為めに行く。道子同道。夜八時半帰ル。十一時より聚楽第ノ原稿カク。一時過臥床。

四月四日 金曜

午前。  
午後、飯島象太郎君来訪、間もなく梅原君来る。夜稍静平にして研究上ノ事項考按。

五月十五日 木曜

講義 延喜天曆之話。

五月十六日 金曜

【特別研究 道長ト其時代（洋野紙ニカク）】  
五時起床。

六月十五日 日曜

知恩院夏安居高等講習会。国民思想史概説。

六月二十二日 日曜

【午前】

六月二十三日 月曜

【史蹟予習。午前十一時府庁。午後大学、満済。  
午後五時夕食。午後六時国民教化講座、八時済九時帰宅】

七月一日 火曜

午後二時頃大島徹水師来。明日平和祝祭トシテ家政女学校ニテ講演頼マル。其中ニ岩橋君来。

七月四日 金曜

清原君神道史〔清原貞雄『神道沿革史論』大鑑閣1919〕学校ニ来テアリ。読ム。御堂関白記読ム。栗野君宅ニ世界大戦史返戻旁清原君ノ神道史ヲ渡ス。魚澄君ノモノモ渡シ置ク。

夜満済准后日記校正。清原君ニ礼状書ク。  
雑誌無尽灯、仏教団時ノ薬法、及雑誌現代之科学ヲ読ム。  
朝、平安朝史草説考按。

七月五日 土曜

【考按。府庁。六日出張先。贈位ノコト】

九月一日 月曜

史林編纂会、午後一時ヨリナリ。午前九時頃大学ニ行ク。内田博士逝去ノ原稿カク。編纂会午後五時迄カ、ル。

九月四日 木曜

夜講義草稿カク。十二時臥。

九月七日 日曜

午前内田先生宅、十二時カヘル。午後書斎とりかたづけ。夜鹿ヶ谷ニ大踊アリ。読書。十二時臥。

九月八日 月曜

午前大学ニ行ク。弁当持チ四時迄ゐる。内田先生宅ニ芸文（内田先生追悼号）三冊とゞける。川俣ニテ名刺注文。<sup>〔後一〕</sup>天沼氏宅史林原稿ヲ依頼スル。古建築ノ葉ヲ依頼。承諾セラル。史林ノバックナンバー見セルコト、送ルヘキコトヲ約ス。六時帰、入湯七時、食事、散歩小時、読書。グレトン中等階級〔Richaed H. Gretton, *The English middle class*, 1917〕ヲ読ム。満濟校正。十二時半臥。

九月九日 火曜

午前内田先生宅。<sup>〔竹林熊彦〕</sup>武林君と共に遺稿ノコト整理。卒業生の追悼会ノコト相談。其より大学研究室。<sup>〔直喜〕</sup>狩野部長より史林ノ挿画として唐人書する毛詩の写真版借受けて国史研究室ニ行く。中食。維新史ニ関スル洋書読ム。四時出で、原稿紙誂ヘル。大雨。雨に濡るゝ。服大に汚る。夜、内田先生ノ追悼記ノコト考ふ。

九月十日 水曜

【月、~~十六夜~~也。雨にて見ヘズ。深夜晴れて月光窓外ニ見ゆ】

午前雨大に降る。

内田先生宅に行くを中止して内田先生追悼記のこと考へ、午後同前。

夜散歩。原稿紙の誂文十六日出来ると云ふ。価参円九十銭。千枚ノ値也。追悼記書く。

牧野君ニ手紙。令弟ノ死去ニツキ弔詞及香資一円。

内田先生追悼記ノコト報ズ。

満濟校正。十二時過臥。

九月十一日 木曜

午前追悼記考フ。

九月十六日 火曜

夜遅シ。

九月十七日 水曜

講義、幕末史第一回。仏教大学〔現龍谷大学〕ハ逮夜ニツキ休講。坂本氏来ル。夜岡崎氏来ル。

九月十八日 木曜

雨夜大ニ降ル。向坂君宅ニ行カントスルガ雨ノ為メ中止ス。夜満濟校正スル。多ク進行サス。但シ少シノコル。

九月十九日 金曜

内田先生追悼記一寸見ル。後学校ニ行ク。牧野君ノ分モ共ニシテ大学ニテ事務室田中君ニ渡ス。研究室ニテ井上円了先生追悼録、東洋哲学ノ増大号読ム。中食後、満濟校正少シスル。竹林氏来る。内田先生書物大学寄托ノ件ニツキ相談。明日ノ追悼会ノコトモ打合ス。電話ニテ二条妙満寺ニ決定ヲ云フ。

史林編纂会四時マデ。研究室内の場所ヲ変ヘルコトニツキ相談。夜岡崎君明日出発ニツキ其宿ニ行ク。二十円借りテ内田先生ノ追悼会費用トシ妙満寺ニ行ク。明日ノコト打合せ、其レヨリ丸太町ノ紙屋ニテ罫紙ノ注文セルモノヲトリニ行ク。出来テ居ラズ。向坂君宅ニ行き、坂本氏ノコト依頼ス。帰宅後満濟校正シ多ク進行サス。貨幣ノコト研究案ヲツクル。一時寐。

【朝雨、午後霽】

九月二十日 土曜

午前内田先生宅ニ行ク。奥様に本日法要のこと案内する。岡崎君に行く。二十円返却、旅装を手伝ふ。其より帰宅して二時過妙満寺に行く。昼は岡崎氏と共に学生集会所にて食事。内田先生追悼会は三時半よりはしまる。奥様の御参詣あり。四時半終。

以後学生等と共に記念事業のこと相談したり。油絵二面調整之上研究室及び御宅に献上することと決す。六時散会。米沢氏と共に八新にて食事、かぎやにて菓子食して帰る。

入唐求法巡礼行記読む。

九月二十四日 水曜

秋季皇霊祭。午後東山將軍塚ニ上ル。夜早寐。

九月二十五日 木曜

講義下調と講演ノ下調。夜遅クナル。

九月二十六日 金曜

講義。後読史会ノ講演スルニツキ下調。

夜読史会。<sup>〔豊永〕</sup>源君、道元禪師ノコト。余、菅太仲先生と福山藩教育。三浦先生、戦国時代武士ノ自叙伝。

九月二十七日 土曜

研究室ノ整理と云ふので学校に行く。午後かへり小寝。夜、大津ノ国民講座ノ講演に行く。

九月二十八日 日曜

祓禊考読む。

午後、洛西ノ御土居ノ現状見に行く。太秦ヨリかへる。坂本氏来ル。

九月三十日 火曜

午前読書。午後、学校ニ行クトコロ記録研究のことにつき狩の部長より云はる。其れの調書つくる。

十月一日 水曜

記録の研究についての調査する。講義休み。午後教授会に出で、記録研究のこと説明スル。

十月二日 木曜

朝原稿ツクル。午後学校ニ行ク。読書。美術大観

等読ム。夜原稿ツクル。学校ヨリカヘルトキ大西母来宅シテアリ。談話シ九時半ヨリ原稿ツクル。三時マデカゝル。

十月三日 金曜

朝早く起きて講義ニ行ク。大西母かヘル。二時かへり食事。小時間寐る。後散歩する。三浦先生に手紙かく。午後二時出ス。

十月四日 土曜

午前読書。午後、史学研究会にて聴講に行く。曲舞について、岩橋小弥太君。ロマンチック時代の一青年史家ノ生立、坂口先生。坂口先生のはランケの青年時代ノコトヲ云ハル。

夜、坂本卓章君来て松浦嘉三郎君来ル。共に談話ス。梅原末治君学部雑用の為め来ル筈ノ処来ラズ。

十月五日 日曜

【心地あしき天候なり。面家氏手紙出ス】

午前手紙かく。

一燈園来ル。午後京都ホテルに<sup>〔Elizabeth Anna Gordon〕</sup>ゴルドン夫人を訪問スル通弁ヲ頼マル。行きて夫人に会ふ。種々の談話をなす。

夜、岩橋君宅ニ行キ三十分談ス。かへりて今夜ハ早く寐ル。

十月六日 月曜

【向坂君電話アリ】

午前、六条活版所主来ル。校正ノコト打合ス。午後研究室。幕末史研究。六時半ヨリ留学助教授送別。<sup>〔宇〕</sup>羽田、<sup>〔正造〕</sup>園、<sup>〔清作〕</sup>菊川氏来賓。八時済む。十時ヨリ読書。解放十月号読ム。栄花物語を読む。

十月十日 金曜

【大阪へ行クコト】



『京都大学大学文書館研究紀要』編集要項

1. 京都大学大学文書館に、京都大学大学文書館研究紀要（以下、「研究紀要」という。）の構成および内容に関する基本的計画の立案その他編集の総括を行うため、京都大学大学文書館研究紀要編集委員会（以下、「編集委員会」という。）を置く。
2. 編集委員会に委員長を置き、大学文書館長をもってあてる。委員は大学文書館教員とする。
3. 研究紀要には、京都大学および高等教育の歴史、アーカイヴズ論等に関する論文、研究ノート、資料紹介、書評等を掲載する。
4. 論文は、400字詰原稿用紙換算で60枚以内、研究ノートは40枚以内、資料紹介は80枚以内、書評は20枚以内とする。ただし、編集委員会で特に認めた場合はその限りではない。
5. 研究紀要に執筆することができるのは、京都大学大学文書館の教職員のほか、学内外を問わず編集委員会で選任して依頼した者、執筆を希望して編集委員会で認められた者とする。
6. 原稿は原則として未発表のものに限る。

## 編集後記

『京都大学大学文書館研究紀要』第18号をお届けします。今回は論文4本、資料紹介1本を掲載することができました。

西山論文は、戦後の新制大学が自らの管理制度を築き上げていく姿を神戸大学の学長選考に注目し描き出しました。富永論文は、戦時下における学内の外部資金獲得状況を分析し、大学が研究を行う意味を私たちに問いかけます。元論文は、二つのイギリス州立公文書館がアーカイブズ機関を支援する大型外部資金を活用した事例を調査しました。川口論文は、京都帝国大学附属図書館で戦争末期に行われた蔵書疎開について一次資料による解明に取り組みました。

資料紹介では当館が所蔵する西田直二郎日記のうち明治時代末から大正時代の日記5年分を翻刻しました。西田の研究活動を具体的に検証する際の基礎資料として注目されます。

2004年の国立大学法人化以降、各国立大学は「あるべき姿」を求めて模索を続けています。大学史・高等教育史、アーカイブズ論における研究は、現在の大学の姿を記録し、これからの大学の在り方を考える上でも重要な役割を果たすのではないのでしょうか。

今後とも、京都大学大学文書館および本研究紀要を御指導くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

(大学文書館助教 川口 朋子)

---

### 京都大学大学文書館研究紀要 第18号

---

2020(令和2)年3月19日発行

編集 京都大学大学文書館研究紀要編集委員会

発行 京都大学大学文書館

〒606-8305 京都市左京区吉田河原町15-9

電話 075(753)2651

印刷 ヨシダ印刷株式会社

〒532-0011 大阪市淀川区西中島5-8-3

新大阪サンアールビル北館6階

電話 06(6305)7888

---

# Research Bulletin of Kyoto University Archives

No.18

## ARTICLE

Selection of the President at Kobe University in 1953

NISHIYAMA Shin < 1 >

## ARTICLE

Academic Researches in Kyoto University during World War II

TOMINAGA Nozomu < 15 >

## ARTICLE

Utilization of Fundraising for Local Archives in England

WON Nami < 37 >

## ARTICLE

Library Evacuation in Kyoto Imperial University  
— Focusing on a Case of the Attached Library's Valuable  
Collection of Japanese and Chinese Books —

KAWAGUCHI Tomoko < 53 >

## MATERIAL

The Diary of Naojiro Nishida (1)

IRIYAMA Yoko < 69 >

Kyoto University Archives

2020. 3 . 19